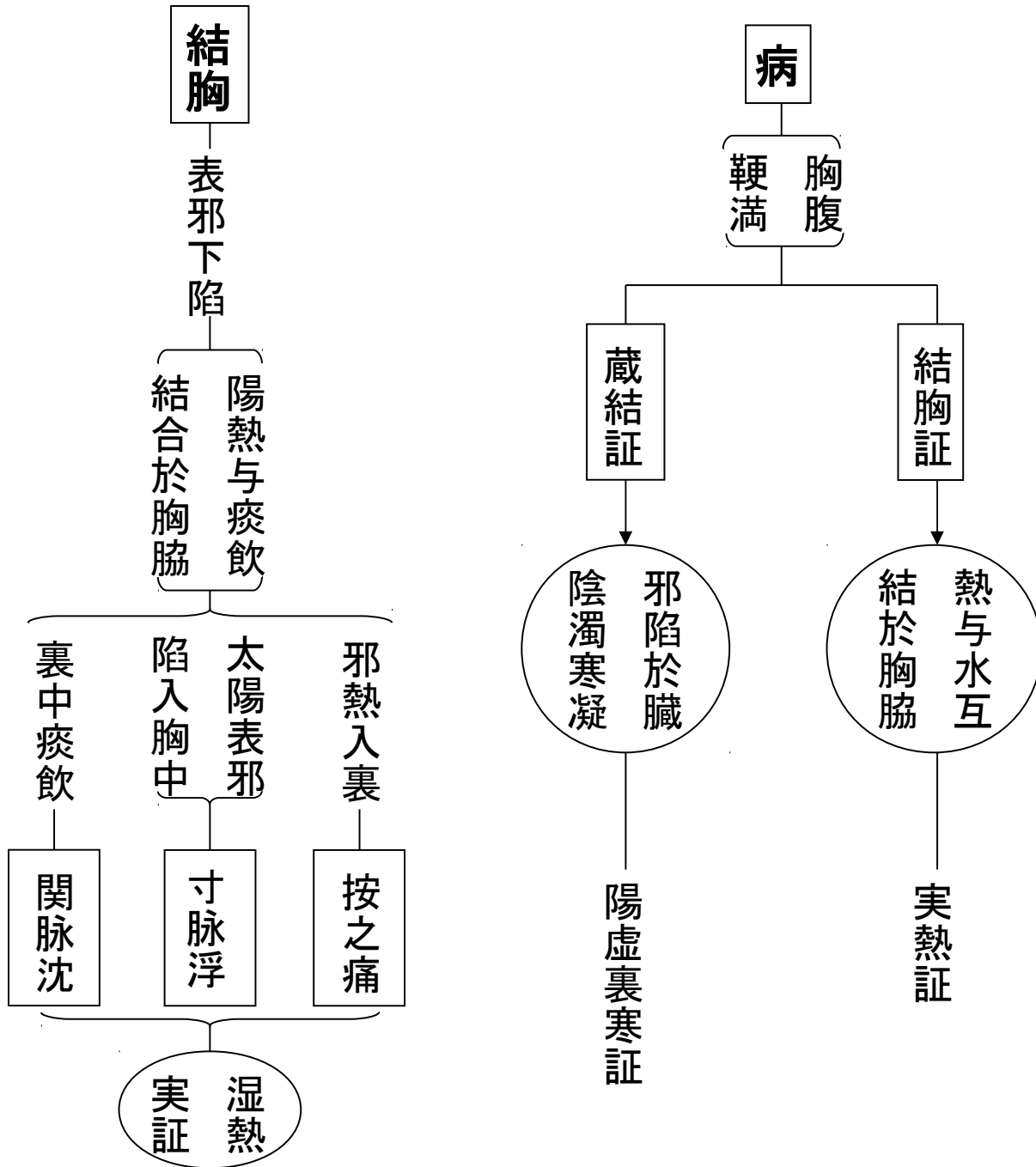


并太陽病脉証并治下

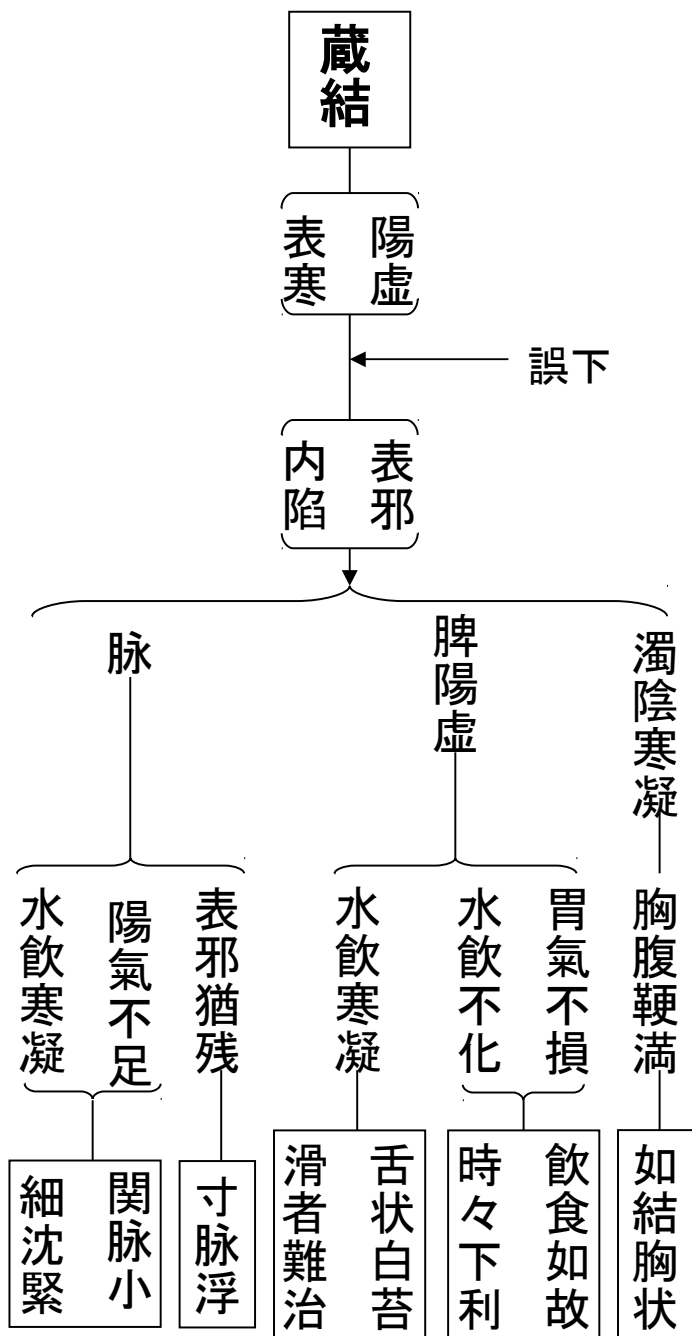
第二八条 問曰、病有結胸、有藏結、其狀如何。

答曰、按之痛、寸脉浮、関脉沈、名曰結胸也。



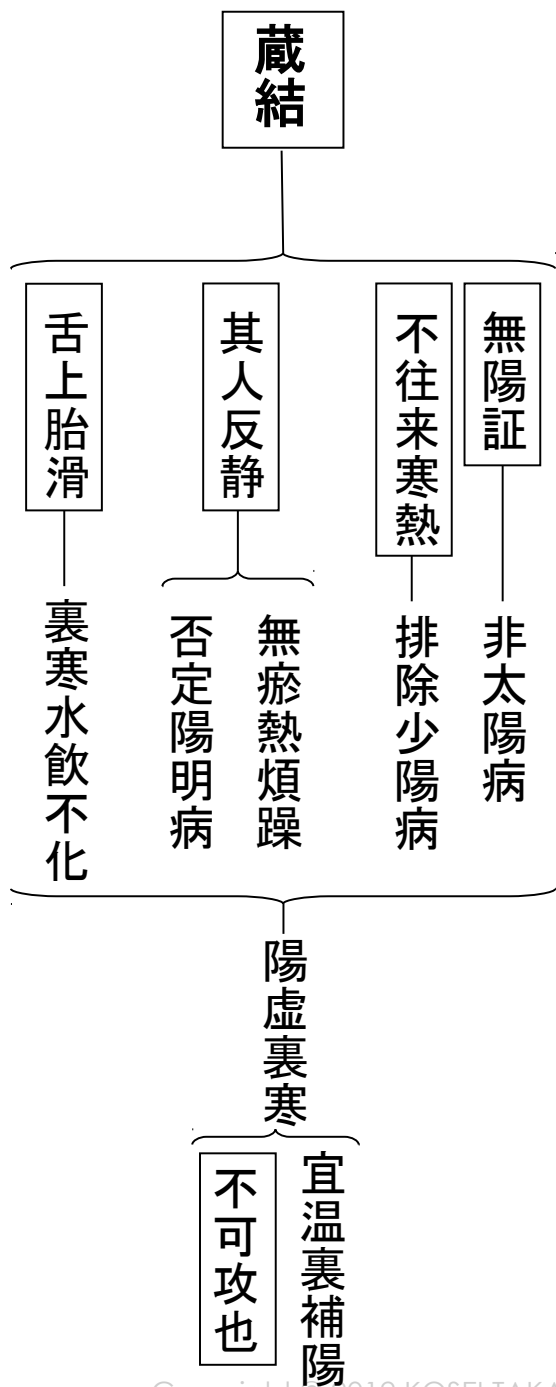
第一二九条 何謂藏結。答曰、如結胸狀、飲食如故、時時下利、

寸脉浮、関脉小細沈緊、名藏結。舌上白胎滑者難治。

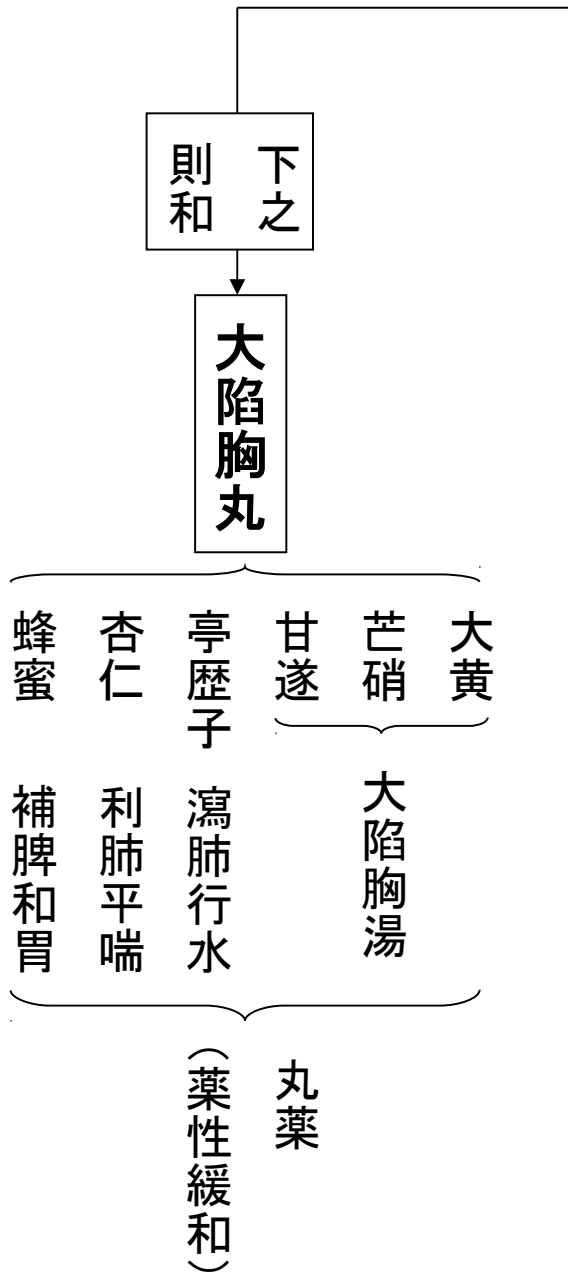
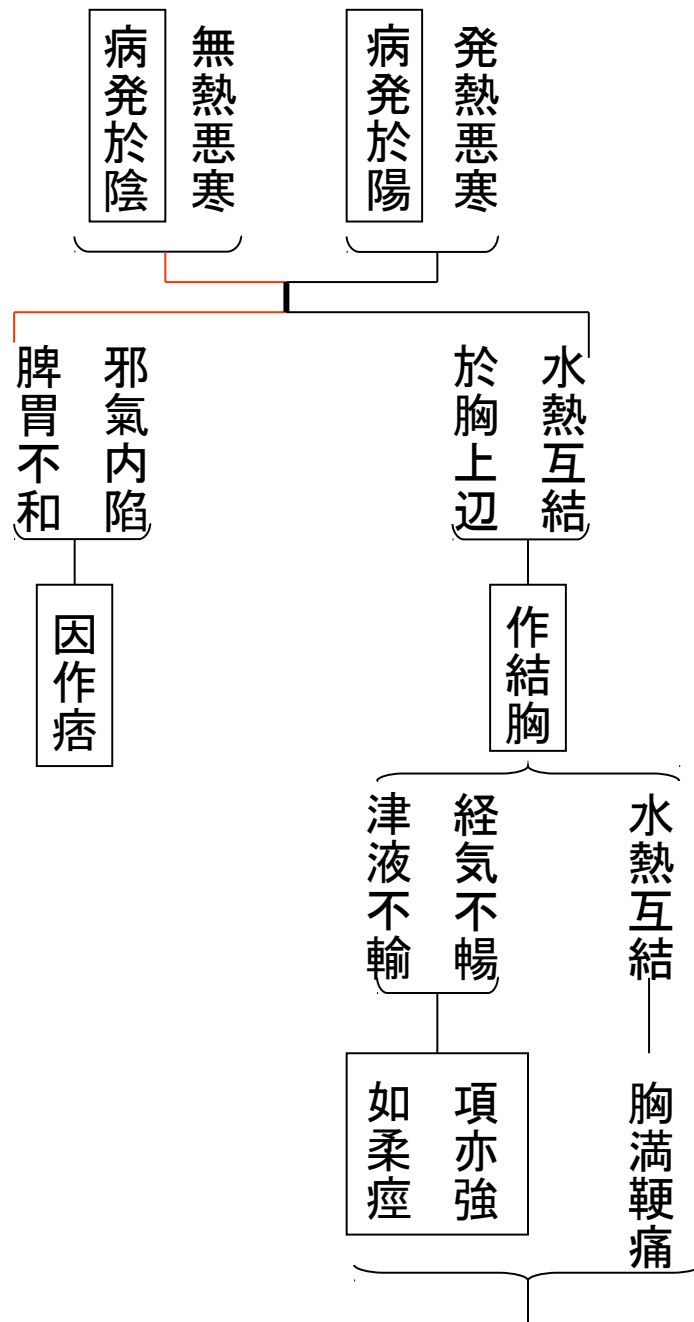


第一三〇条 藏結、無陽証、不往来寒熱、其人反静、舌上胎滑者、

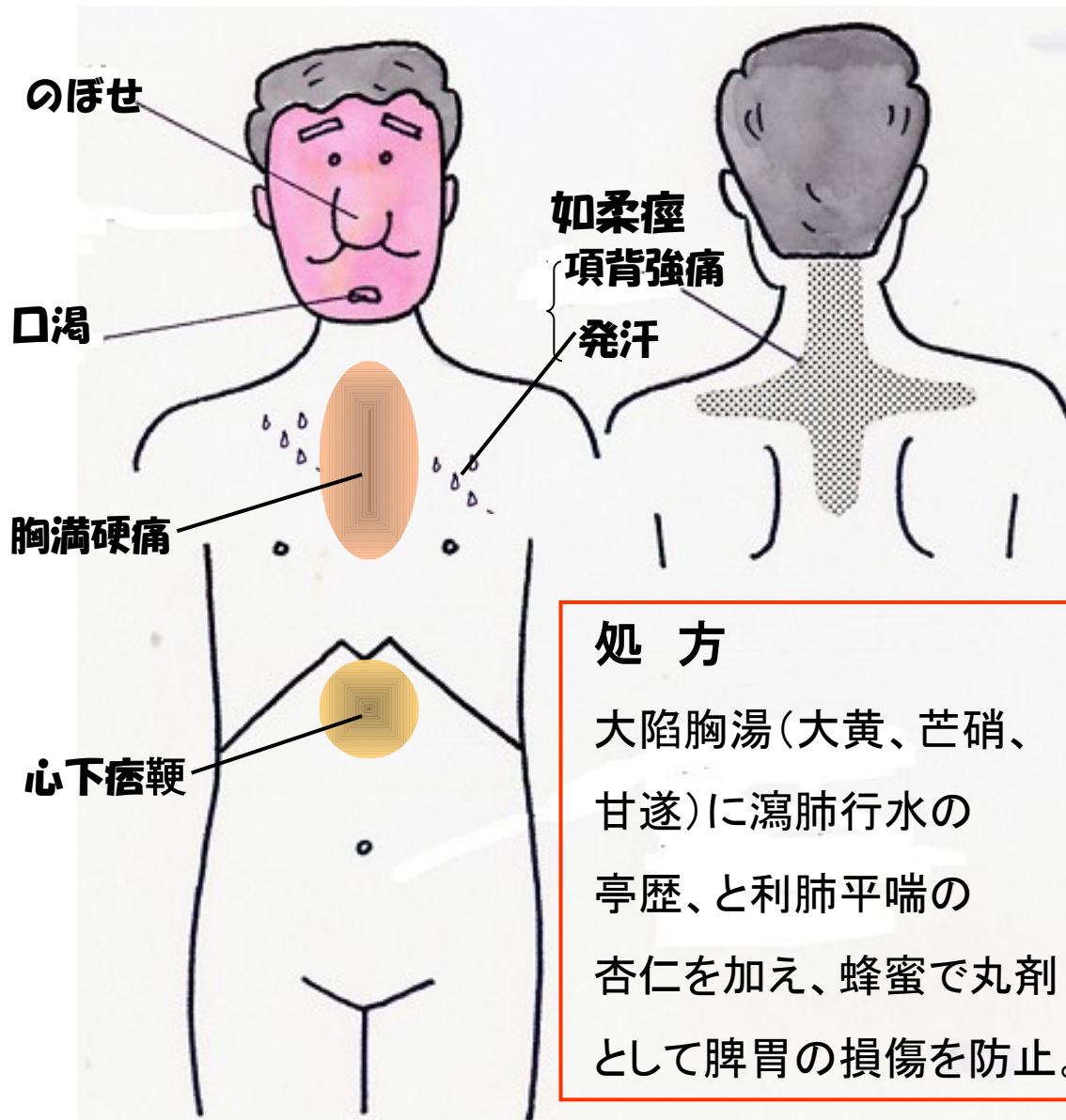
不可攻也。



第一三一条 病発於陽、而反下之、熱入因作結胸、病発於陰、而反下之、因作痞也。所以成結胸者、以下之太早故也。結胸者、項亦強、如柔痙狀、下之則和、宜大陷胸丸。



大陷胸丸の証



処 方

大陷胸湯(大黃、芒硝、甘遂)に瀉肺行水の亭歴、と利肺平喘の杏仁を加え、蜂蜜で丸剤として脾胃の損傷を防止。

方 意

太陽病で表邪が残存しているのに、誤って之ヲ下した結果、内陷した邪熱と胸中の痰飲が結合して胸中上辺に結胸証を生じたものである。

熱実結胸であるが、邪の結した位置が胸中の高位にあるために水熱の邪が太陽膀胱経脉に迫り、経脉の経気と津液の流通が阻害される結果、胸満鞭痛の他に、柔痙に似た項背胸痛と、邪熱の内鬱に因る発汗が見られる。

太陽病誤下に因る諸変証

一、氣の上衝

正氣が邪を反撥 → 氣が上衝 → 桂枝湯

二、邪が内陷

咽喉 → 桂枝去芍薬湯

肺 → 表邪犯肺 → 虚寒 → 桂枝加厚朴杏仁湯
実熱 → 麻杏甘石湯

胸膈 → 単独の邪 → 虚煩証 → 梔子湯類

水熱互結 → 結胸証 → 陷胸湯類

湿熱内鬱 → 黄疸 → 大陷胸湯

脾胃 → 但氣痞耳(邪氣単独) → 心下痞(脾胃不和) → 瀉心湯類

胃家実(邪と宿食互結) → 陽明腑証 → 三承氣湯

協熱下利(邪が表裏共在) → 実熱証 → 葛根黄芩黄連湯
虚寒証 → 桂枝加人参湯

腎 → 腎虚の下痢 → 赤石脂禹余糧湯

半表半裏(少陽) → 柴胡加竜骨牡蠣湯

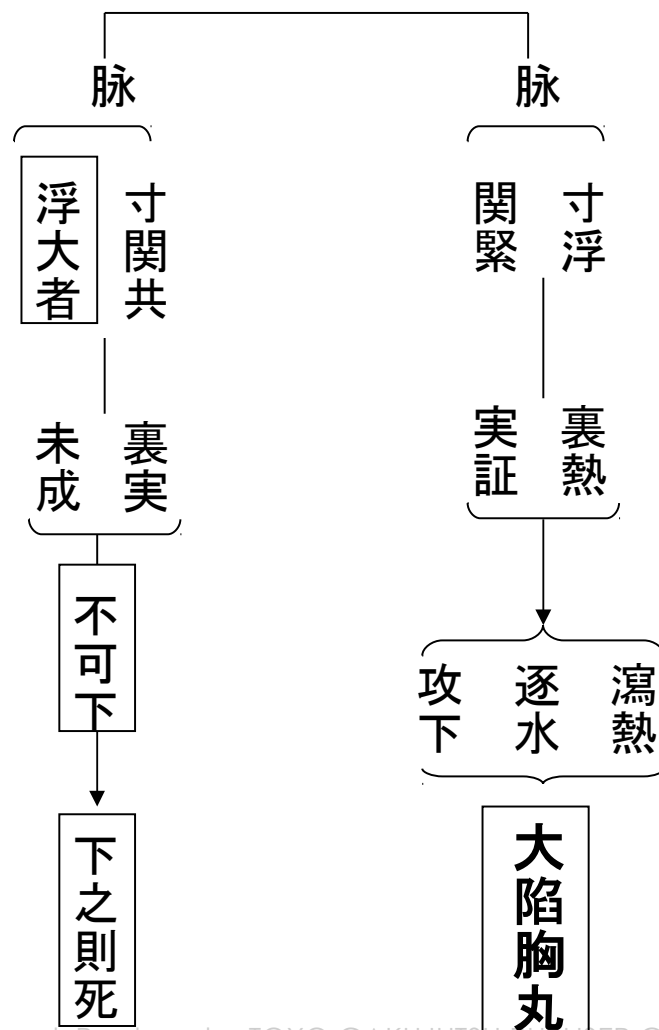
裏に伝経 → 腑 → 太陽腑証(膀胱) → 蓄水証 → 五苓散
蓄血証 → 桃核承氣湯

臟 → 太陰(桂枝加芍薬湯) → 少陰(四逆湯)

第一三二条 結胸証、其脉浮大者、不可下、下之則死。

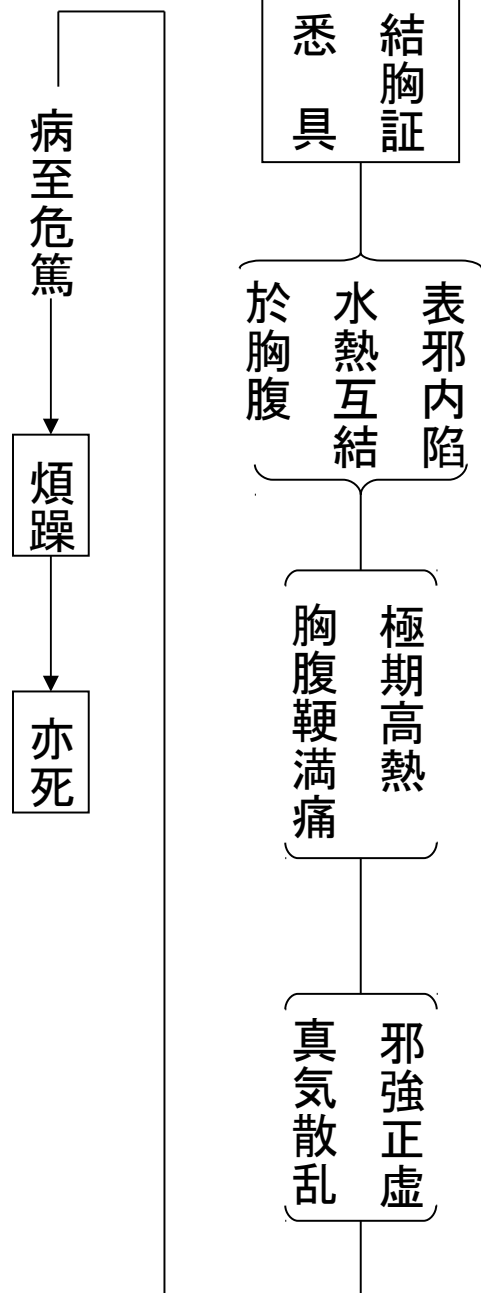
結胸証

胸痛
按痛



第一三三条 結胸証悉具、煩躁者亦死。

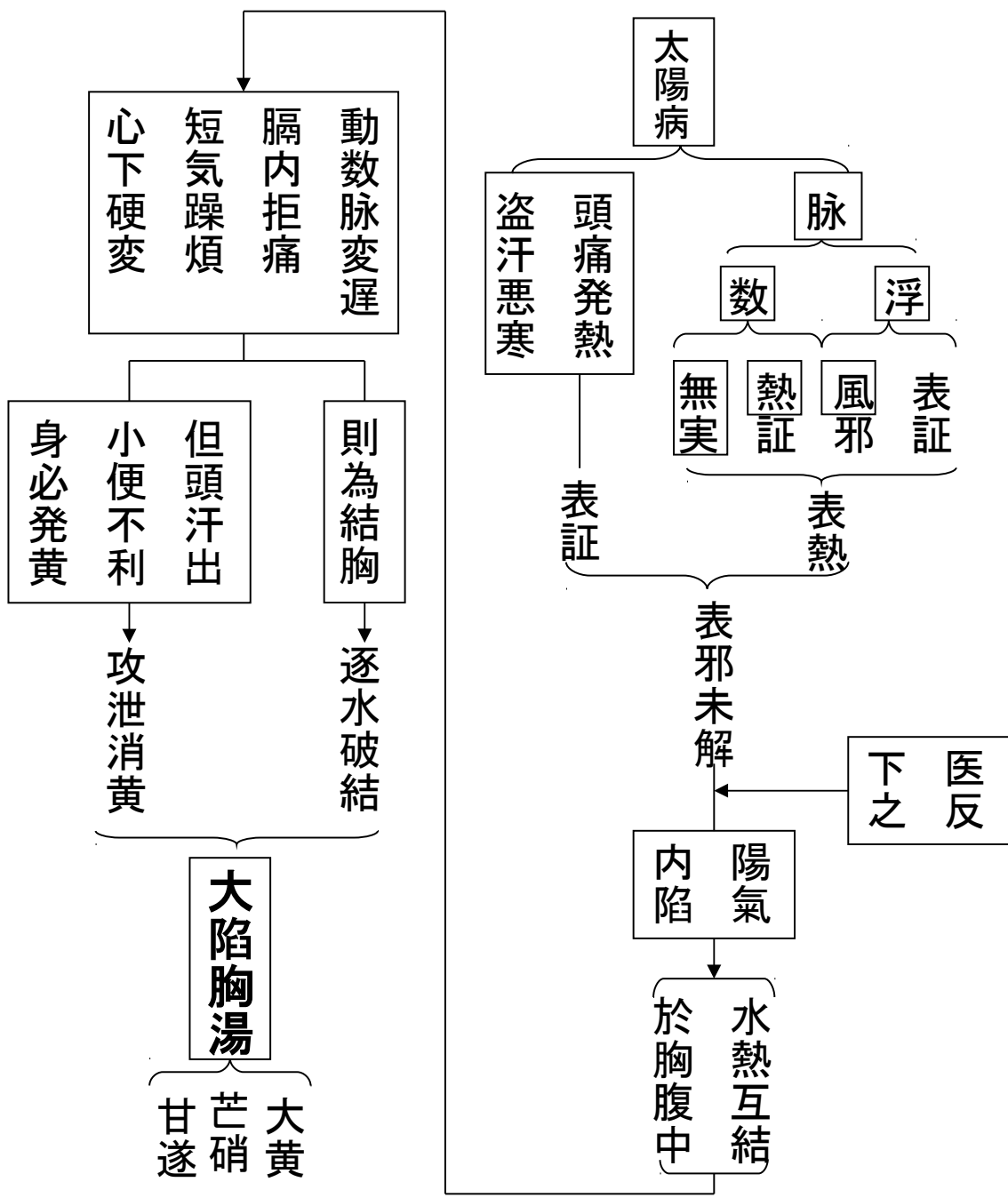
結胸証
悉具



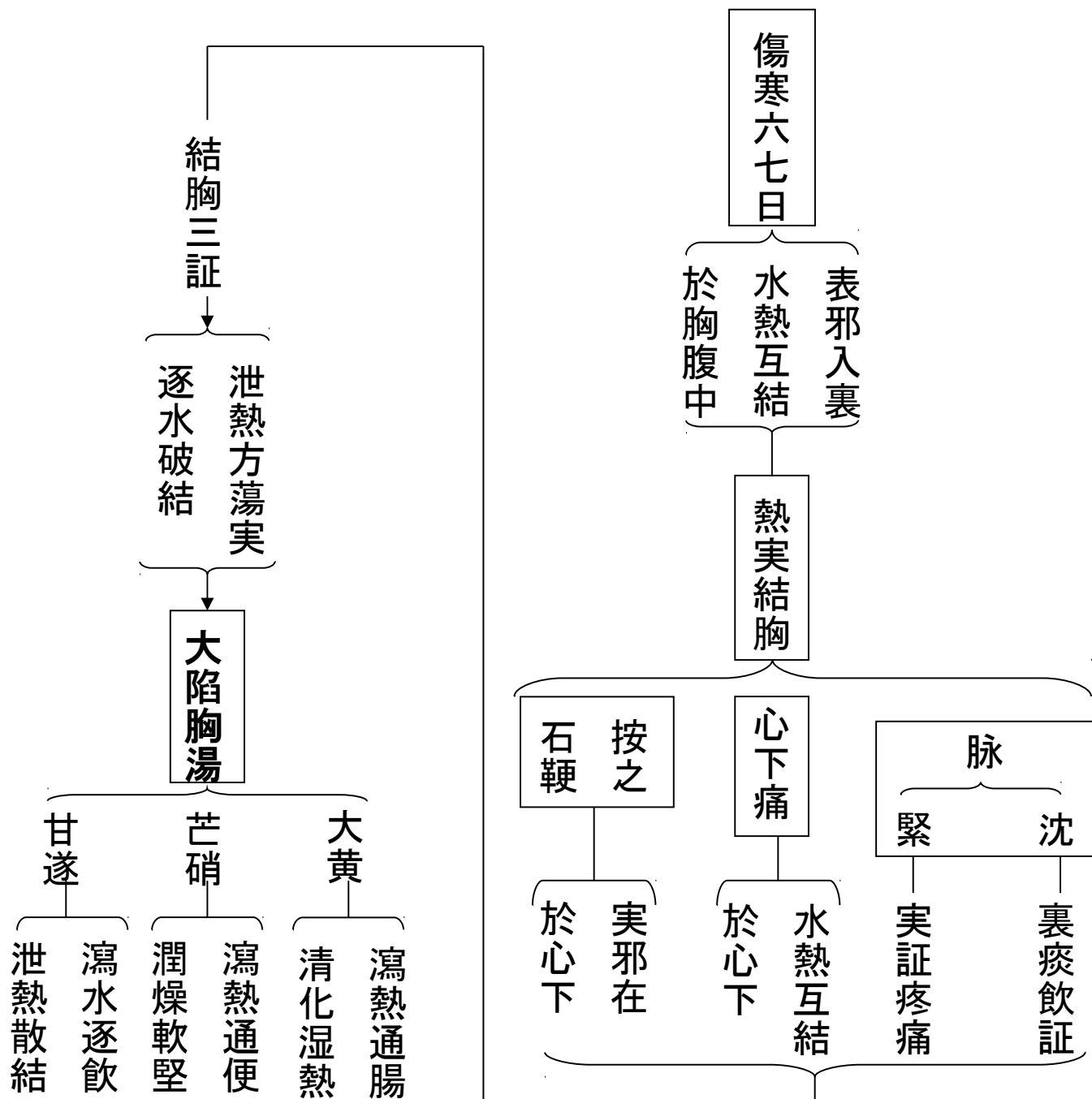
第一三四条 太陽病、脉浮而動数、浮則為風、数則為熱、動則

為痛、数則為虛。頭痛、發熱、微盜汗出、而反惡寒者、表未解也。医反下之、動数變遲、膈内拒痛、胃中空虛、客氣動膈、短氣躁煩、心中懊惱。陽氣内陷、心下因鞅、則為結胸、大陷胸湯主之。

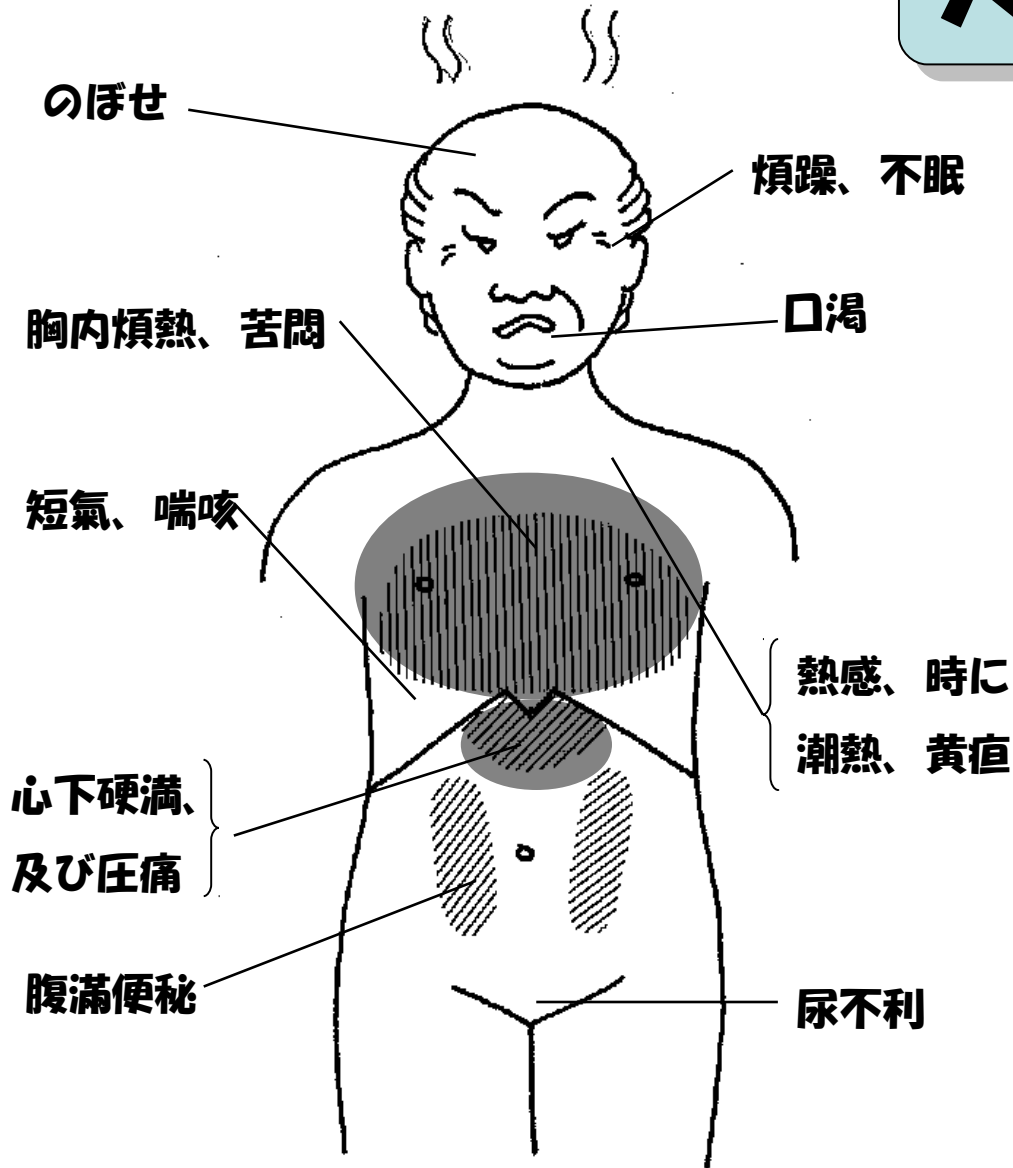
若不結胸、但頭汗出、余処無汗、劑頸而還、小便不利、身必發黃。大陷胸湯。



第一三五条 傷寒六七日、結胸熱実、脉沈而緊、心下痛、按之石鞭者、大陷胸湯主之。



大陷胸湯の証*



方 意

表邪が胸脇に内陷して、邪熱と痰飲が結合して生じる結胸証を主治する。

方 証

主証：心下痛、按之石鞭、脉沈緊。

客証：心下より少腹まで鞭満疼痛し、舌上燥渴、胸中煩悶し、便秘。時に日晡潮熱や黄疸もある。

処方構成

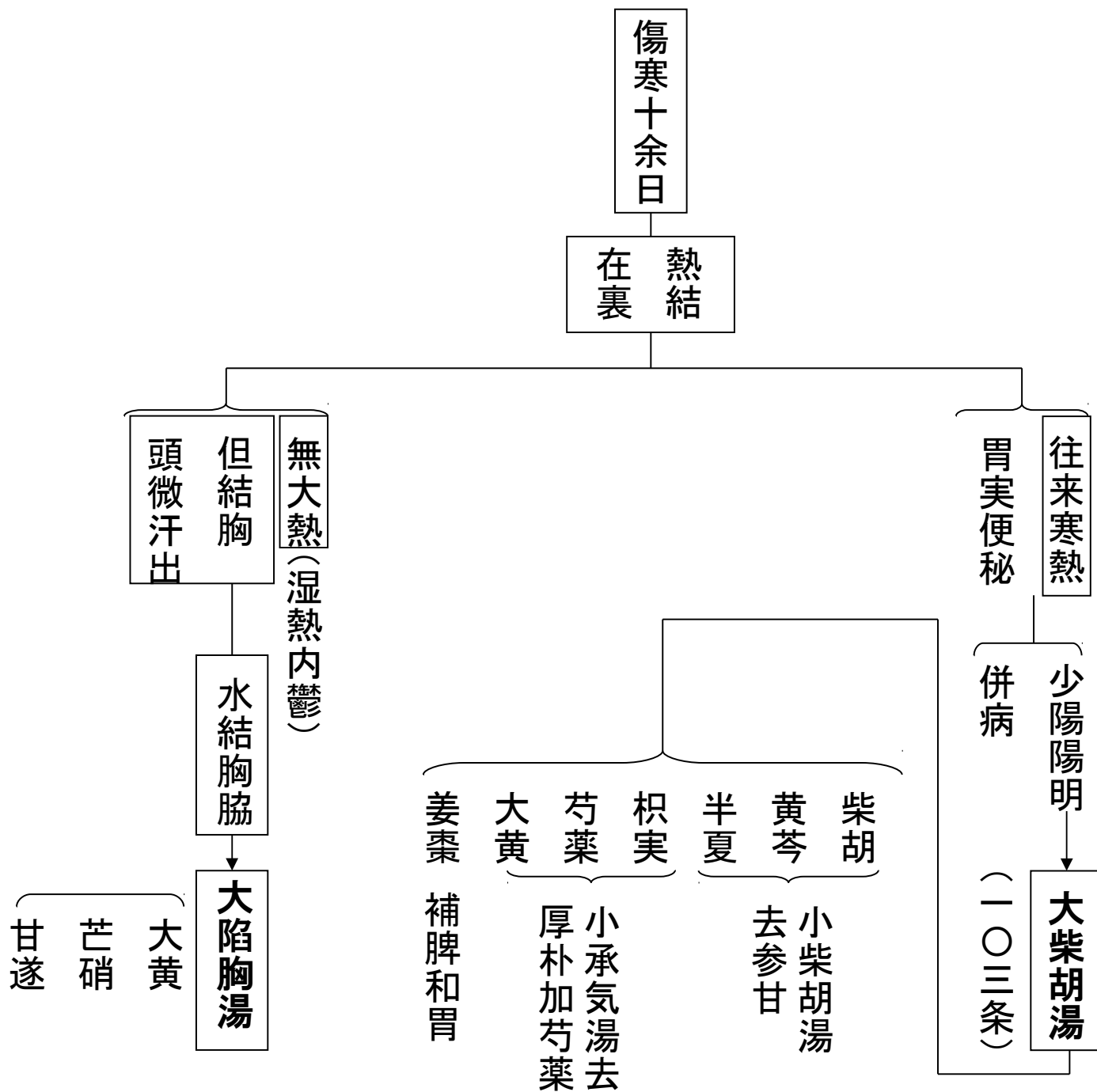
君薬：大黄6両。瀉熱通腸、清化湿熱。

臣薬：芒硝1升。瀉熱通便、潤燥軟堅。

佐使薬：甘遂1錢七。瀉水逐飲。

第一三六条 傷寒十余日、熱結在裏、復往来寒熱者、與大柴胡

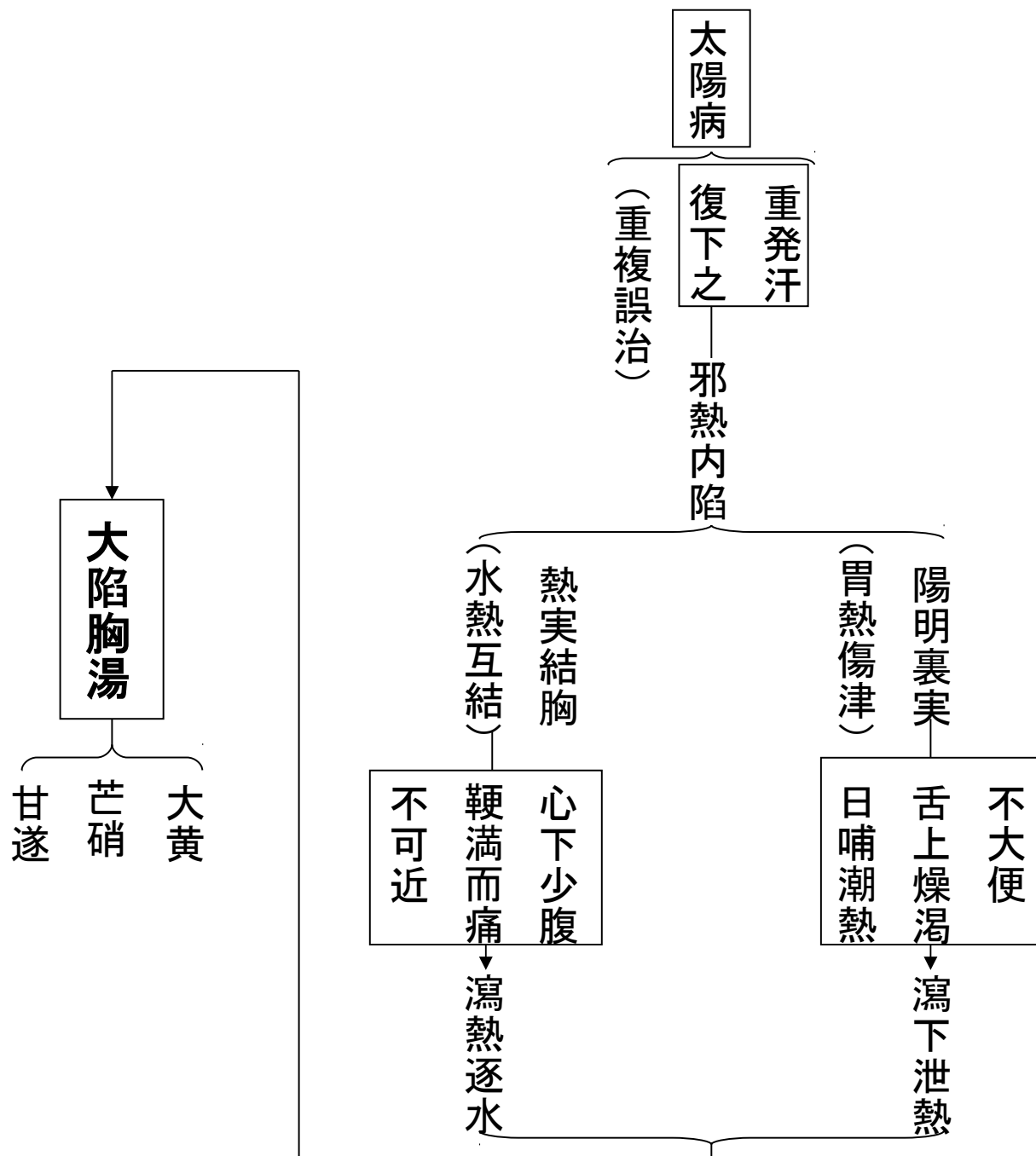
湯。但結胸、無大熱者、此為水結在胸脇也。但頭微汗出者、大陷胸湯主之。



第一三七条 太陽病、重発汗而復下之、不大便五六日、舌上燥

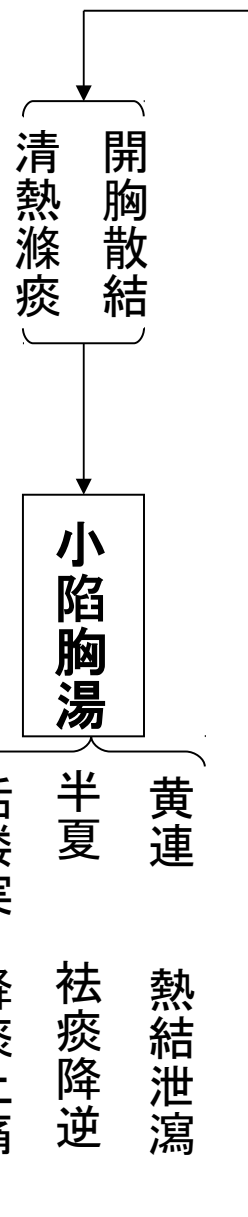
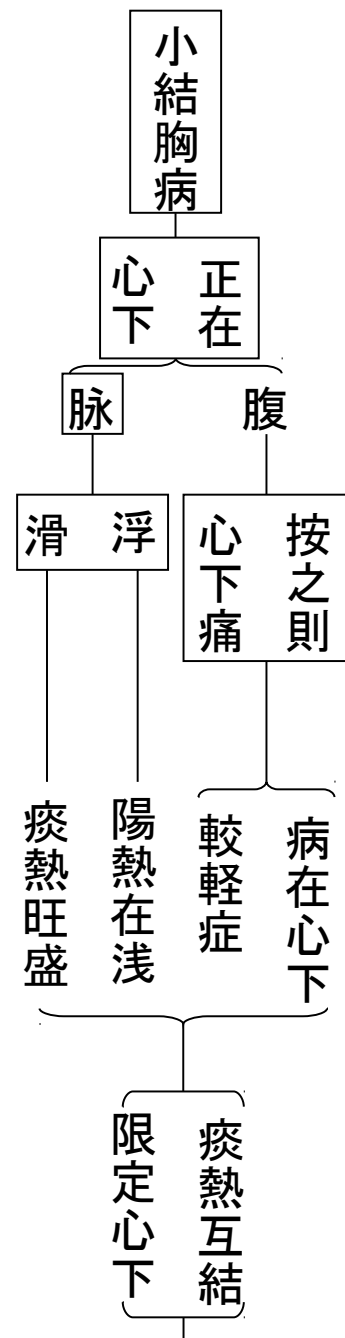
而渴、日晡所少有潮熱、從心下至少腹鞭滿而痛不

可近者、大陷胸湯主之。

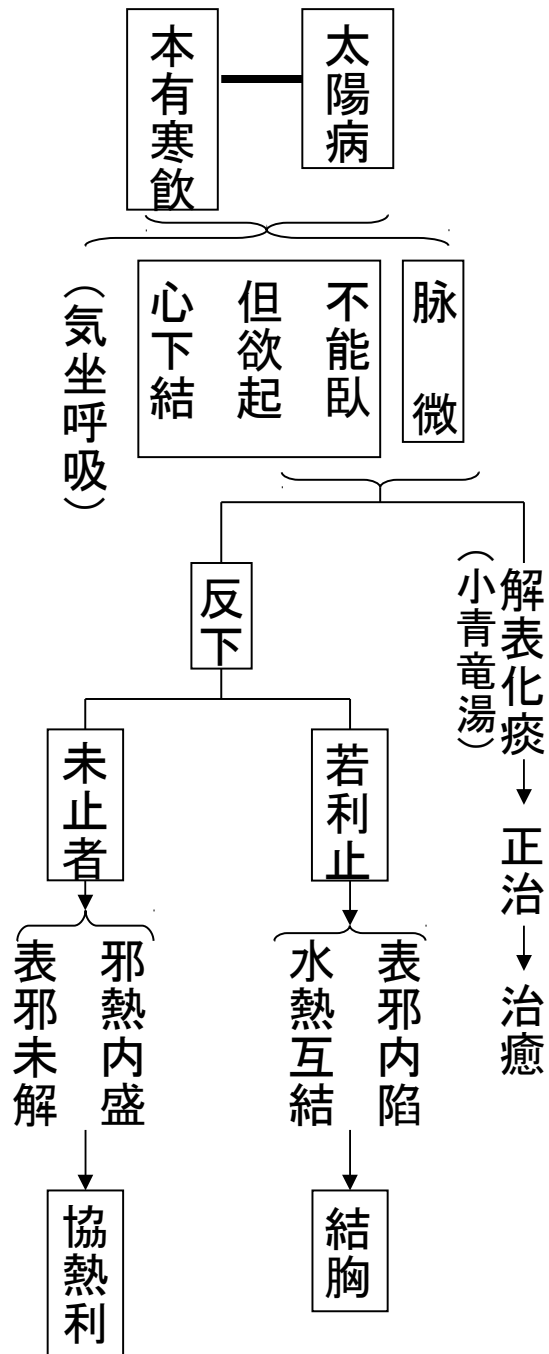


第一三九条 少結胸病、正在心下、按之則痛、脉浮滑者、小陷

胸湯主之。



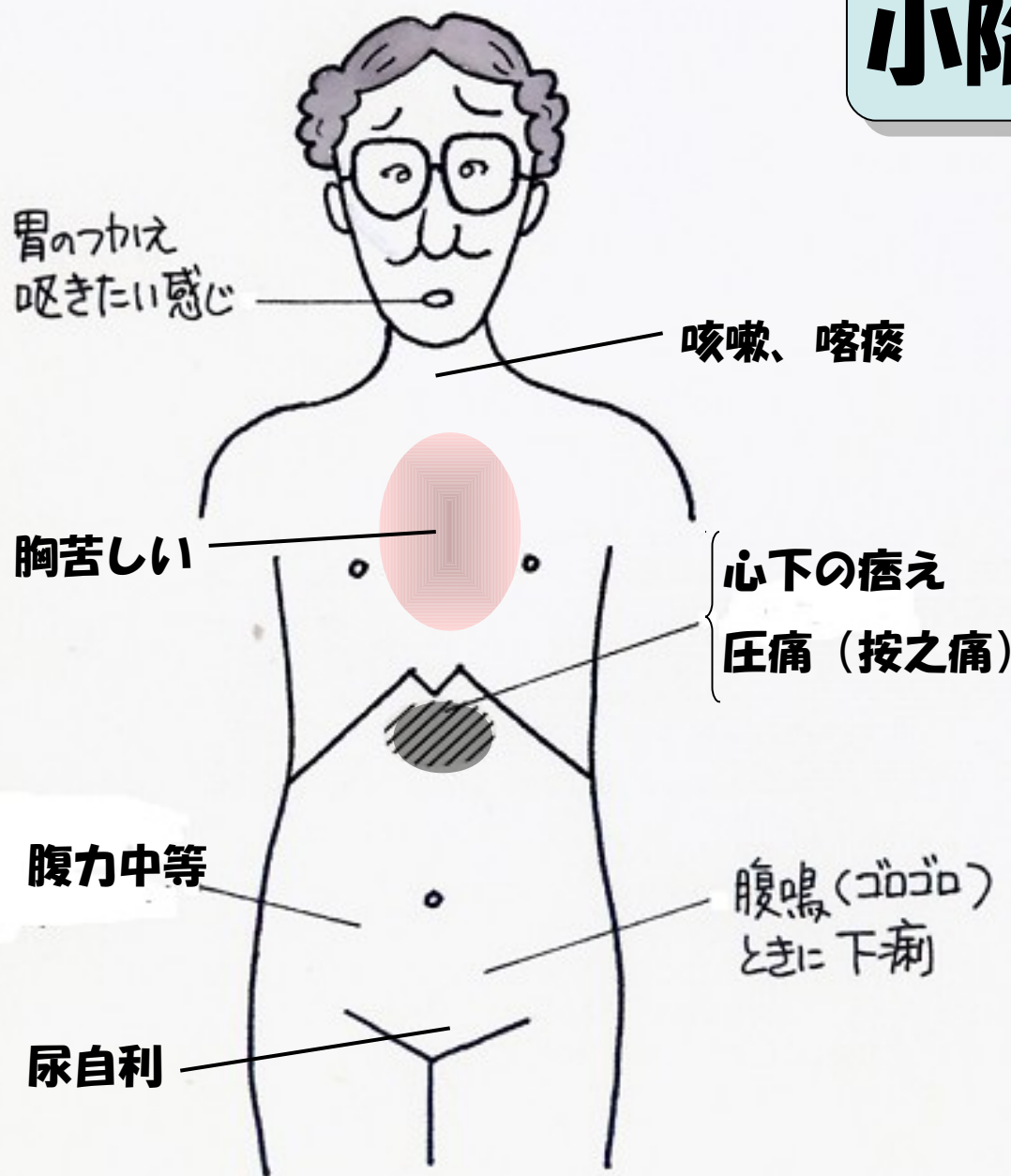
第一三九条 太陽病二三日、不能臥、但欲起、心下必結、脉微弱者、此本有寒分也。反下之、若利止、必作結胸。未止者、四日復下之、此作協熱利也。



小陷胸湯の証

方 意

小結胸病を主治する処方である。
小結胸とは太陽病の邪が内陷し、
心下で邪熱と痰飲が結合した病
証で、大結胸証と比較すると病変は
浅く、心下に局限しているので軽い。
痰熱に因り肺気の肅降が阻害され、
咳嗽及び黄色喀痰を伴う。
脉は大結胸証の沈緊に対し浮滑、
舌は紅色湿、黄膩苔を有す。
腹証は心下に痞塞感はあるが自発
痛は無く、之を按じると始めて痛みを
感じる。



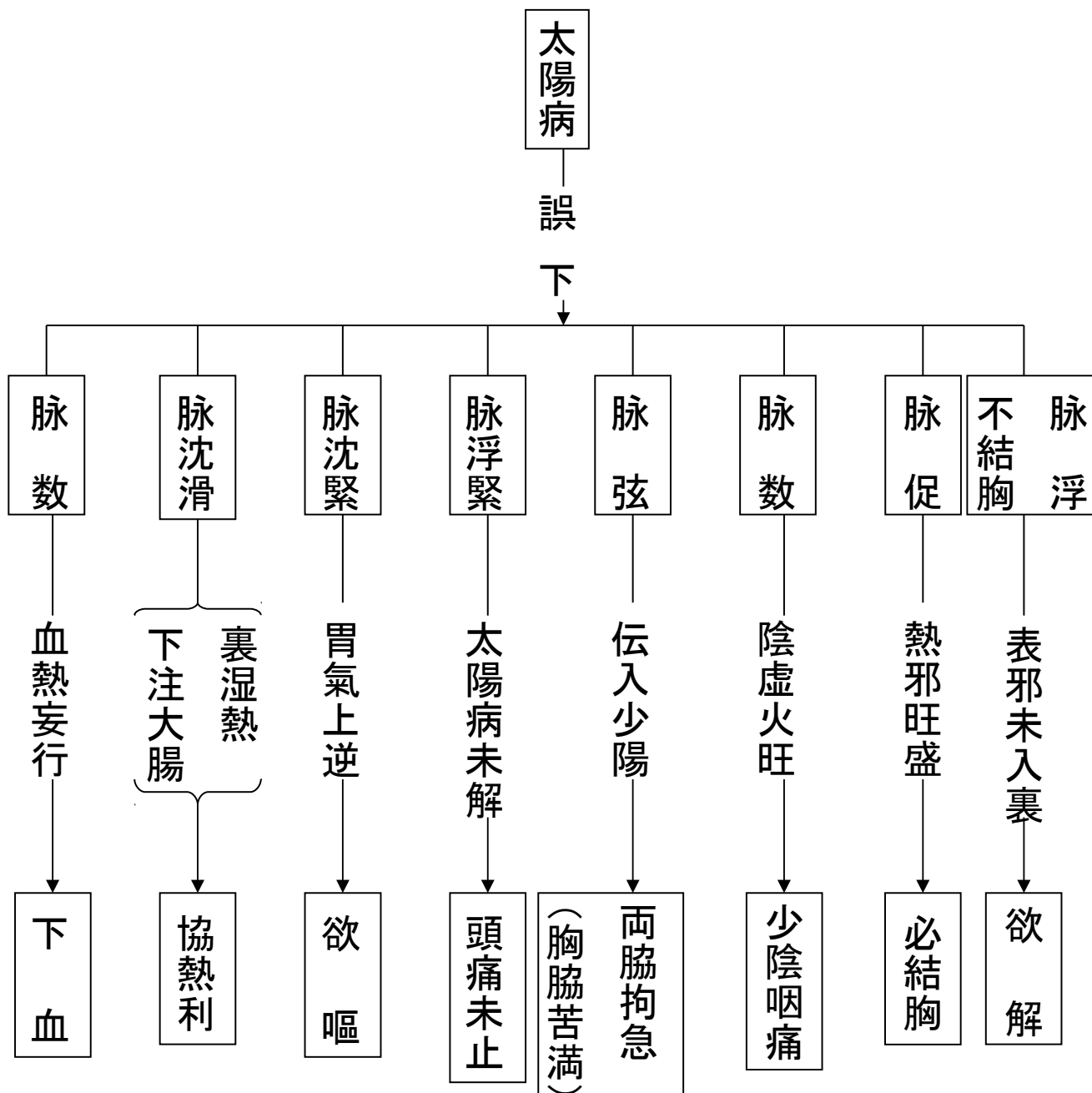
第一四〇条 太陽病、下之、其脉浮（原文“促”）、不結胸者、此

為欲解也。脉促（原文“浮”）者、必結胸。脉細數

（原文“緊”）者、必咽痛。脉弦者、必兩脇拘急。脉緊

（原文“細數”）者、頭痛未止。脉沈緊者、必欲嘔。

脉沈滑者、協熱利。脉數（原文“浮滑”）者、必下血。



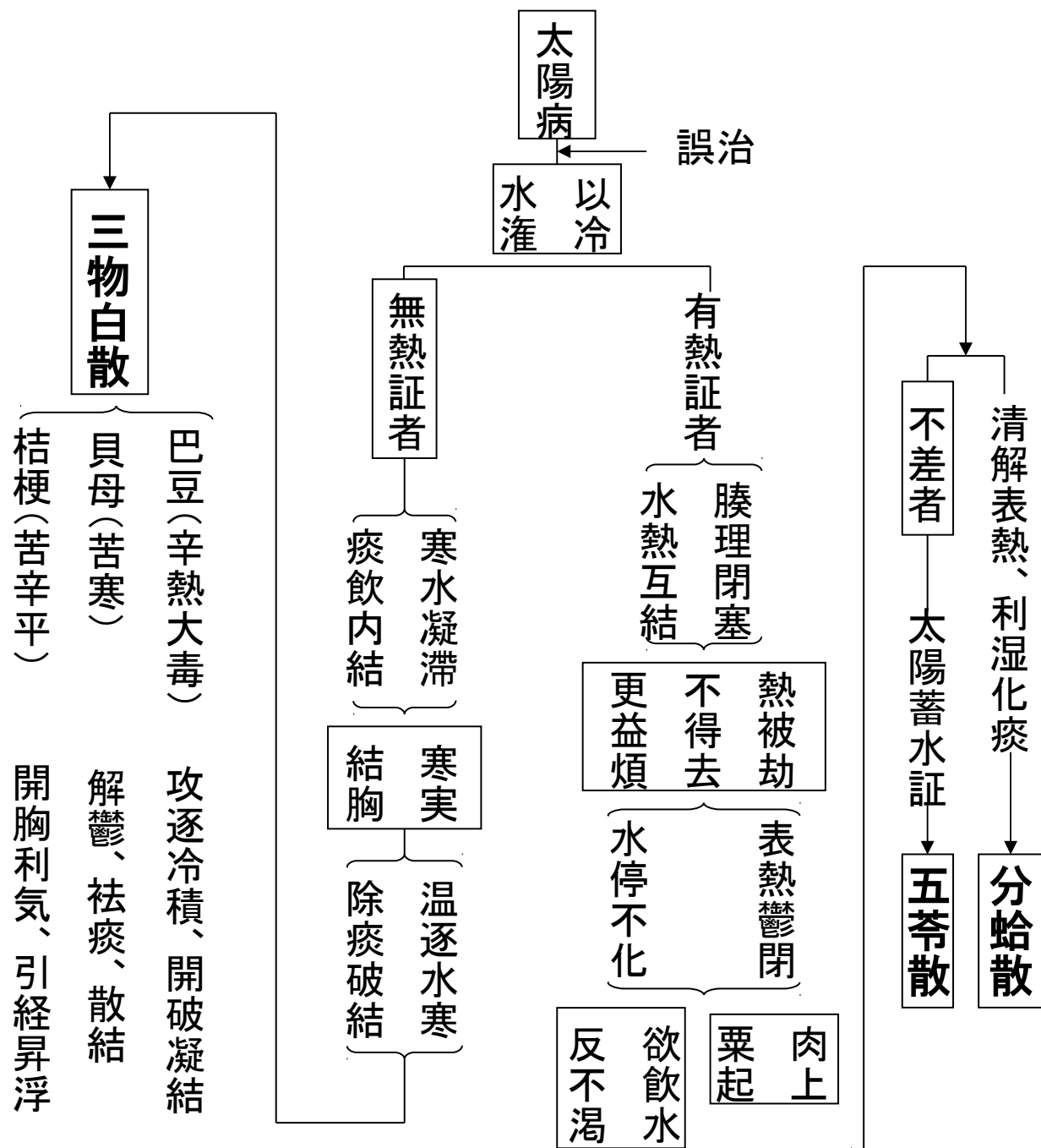
一四一条 病在陽、応以汗解之。反以冷水濯之。若灌之、其熱

被劫不得去、弥更益煩、肉上粟起、意欲飲水、反不

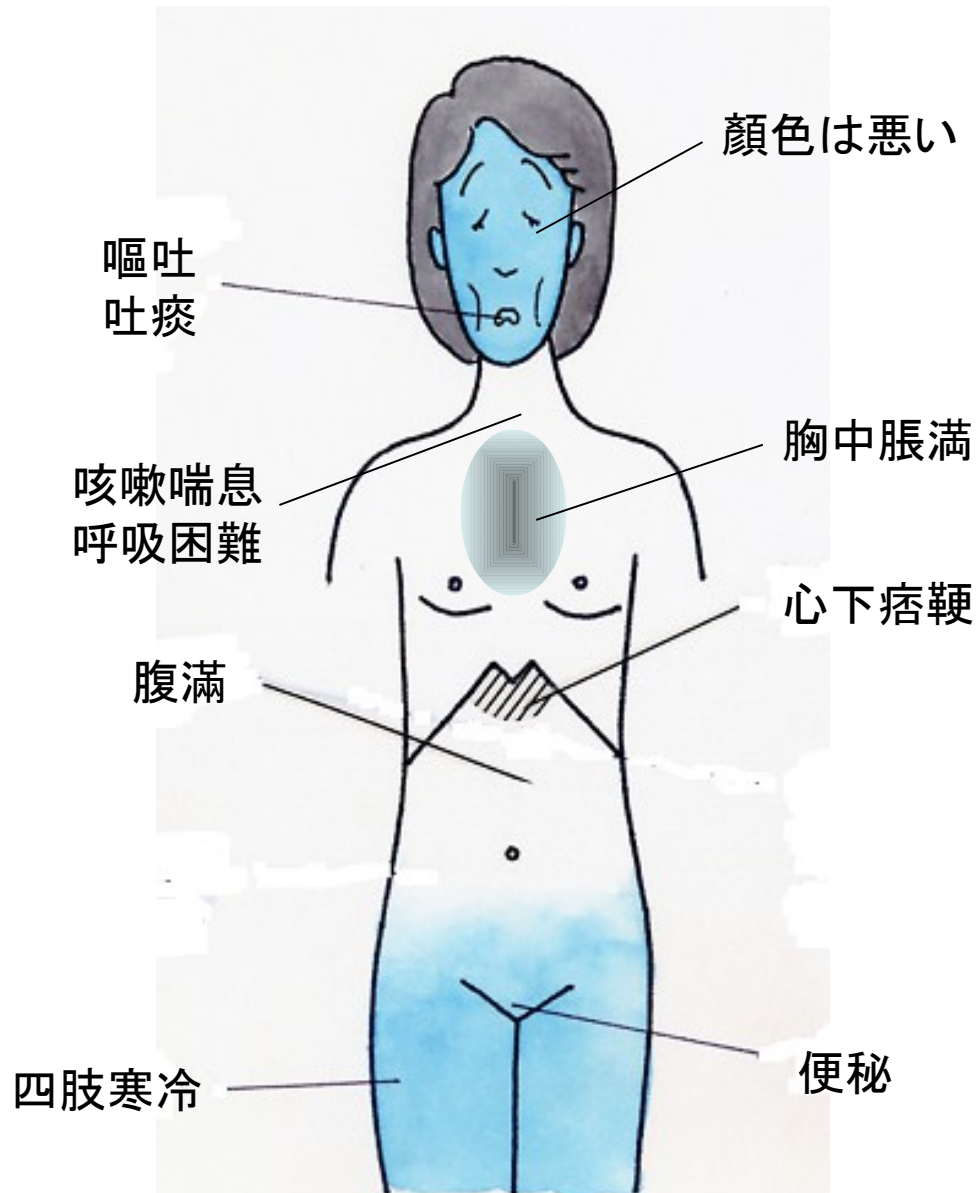
渴者、服文蛤散。若不差者、與五苓散。

寒実結胸、無熱証者、與三物（小陷胸湯）白散（亦

可服。



寒実結胸を主治する 三物白散の証



方 意

結胸証には熱実結胸と寒実結胸の別がある。

寒実結胸は寒邪と痰飲が心下で強く結合して形成される。

症状は胸中脹満、咳嗽喀痰、呼吸困難と便秘或は嘔吐などの急迫症状があるが、熱証は無く、常時悪寒して暖を好む。

顔色悪く、心下痞鞭し、脉沈で有力。

処 方

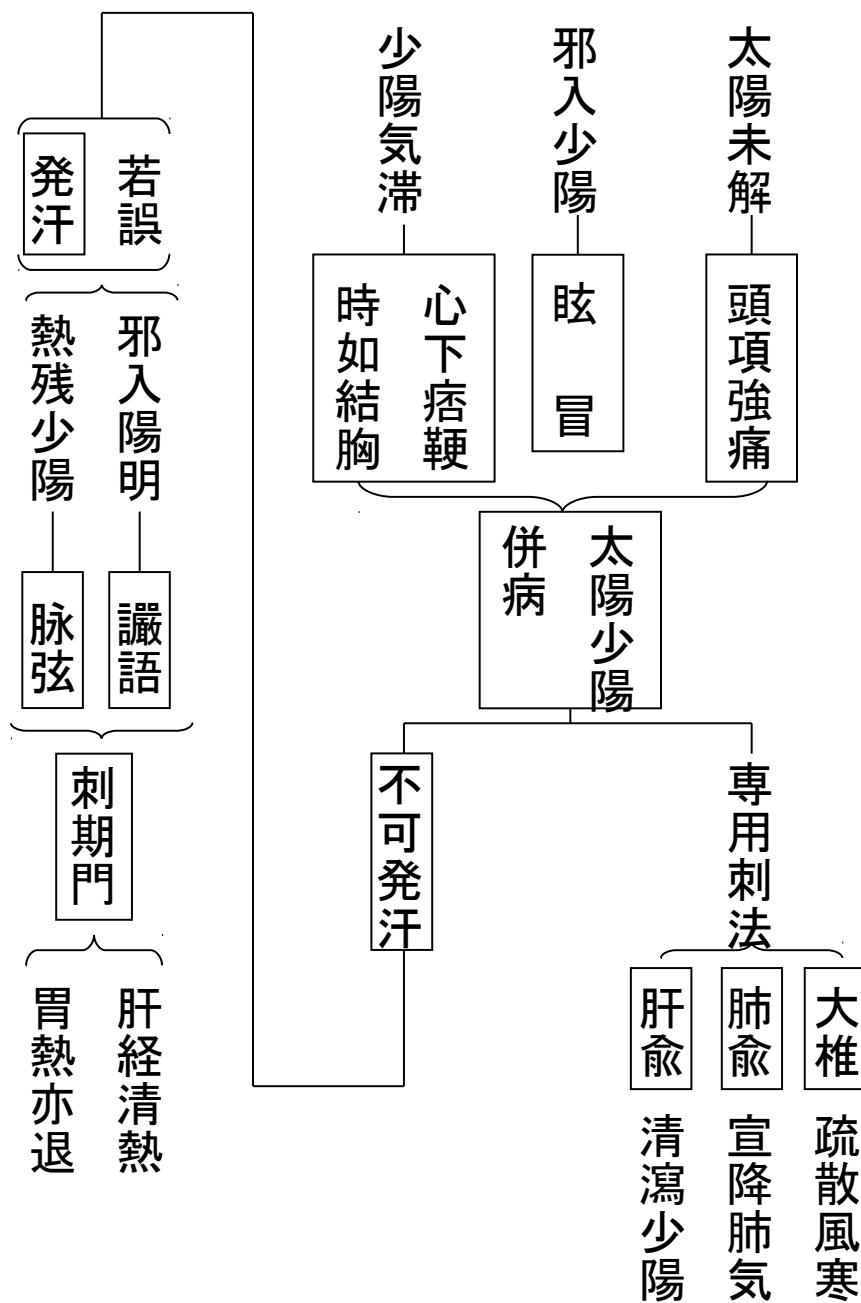
桔梗1.0、貝母1.0、巴豆0.3。頓服。

寒下の峻剤で急迫を目標に投与。

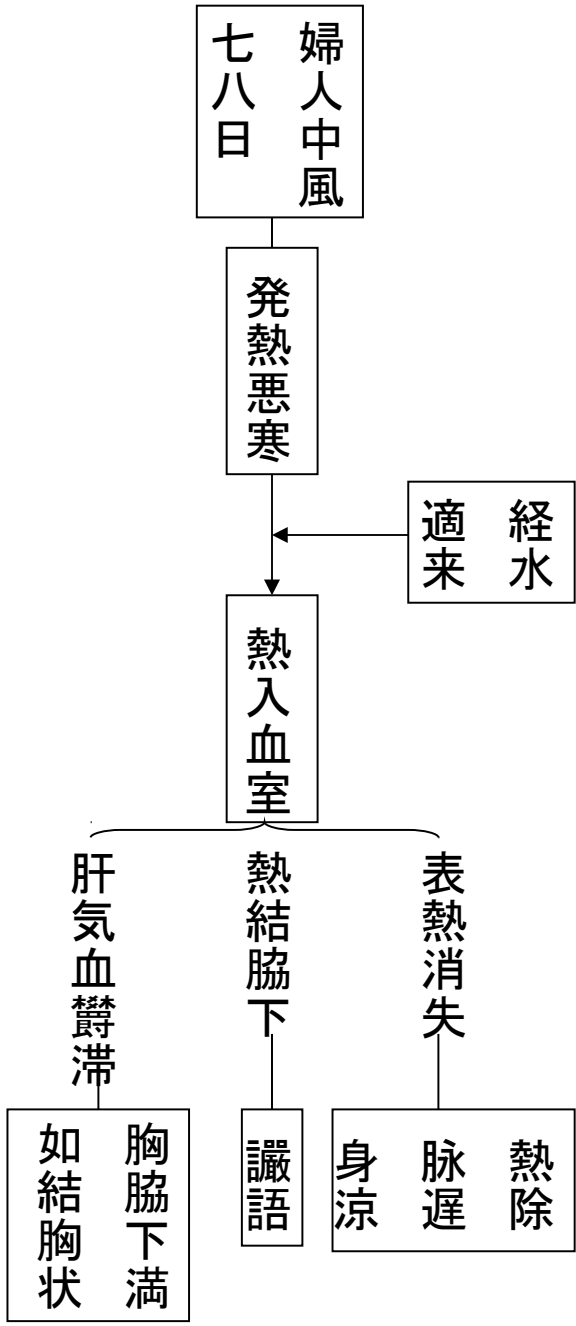
現在、巴豆は毒薬に指定されている。

第一四二条 太陽与少陽併病、頭項強痛、或眩冒、時如結胸、心

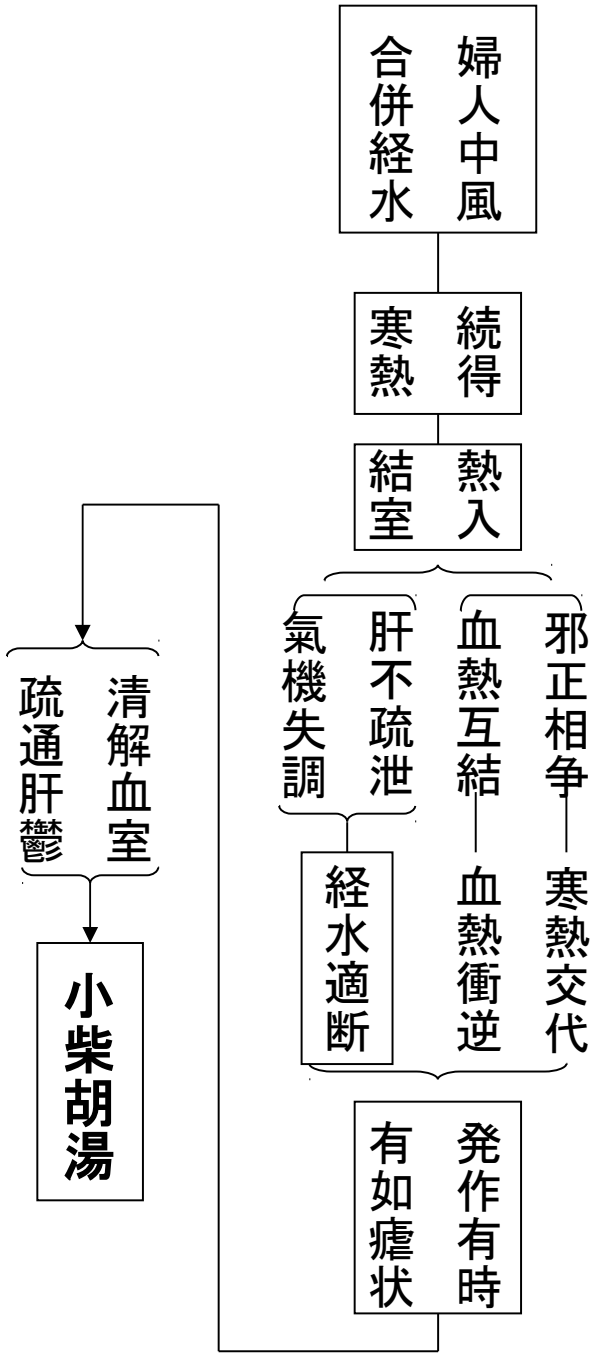
下痞硬者、当刺大椎第一間、肺俞、肝俞、慎不可発汗。
発汗則讖語、脉弦、五日讖語不止、当刺期門。



第一四三条 婦人中風、發熱惡寒、經水適來、得之七八日、熱除而脉遲、身涼、胸脇下滿、如結胸狀、讞語者、此為熱入血室也。當刺期門、隨其実而取之。

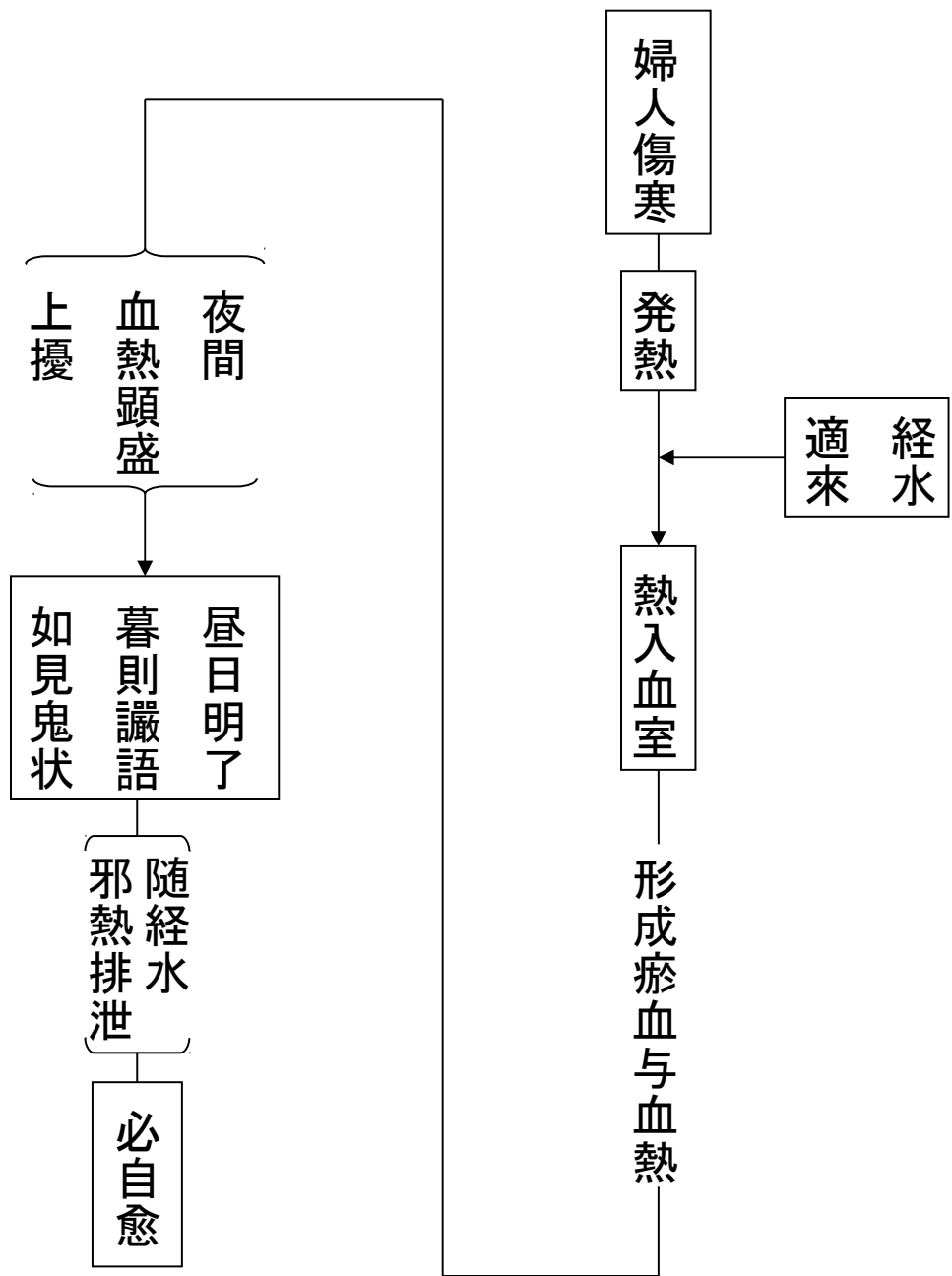


第一四四条 婦人中風、七八日続得寒熱、發作有時、經水適断者、此為熱入血室、其血必結、故使如瘧狀發作有時、小柴胡湯主之。

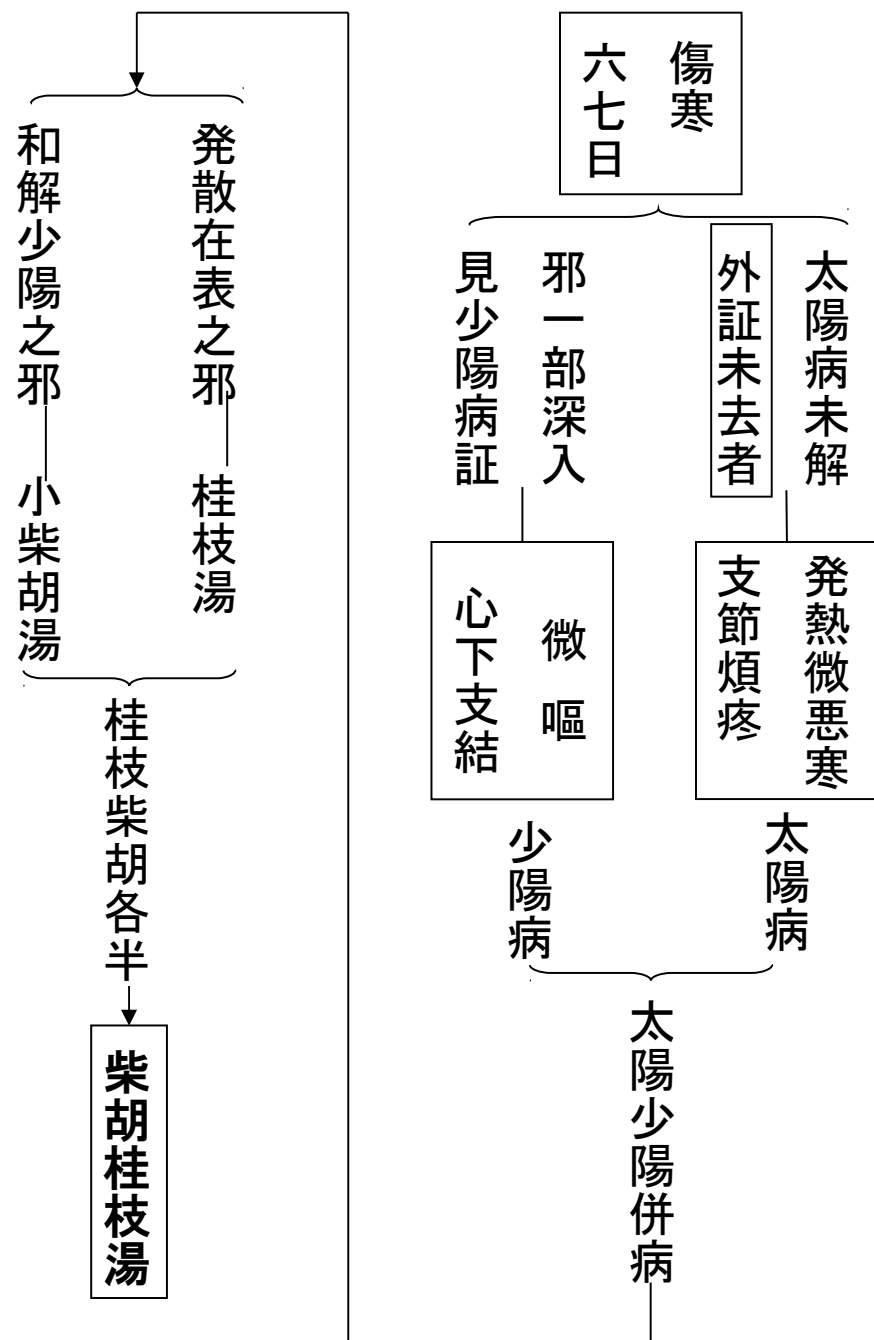


第一四五条 婦人傷寒、発熱、経水適来、昼日明了、暮則讞語、

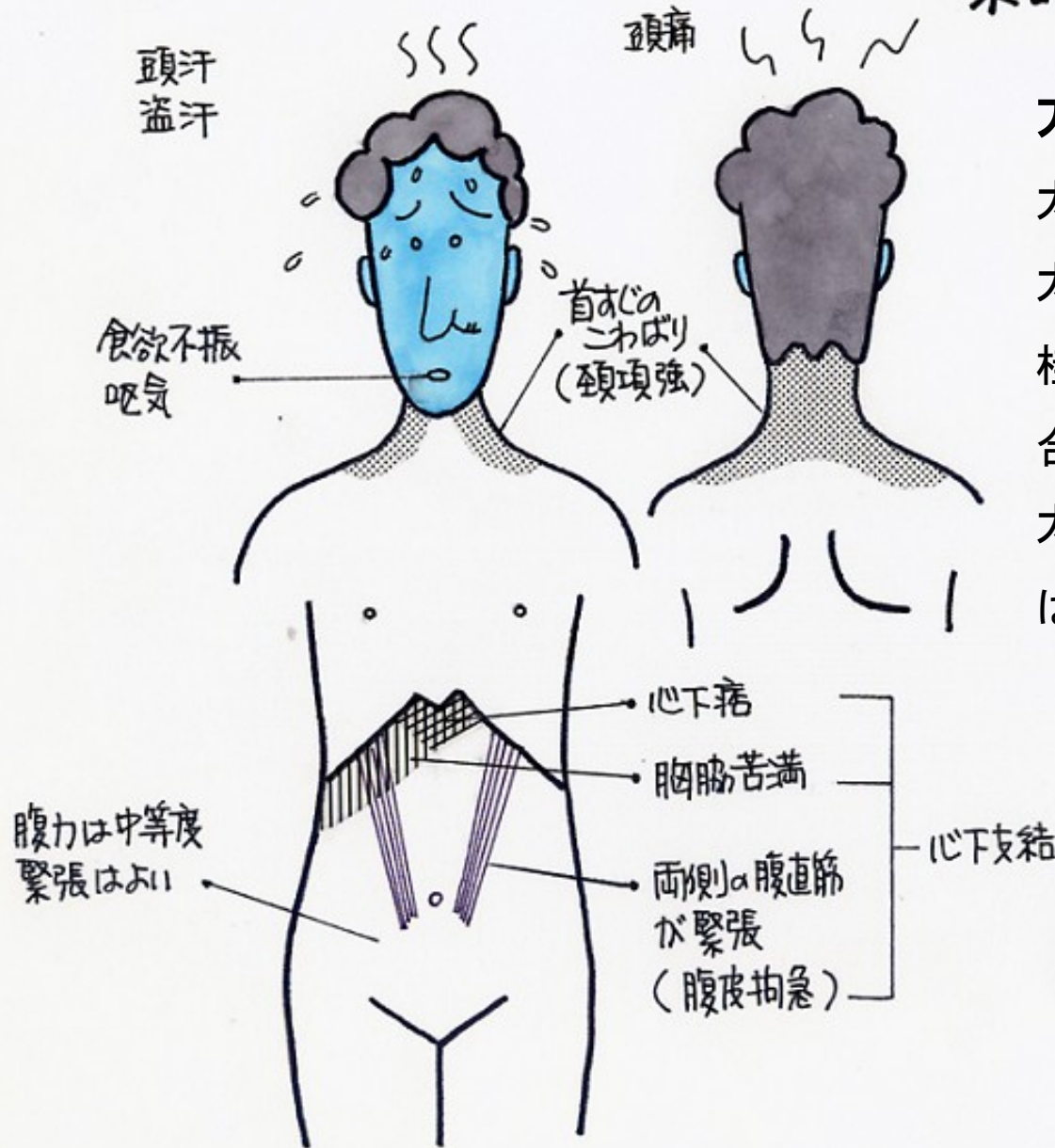
如見鬼状者、此為熱入血室。無犯胃氣、及上二焦、
必自愈。



第一四六条 傷寒六七日、発熱、微悪寒、支節煩疼、微嘔、心下支結、外証未去者、柴胡桂枝湯主之。



柴胡桂枝湯の証 *



方 意 (『傷寒論』太陽病下146条)

太陽と少陽の併病を主治する。

太陽・少陽共に症状は軽度なので、桂枝湯と小柴胡湯を半量ずつ取り合方して併病を治す。

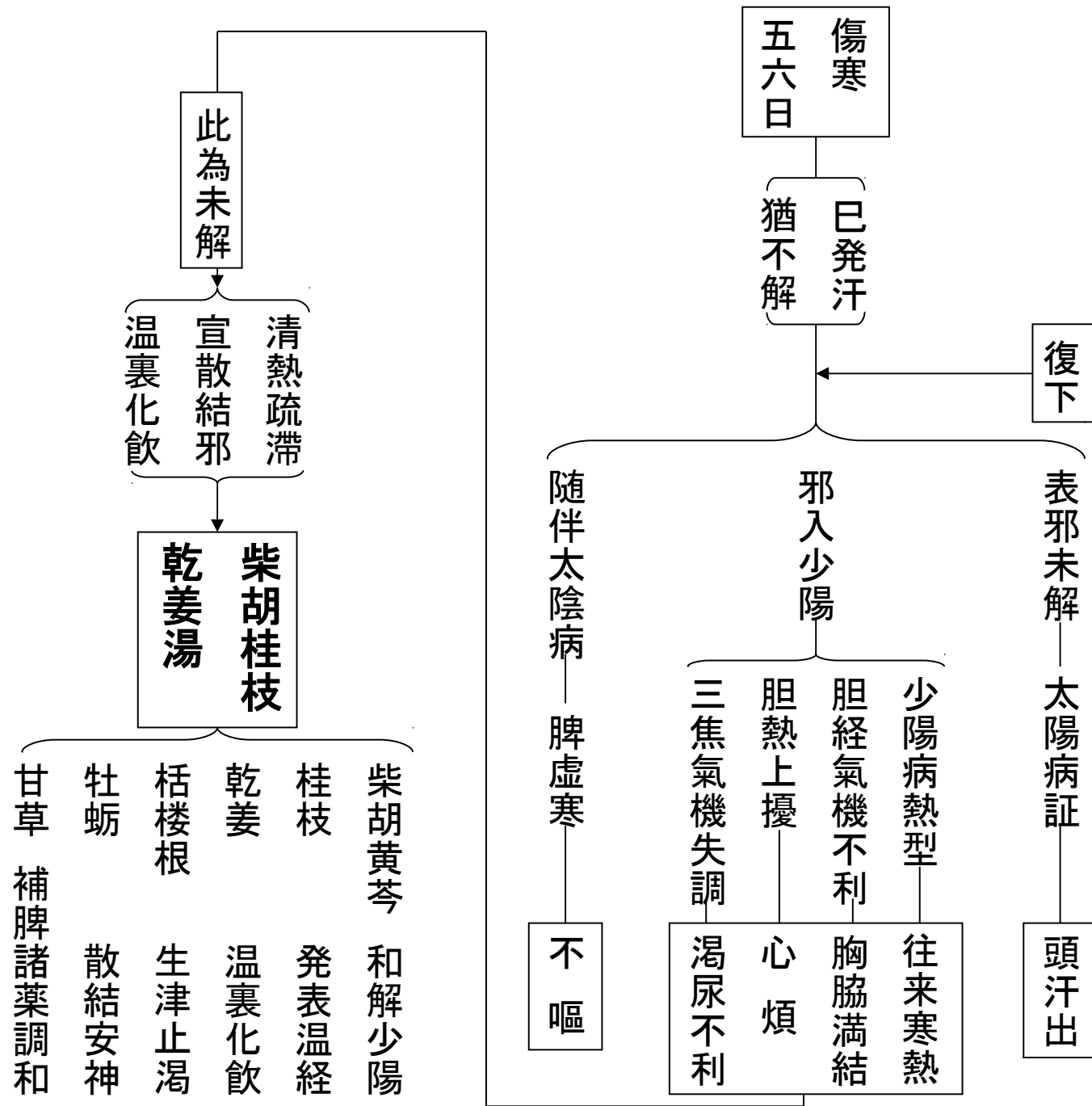
太陽と少陽の併病の治法に関しては本条の他、142条に刺法がある。

診断のポイント

- ・ 胸脇苦満と腹皮拘急 (心下支結)
- ・ 自汗(首から上) 盗汗
- ・ 背や肩のこり (頸項強)



第一四七条 傷寒五六日、已發汗而復下之、胸脇滿微結、小便不利、渴而不嘔、但頭汗出、往來寒熱、心煩者、此為未解也。柴胡桂枝乾姜湯主之。



柴胡桂枝乾姜湯の証 *

頭汗
盜汗

冷え
肩こり

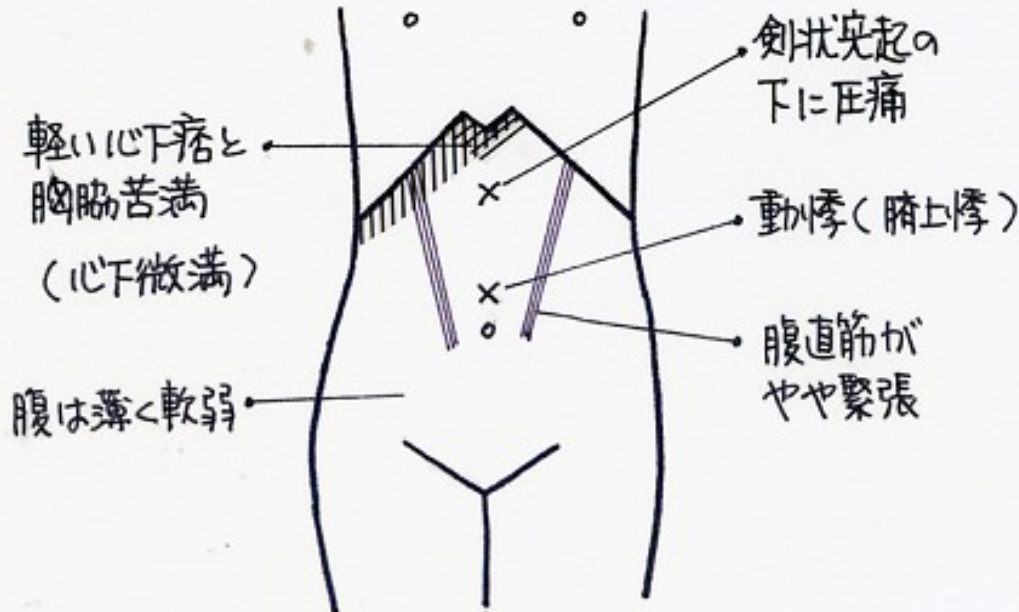


方 意(『傷寒論』下篇147条)

本来脾虚があり、体質虚弱傾向の病人の太陽病を先に発汗させたが、表証が完全に解したことを確認しない俛、次に瀉下した結果、邪の一部が少陽に陥入し、残余の太陽病と、新たな少陽病、それに脾の虚寒証が加わった結果、多彩な症状を呈すものである。

診断のポイント

- ・ 虚弱で神経質
- ・ しばしば盗汗、冷え症
- ・ 極く軽い胸脇苦満
と 脘上悸

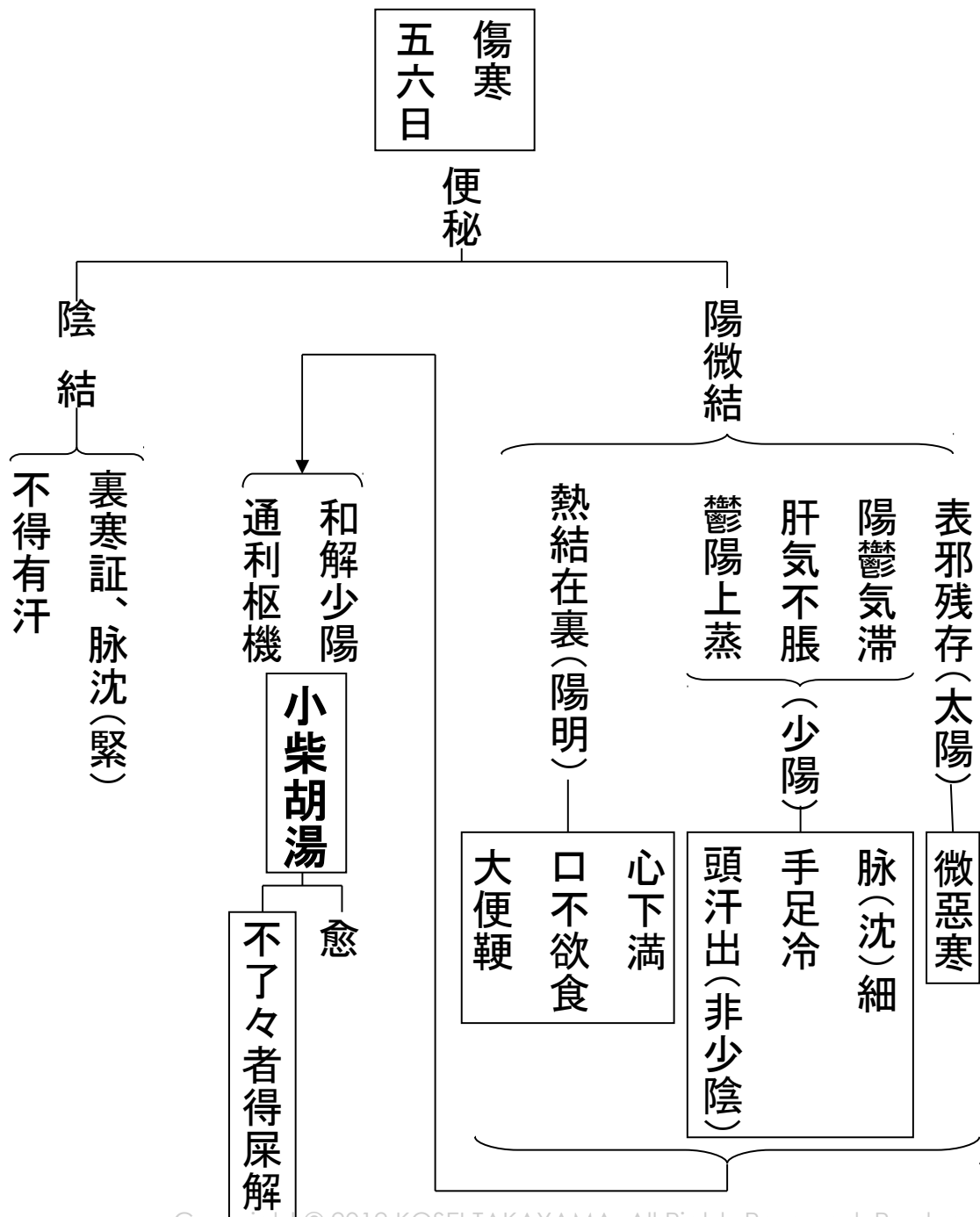


第一四八条 傷寒五六日、頭汗出、微惡寒、手足冷、心下滿、

口不欲食、大便鞭、脉細者、此為陽微結、必有表、復有裏也。

脉沈亦在裏也。汗出為陽微結。假令純陰結、不得復有外証、悉入在裏。

此為半在裏半在外也。脉雖沈緊、不得為少陰病。所以然者、陰不得有汗、今頭汗出、故知非少陰也、可與小柴胡湯。設不了々者、得屎而解。

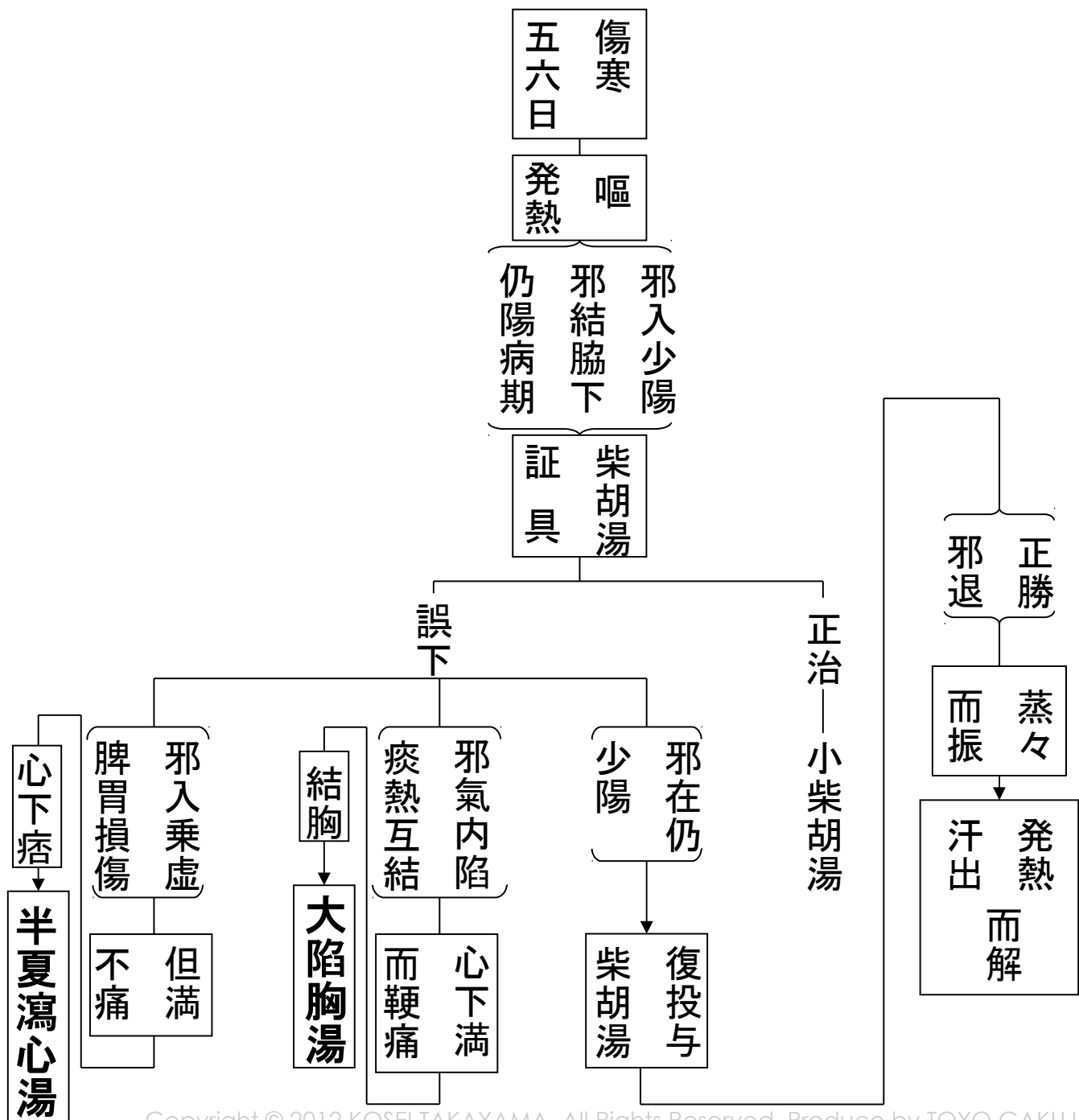


第一四九条 傷寒五六日、嘔而發熱者、柴胡湯証具、而以他藥下

之、柴胡証仍在者、復與柴胡湯。此雖已下之、不為逆、必蒸蒸而振、却發熱汗出而解。

若心下滿而鞭痛者、此為結胸也、大陷胸湯主之。

但滿而不痛者、此為痞、柴胡不中與之、宜半夏瀉心湯。



半夏瀉心湯の証*

方 意

本来は傷寒の誤治に因り脾胃の気を損傷して、胃氣は降らず脾氣は昇らなくなって、脾胃の氣が互いに協同できず働きが失調したものである。

胃が下がらず、嘔気や便通異常がある。心下部に抵抗、白厚舌苔、脈は弦か滑。

処方構成

半夏：辛温。降逆止嘔、消痞散結、化痰

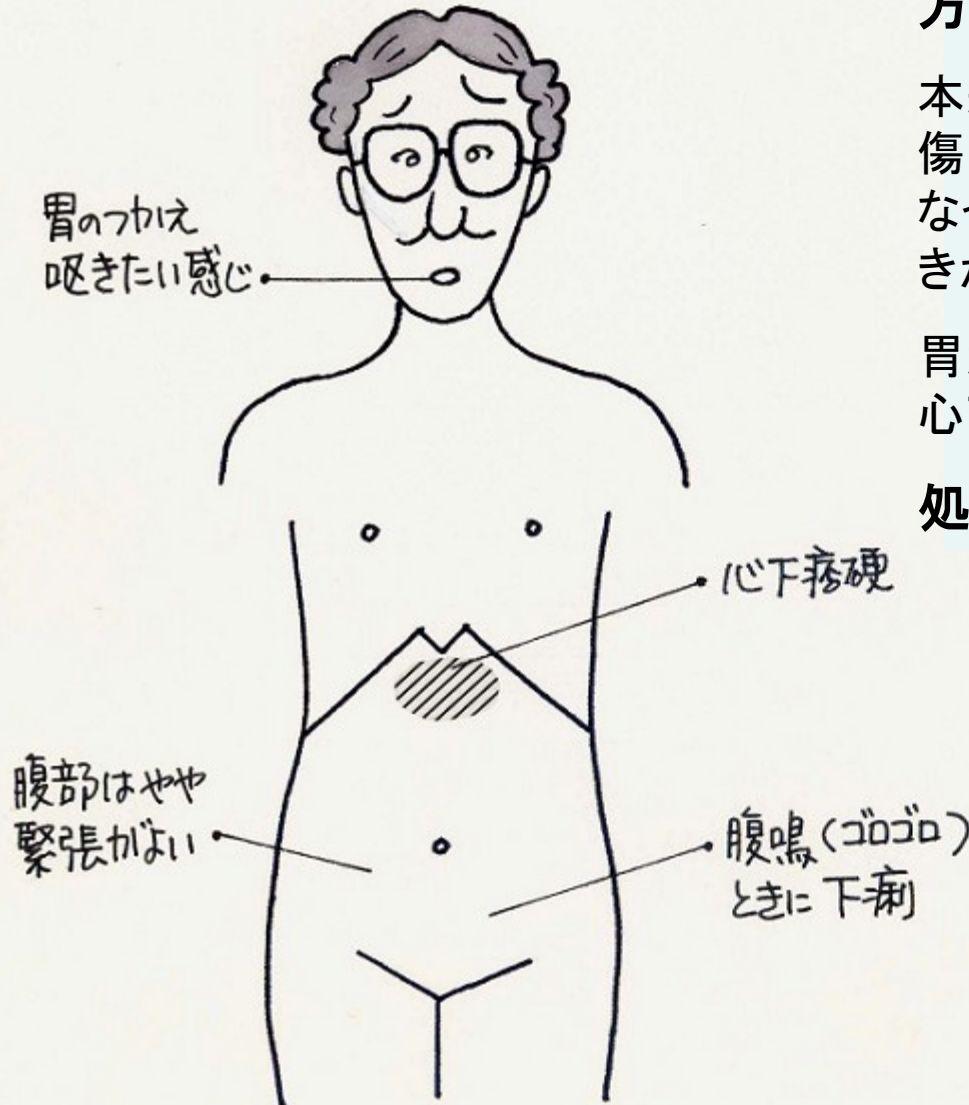
黄連 } 苦寒。清胃熱、消痞、泄濁
黄芩 }

乾姜：辛熱。温脾、化痰、開結氣

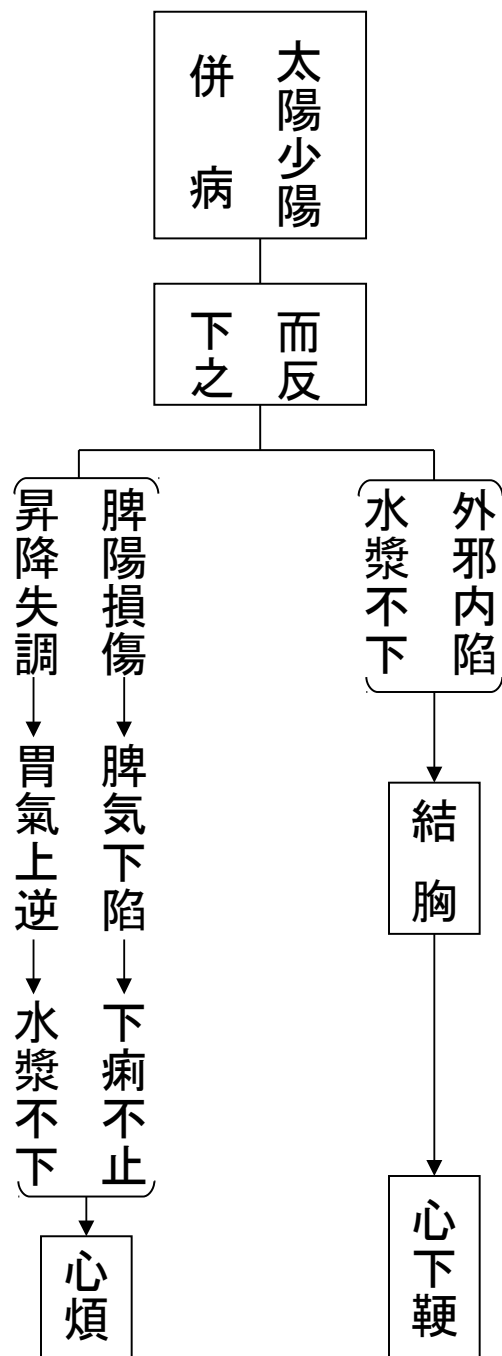
人參：甘辛温。

甘草：甘平。 } 補脾益氣、脾氣を昇提

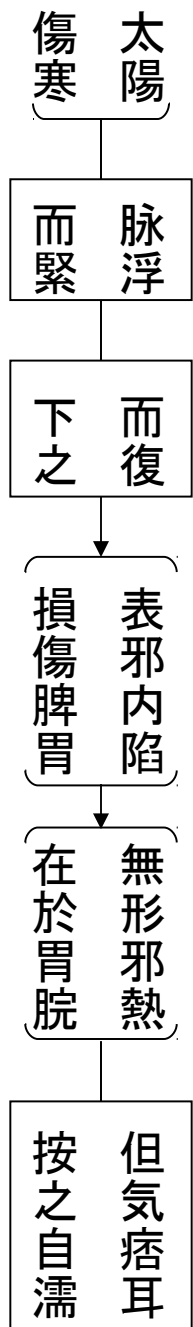
大棗：甘温。 }



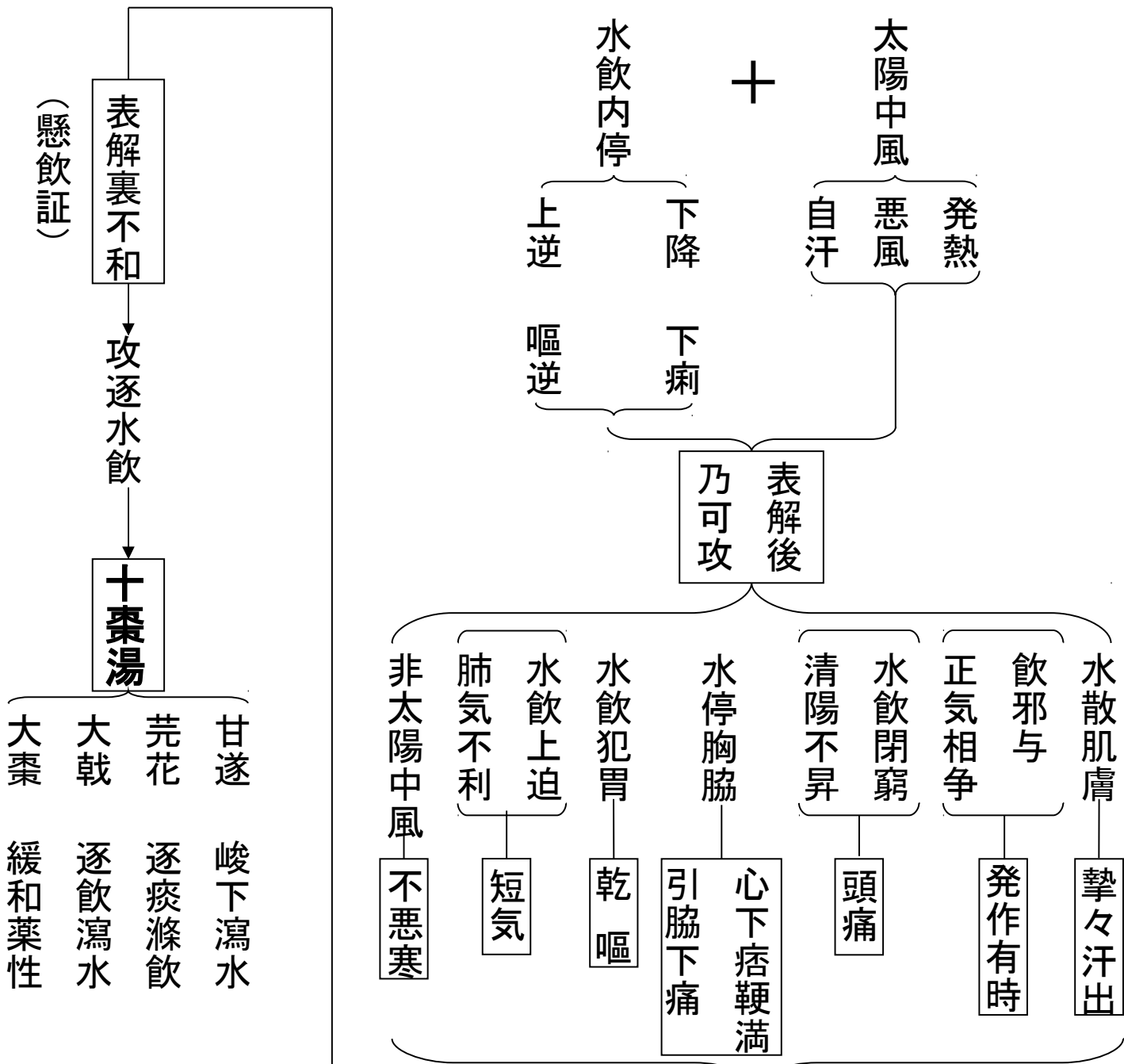
第一五〇条 太陽少陽併病、而反下之、成結胸、心下鞭。下利不止、水漿不下、其人心煩。



第一五一条 脉浮而緊、而復下之、緊反入裏、則作痞。按之自濡、但氣痞耳。



第一五二条 太陽中風、下痢嘔逆、表解者、乃可攻之。其人摯々汗出、發作有時、頭痛、心下痞硬滿、引脇下痛、乾嘔、短氣、汗出不惡寒者、此表解裏未和也。十棗湯主之。



十棗湯の証

頭痛、目眩

咳、痰
嘔吐

発汗、短気、
息切れ

胸脇部背部
に牽引痛

心下痞鞭

下痢

尿不利

方 意

太陽病の経過中、三焦の気機が失調した結果、水飲が停滞し、脇下に積衆して“懸飲証”を形成したものである。

結胸証と紛らわしいが、本証は水飲の邪だけに因る病証で、熱邪は全く関与していない点が熱実結胸と異なる。

処 方

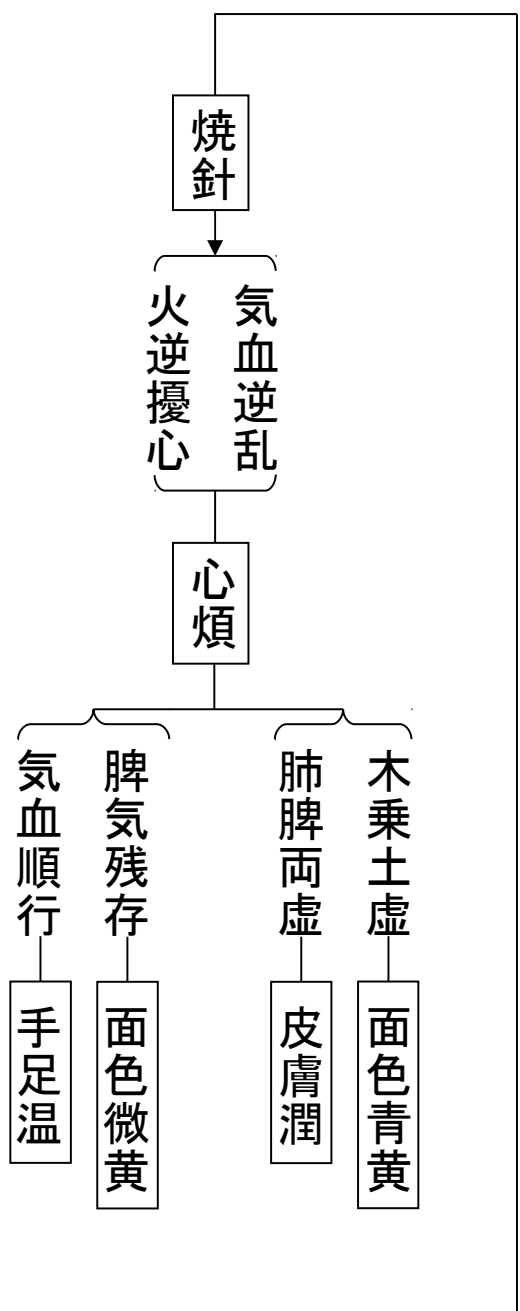
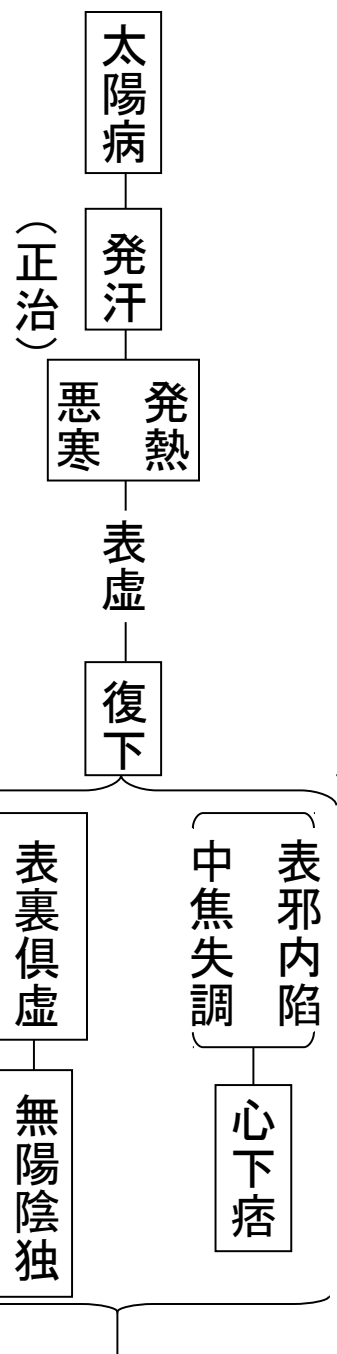
甘 遂
大 戟
芫 花

苦寒。逐飲瀉水、峻下

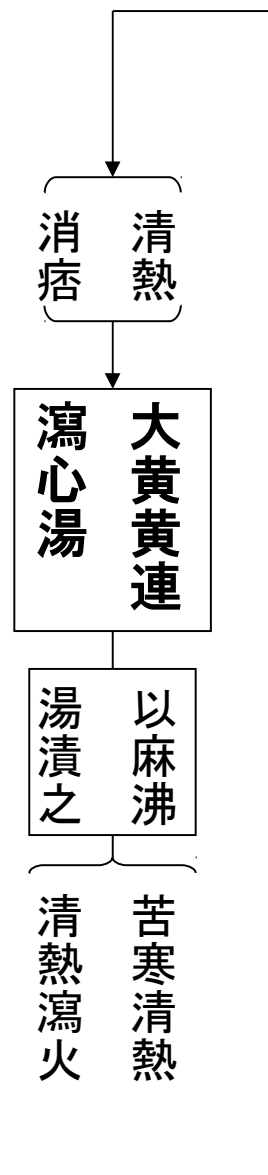
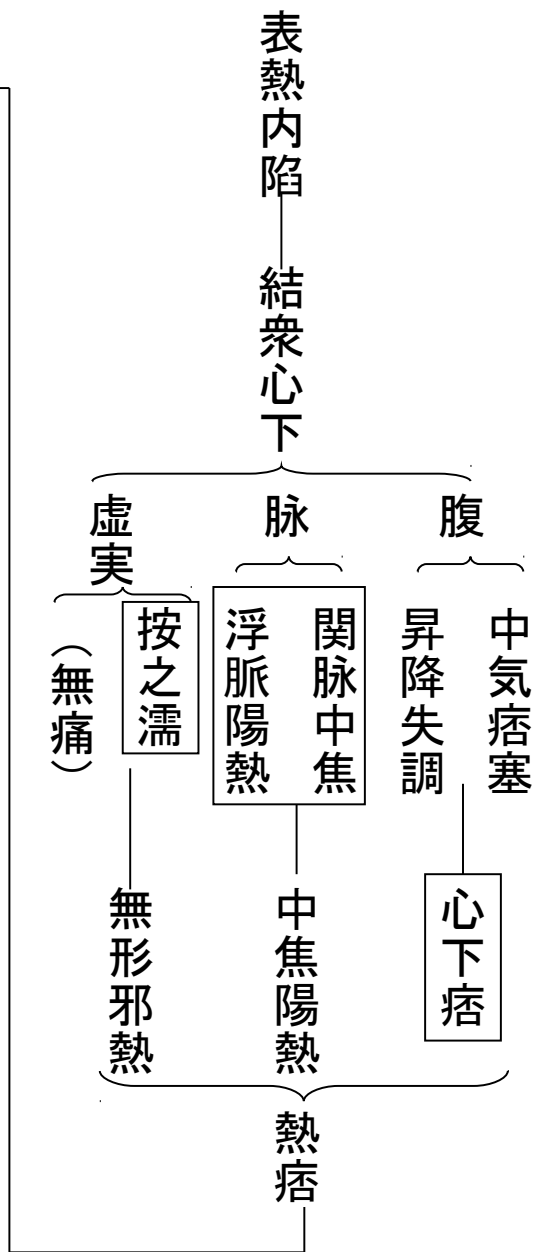
大 棗：寒温。補脾、薬効緩和

第一五三条 太陽病、医発汗、遂発熱悪寒。因復下之、心下痞。

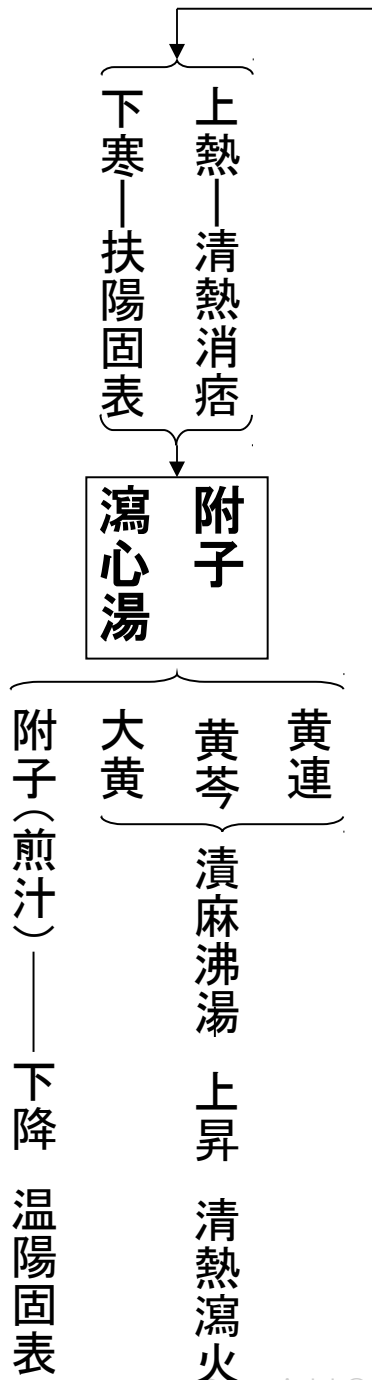
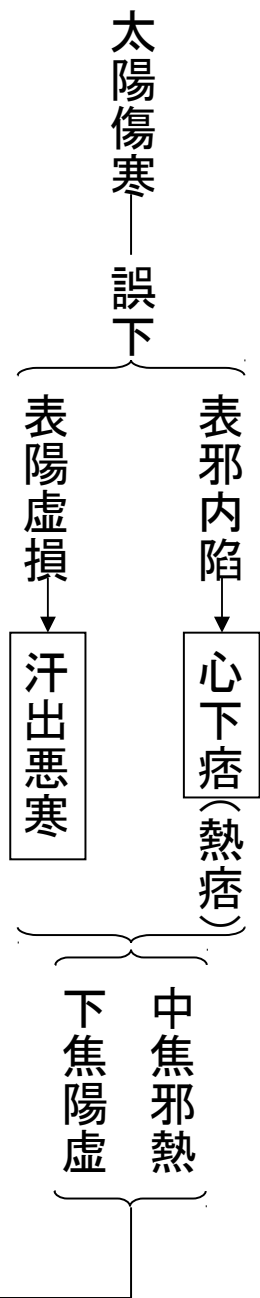
表裏俱虚、陰陽氣並竭、無陽則陰独。復加焼針、因胸煩。面色青黄、膚潤者、難治、今色微黄、手足温者、易愈。



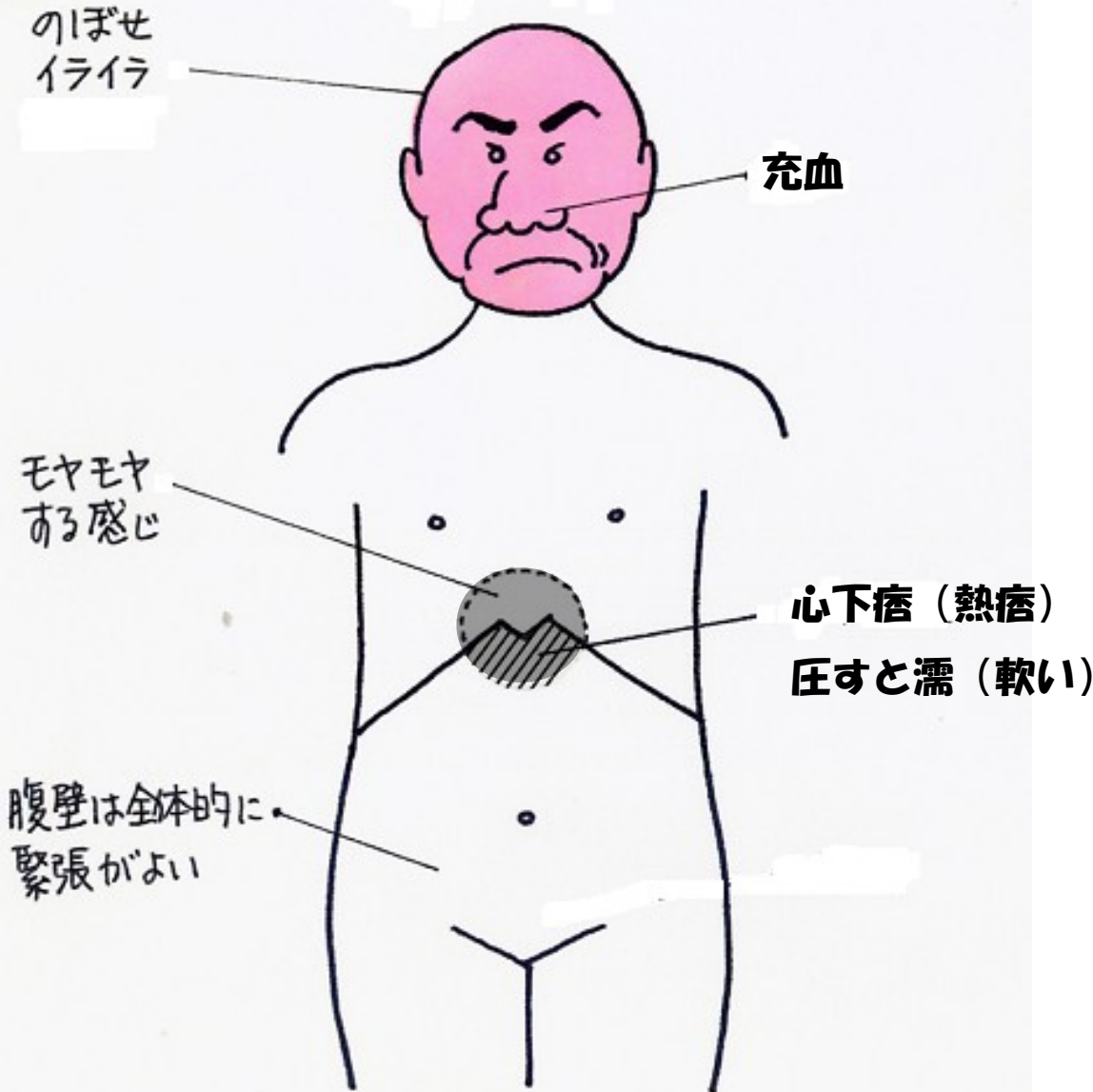
第一五四条 心下痞、按之濡、其脉关上浮者、大黃黃連瀉心湯主之。



第一五五条 心下痞、而復惡寒、汗出者、附子瀉心湯主之。



大黃黃連瀉心湯の証



方 意

太陽病を誤下した結果、表の邪熱が内陷して心下に結衆し熱痞を形成したものである。

熱邪は水飲や宿食などの実邪とは結合していない単独の邪（虚邪）であるから、心下に結衆しても、抵抗、熱に因る煩躁は有るが、実邪に因る硬満や痛みは伴わない。

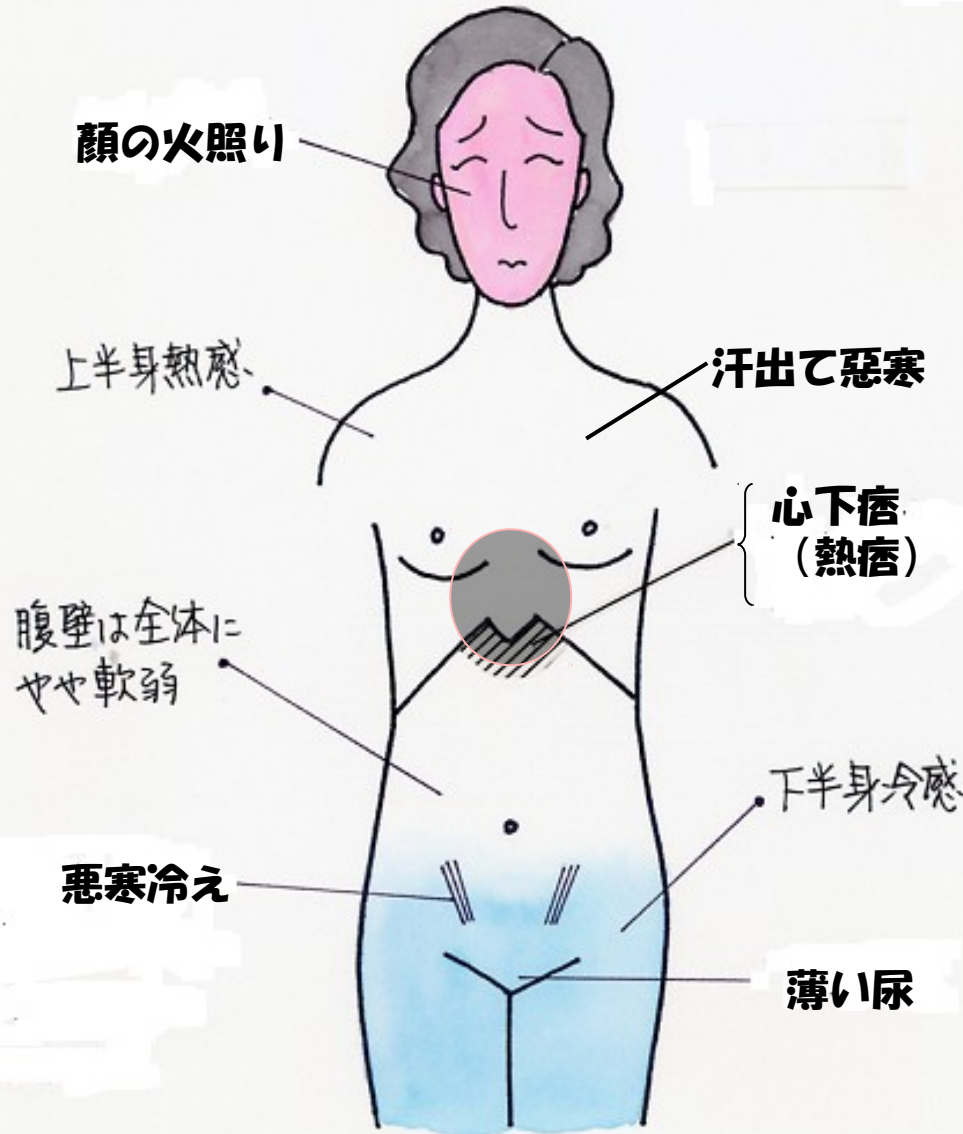
処 方

大黃：苦寒清熱

黃連：清熱瀉火

熱湯に漬けた振出しなので、清熱作用だけで瀉下排泄作用は無い。

附子瀉心湯の証



方 意

太陽病を誤下した結果、表の邪熱が心下に内陷して心下痞(熱痞)を形成すると共に、体表の陽氣も同時に虚して中は熱証、外は寒証という寒熱錯雑証を呈したものである。

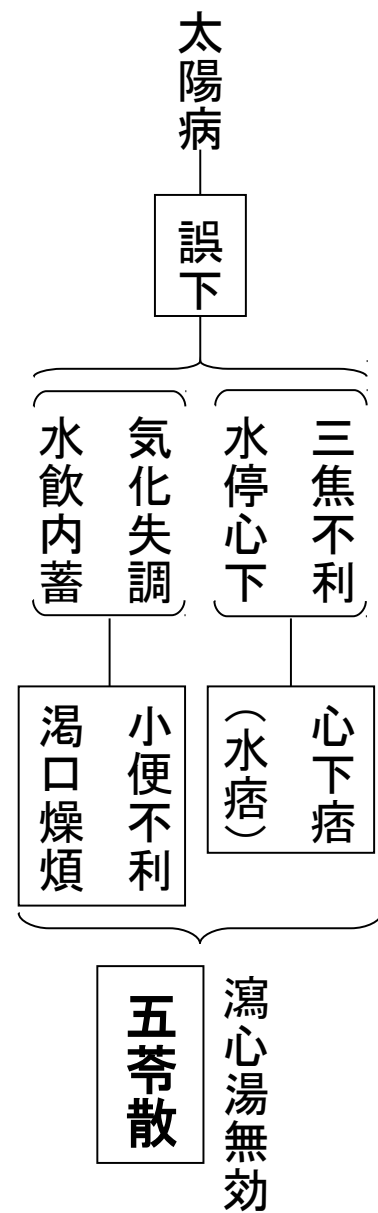
熱は上昇し寒は下降するので、上熱下寒を現す。

処 方

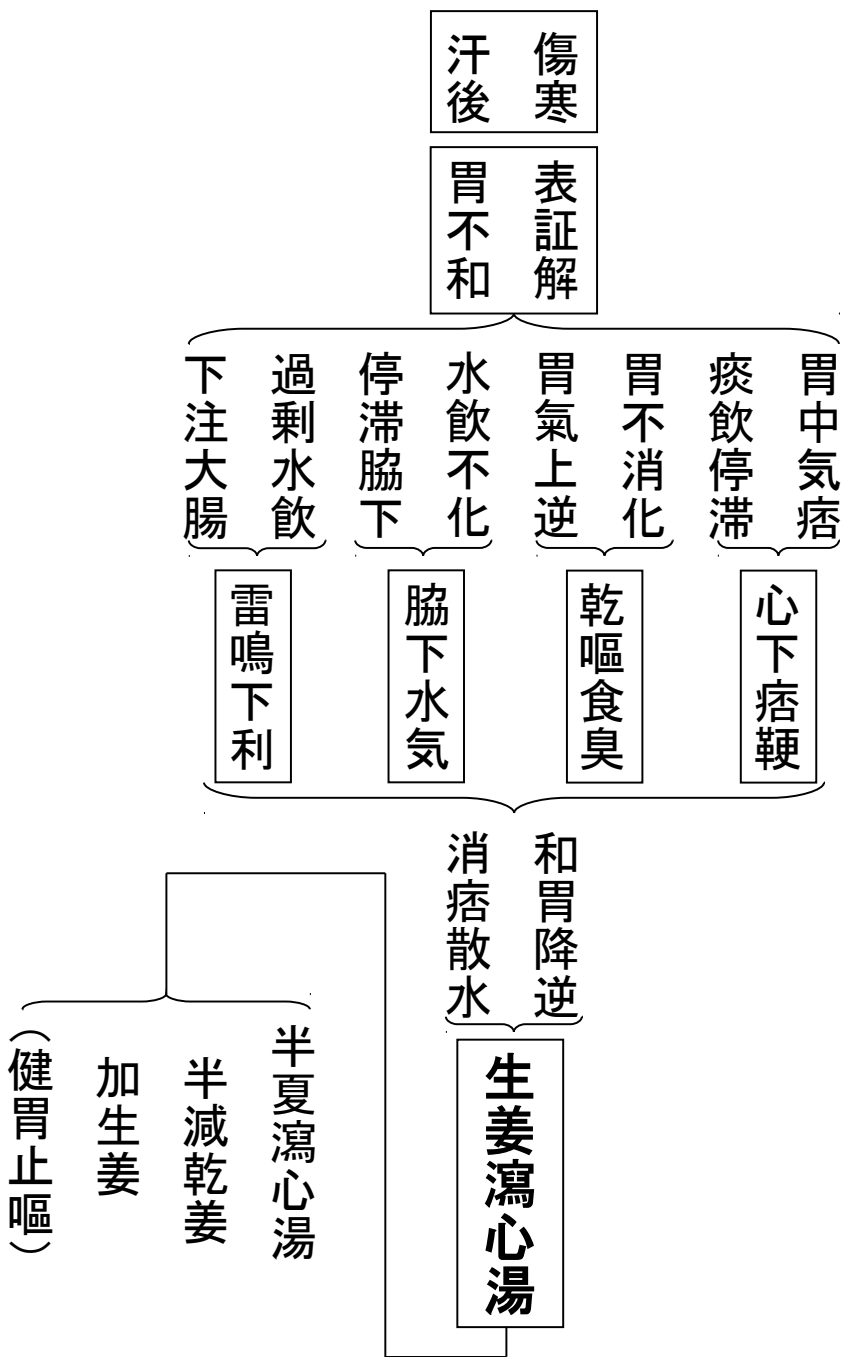
大黄 }
黄連 } 振出し浸液、上行して清熱瀉火。
黄芩 }

附子 煎汁を取る、下降して温補する。

第一五六条 本以下之、故心下痞、與瀉心湯、痞不解。其人渴而口燥煩、小便不利者、**五苓散**主之。



第一五七条 傷寒汗出解之後、胃中不和、心下痞鞭、乾嘔食臭、脇下有水氣、腹中雷鳴下利者、**生姜瀉心湯**主之。



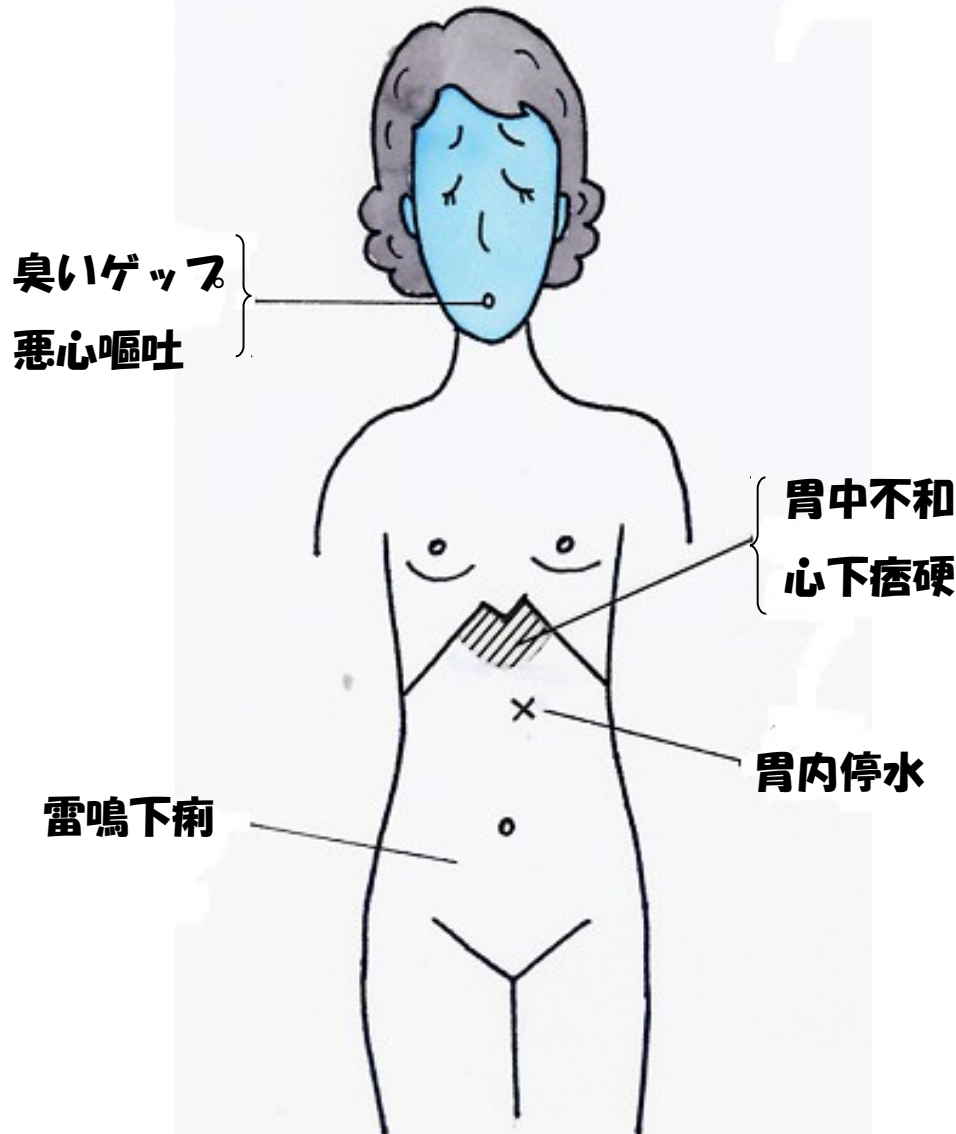
生姜瀉心湯の証

方 意

太陽病の経過中に、脾胃の虚に乗じて表の病邪が中焦に内陷し脾胃の不調和（胃中不和）を生じた病態である。

本来脾胃虚弱で胃中に著しい水飲の停滞があったため脾胃の不和と痰飲が共存する状態になり、単なる心下痞より胃の痞塞感や心下の抵抗が強い心下痞硬を呈した。

気滞と痰飲は並存しても未だ互結はしていないので結胸ではなく、痛みも無い。処方内容は半夏瀉心湯の乾姜を半減し、生姜を加味。健胃散水の作用が強化されている。



一五八条 傷寒中風、医反下之、其人下利、日数十行、穀不化、

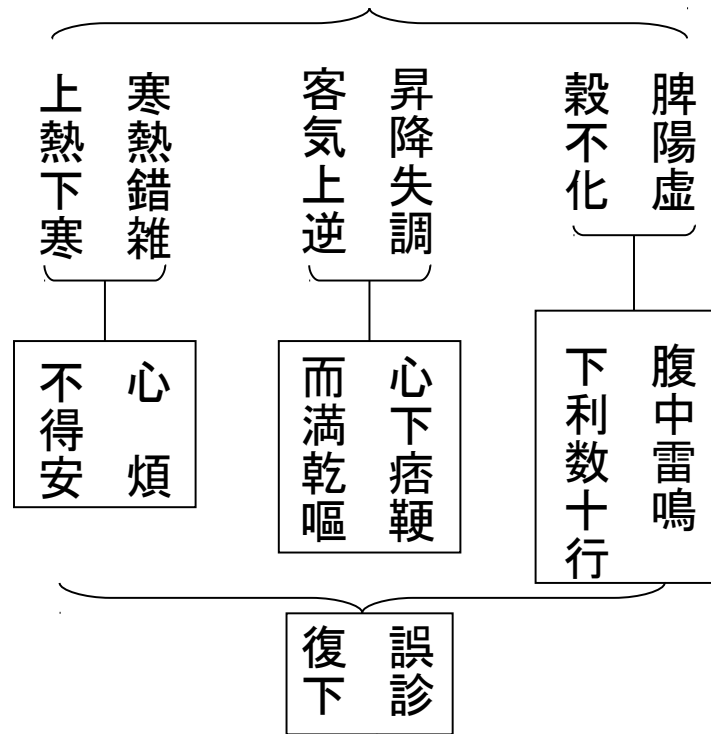
腹中雷鳴、心下痞鞭而滿、乾嘔心煩不得安。

医見心下痞、謂病不盡、復下之、其痞益甚。此非結熱、
但以胃中虛、客氣上逆、故使鞭也。甘草瀉心湯主之。

中風 傷寒

下之 医反

邪熱內陷 中陽虛損



其痞 益甚

補脾止瀉
和胃降逆
緩急消痞

甘草瀉心湯

半夏瀉心湯
(和中降逆)
甘草
(補脾緩急)

甘草瀉心湯の証

方 意

太陽病を誤下した結果、邪熱は下陷し、中焦の陽氣は虚損して、食した水穀を消化できなくなるため腹中雷鳴と一日数十行の下利を呈し、寒熱が脾胃で錯雑するので不安煩悶する。

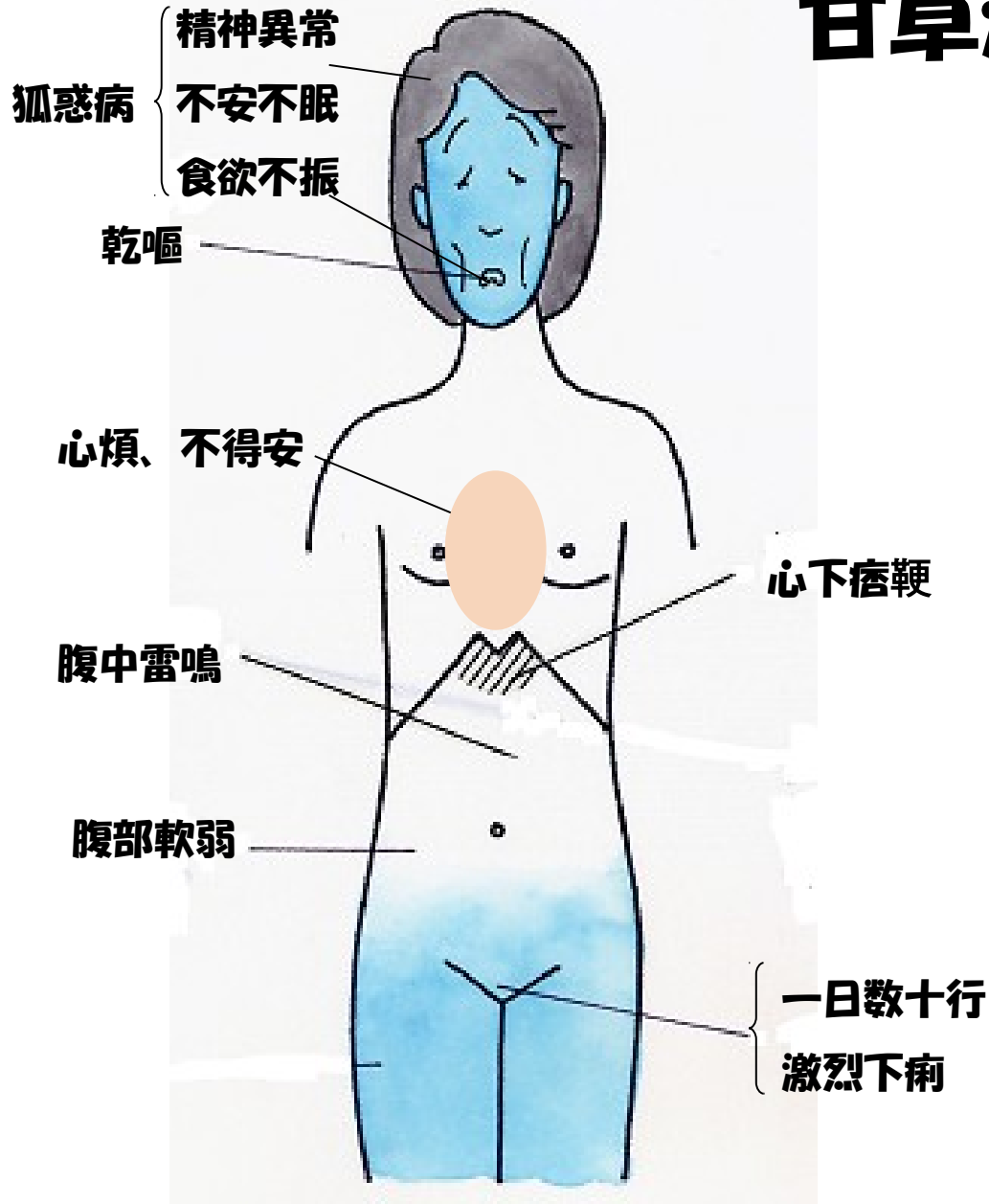
脾胃に落ち込んだ邪氣と寒飲が上逆するので心下痞鞭を現す。

方 証

腹中雷鳴、下利、心下痞硬、心煩。

処 方

半夏瀉心湯に補脾緩急の甘草。



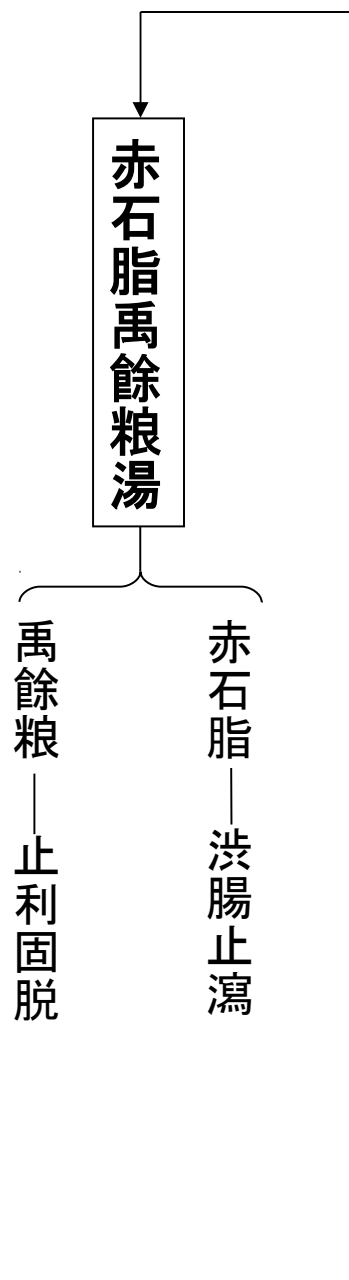
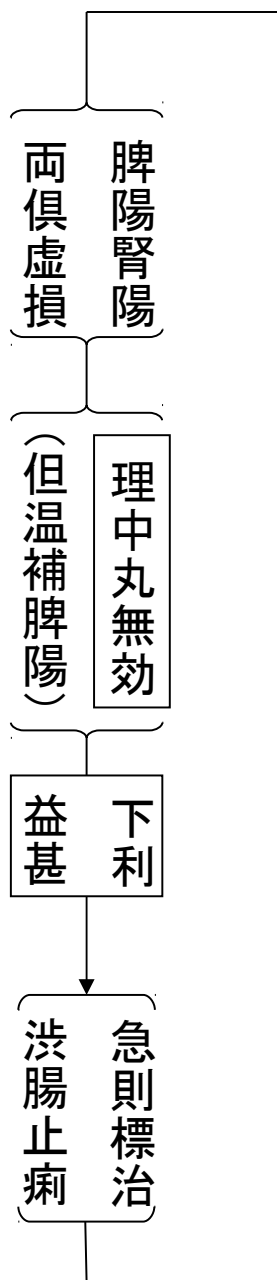
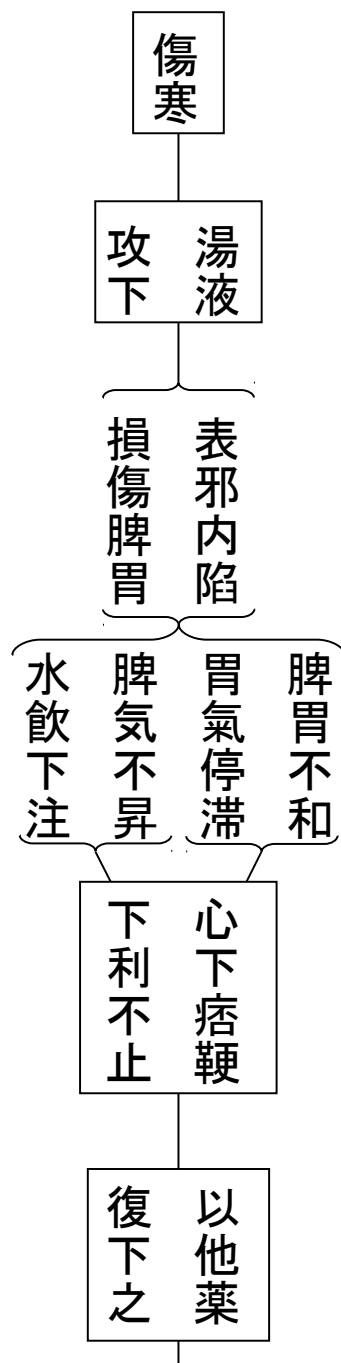
瀉心湯類の鑑別

条文 番号	処 方 名	証 候	病 態	治 法	処 方 構 成							
					黄 連	黄 芩	半 夏	人 参	甘 草	乾 姜	大 棗	他
149	半夏瀉心湯	心下痞 満而不痛	脾胃不和 心下気滞	調補脾胃 降逆消痞	1 両	3 両	半 升	3 両	3 両	3 両	12 枚	
154	大黄黄連 瀉心湯	心下痞濡 脉関上浮	邪熱鬱滞 於心下	清瀉熱痞	1 両							大 黄
155	附子瀉心湯	心下痞 惡寒汗出	心下熱痞 併腎陽虚	清瀉熱痞 温補腎陽	1 両	1 両						大 黄
157	生姜瀉心湯	心下痞鞭 乾嘔下利	胃中不和 痰飲停滞	和胃降逆 消痞止利	1 両	3 両	半 升	3 両	3 両	3 両	12 枚	生 姜
158	甘草瀉心湯	心下痞鞭 穀不化 下利心煩	誤下脾虚 虚 而 客气上逆	補脾緩急 降 逆 消 痞	1 両	3 両	半 升	3 両	4 両	3 両	12 枚	

第一五九条 傷寒服湯藥、下利不止、心下痞鞭、服瀉心湯已、

復以他藥下之、利不止。

医以理中與之、利益甚。理中者、理中焦、此利在下焦、**赤石脂禹餘糧湯**主之。復不止者、当利其小便。



赤石脂禹餘糧湯の証

脾胃温補の
薬で悪化する
悪心嘔吐
食欲不振

滑舌

脉沈微

熱証無し

心下痞鞭

腹鳴

下痢不止

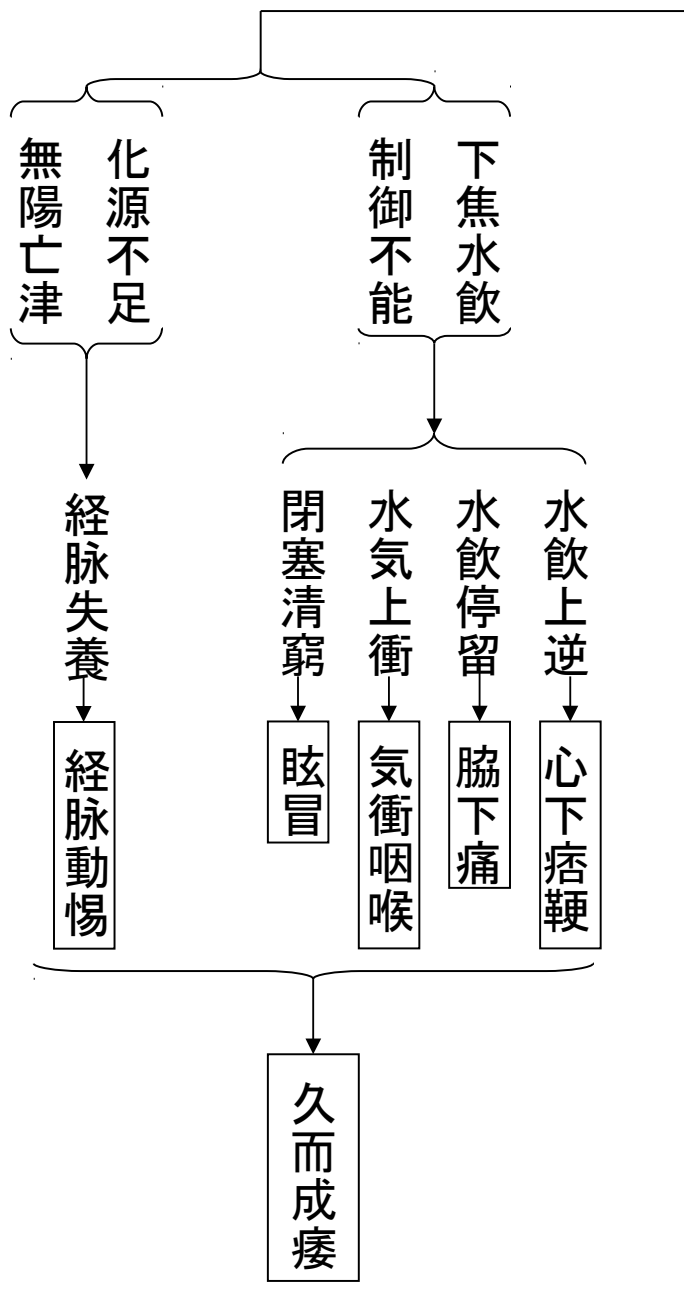
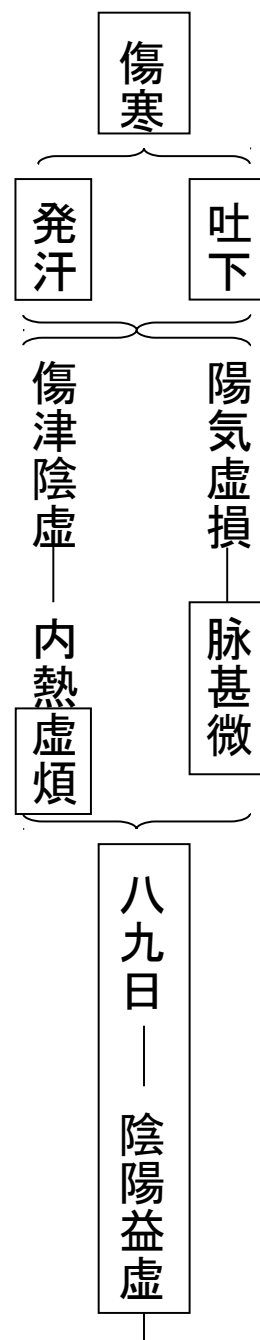
方 意

太陽病を誤下すると、表の邪が心下に内陷するので、脾胃が虚して、胃と脾が協調できず、正常と逆に胃氣は上逆し、脾氣は陷墜する結果、心下痞鞭を生じると共に下痢が止まらなくなる。

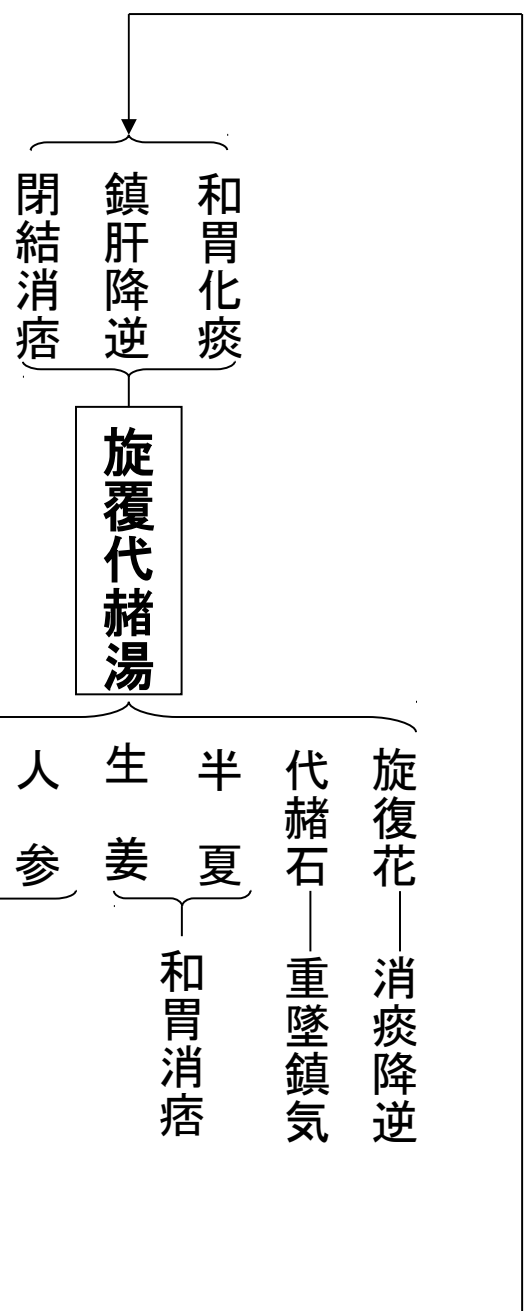
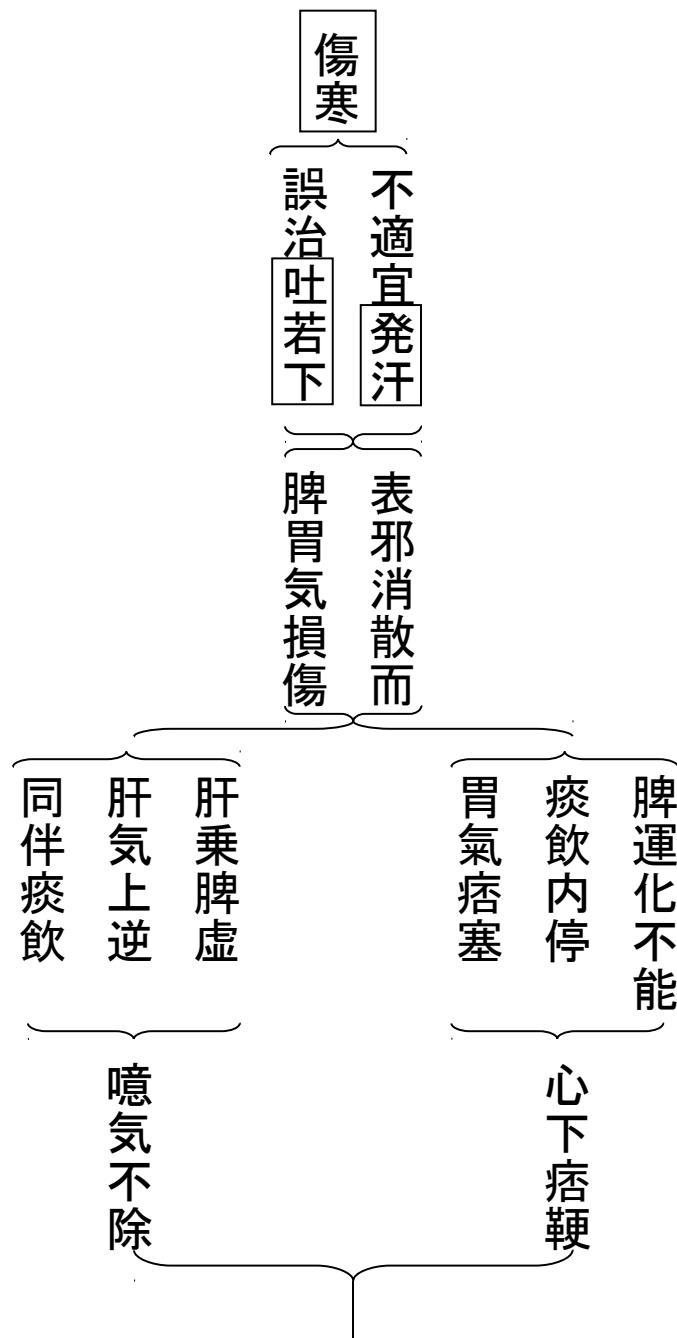
本来は瀉心湯類を与えると治まる筈であるが、さらに誤下を重ねると中焦脾胃だけではなく下焦腎の陽氣まで損傷して腎陽虚に因る下痢を生じる。この下痢は脾陽を温補する理中湯を与えても止まらず、本方を用いて大至急、渋腸止痢しなくてはならない。

第一六〇条 傷寒吐下後、発汗、虚煩、脉甚微、八九日心下

痞硬、脇下痛、氣上衝咽喉、眩冒、經脉動惕者、
久而成痿。



第一六一条 傷寒発汗、若吐、若下、解後、心下痞鞭、噫氣不除者、旋復代赭湯主之。



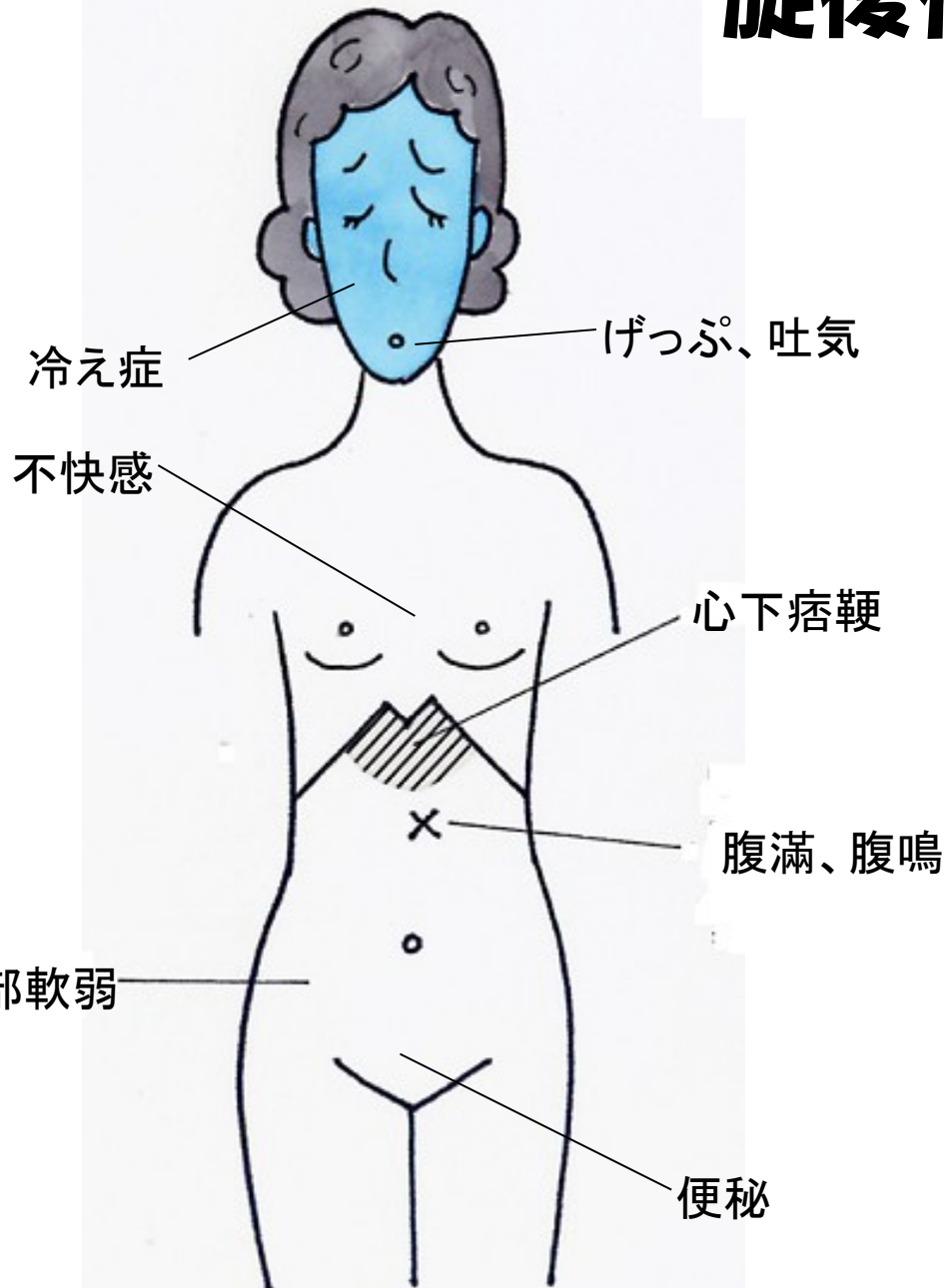
旋復代赭湯の証

方 意

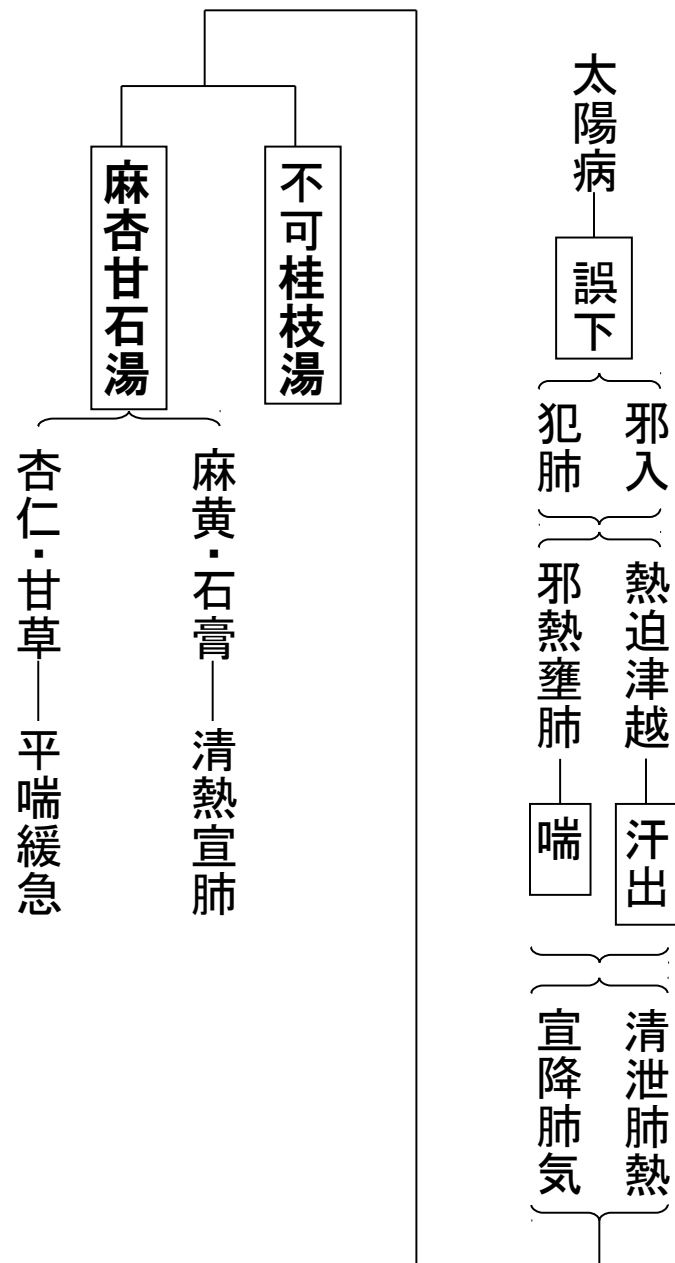
太陽傷寒に発汗法を用いたが、その後表証が解消しないうち、更に吐法や瀉下を行ったため、表証は取れたが脾胃の気が損傷して虚し、痰飲が内生して心下に停滞して心下痞鞭を生じ、胃氣は和降できないので上逆し噎氣が止まらなくなったものである。舌は淡で白滑あるいは白膩苔。脉は弦(痰飲)或は弱(脾胃の気虚)。

弁証のTrias

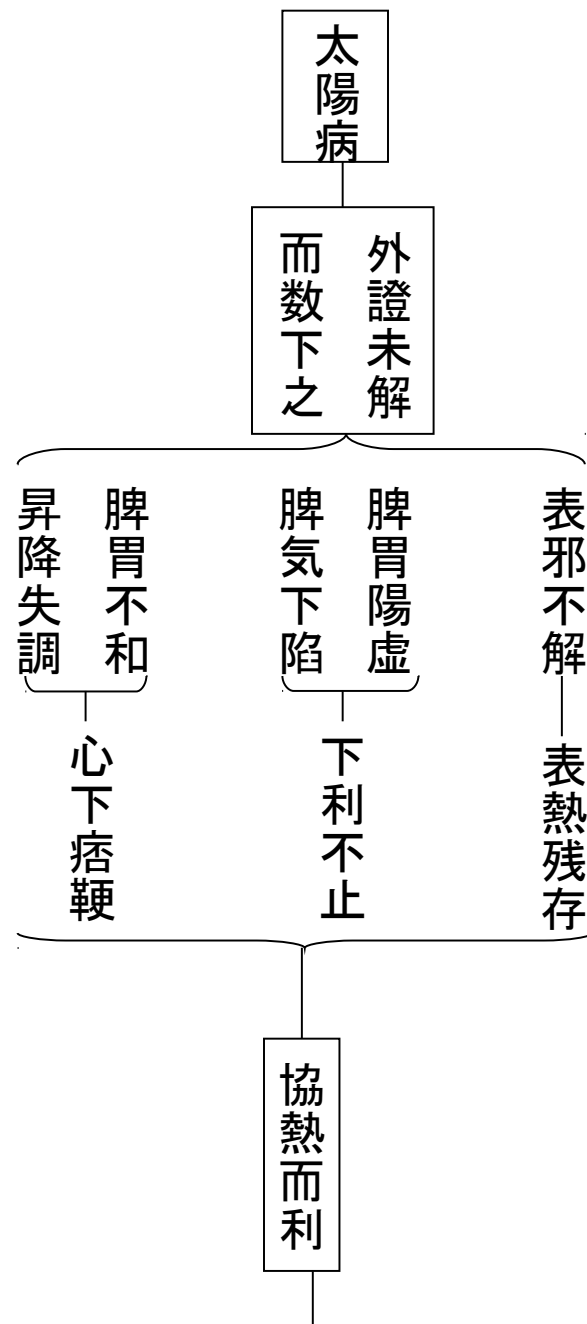
- 1) 頑固なげっぷ(噎氣)
- 2) 口臭や食臭は無い
- 3) 心下の痞えと腹滿(虚滿)



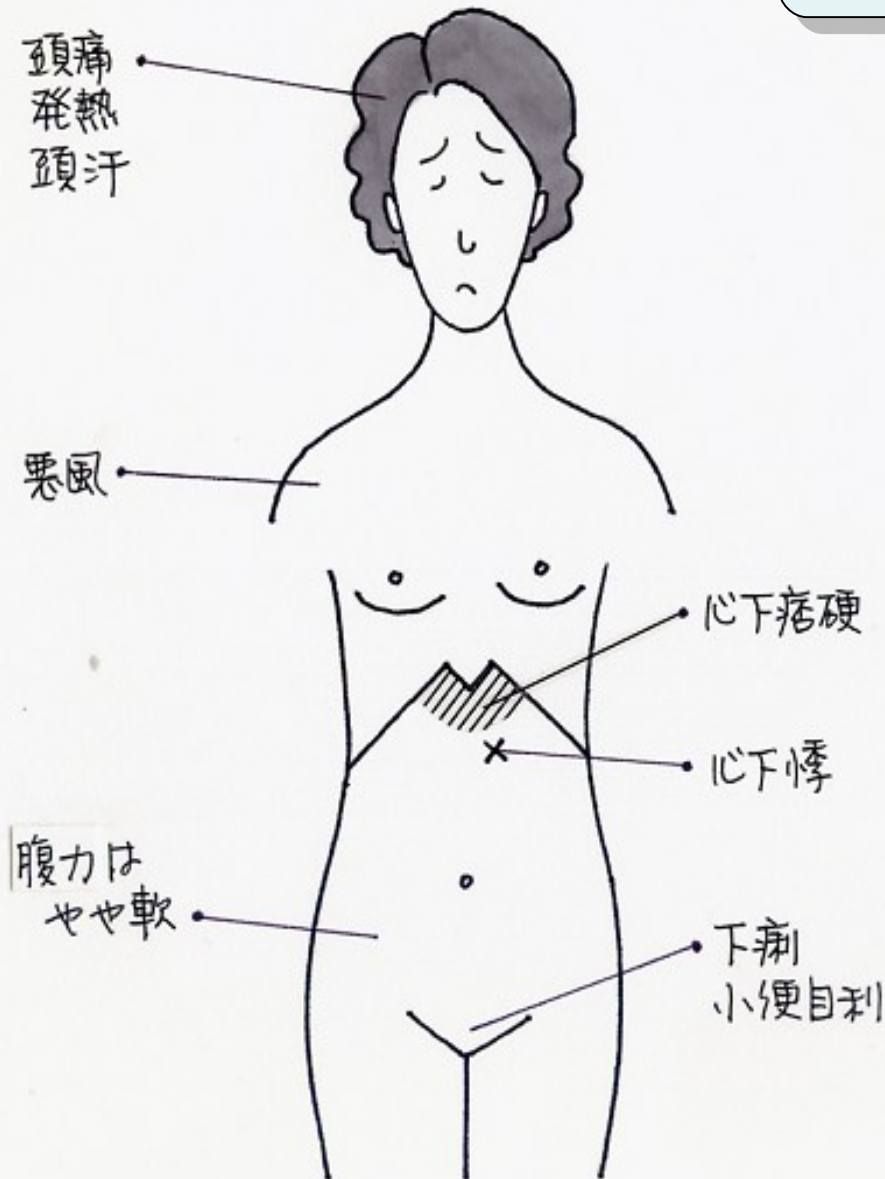
第一六二条 下後、不可更行桂枝湯。若汗出而喘、無大熱者、可與麻黃杏仁甘草石膏湯。



第一六三条 太陽病、外證未除而數下之、遂協熱而利、利不止、
心下痞鞭、表裏不解者、桂枝人參湯主之。



桂枝人参湯の証*



方意

太陽病の表証が完全に解消されないうちに、何回も下剤を与えたが表証は依然解されず残存する。一方脾胃の陽氣は損耗されて虚し、氣の昇降が乱されて、心下痞鞭と下痢が生じるので虚寒性の協熱下利となる。

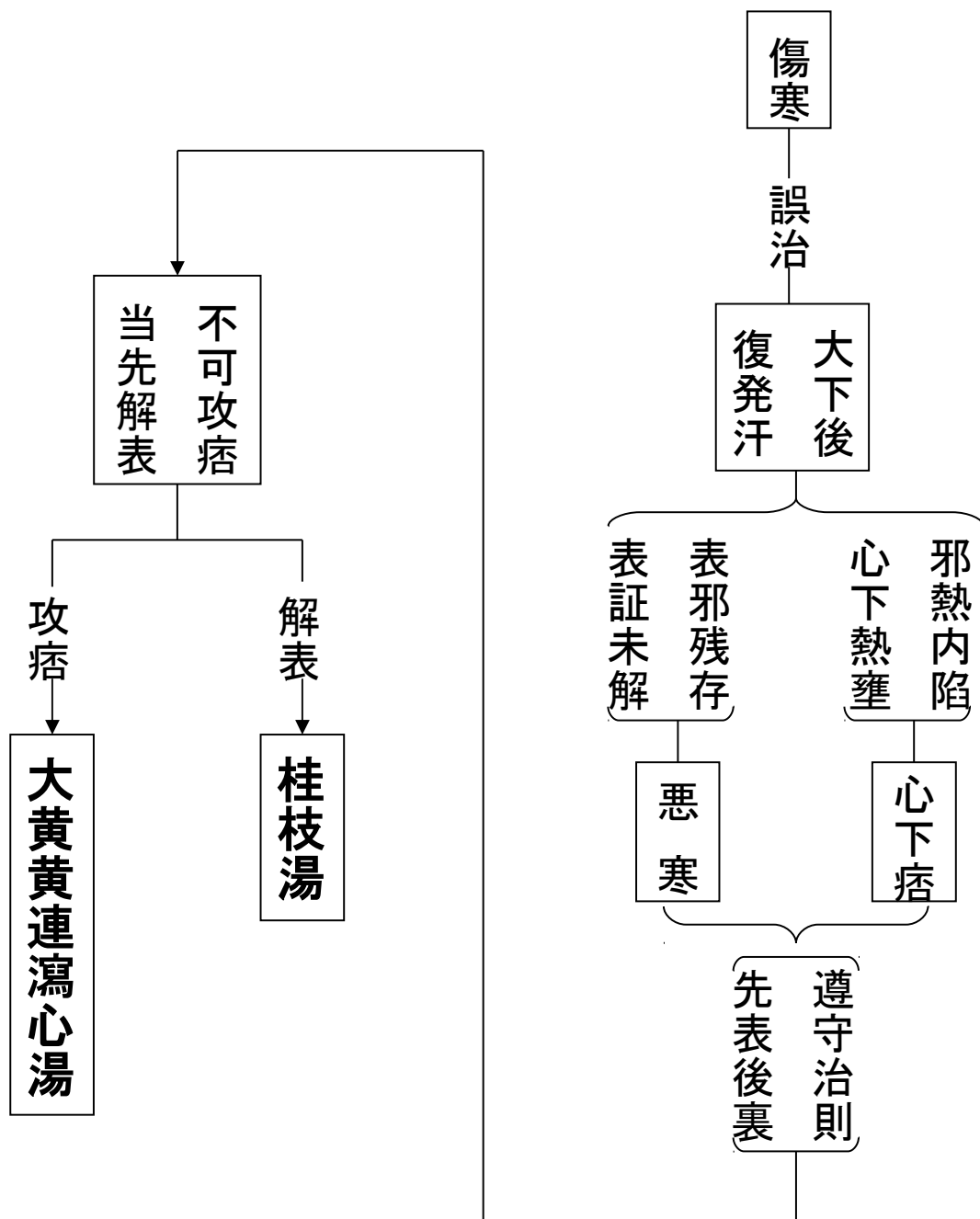
診断のポイント

- ・ 冷え症で下痢し易い
- ・ 表熱証 + 心下痞硬・胃弱
- ・ 四肢倦怠、足冷え、頭痛

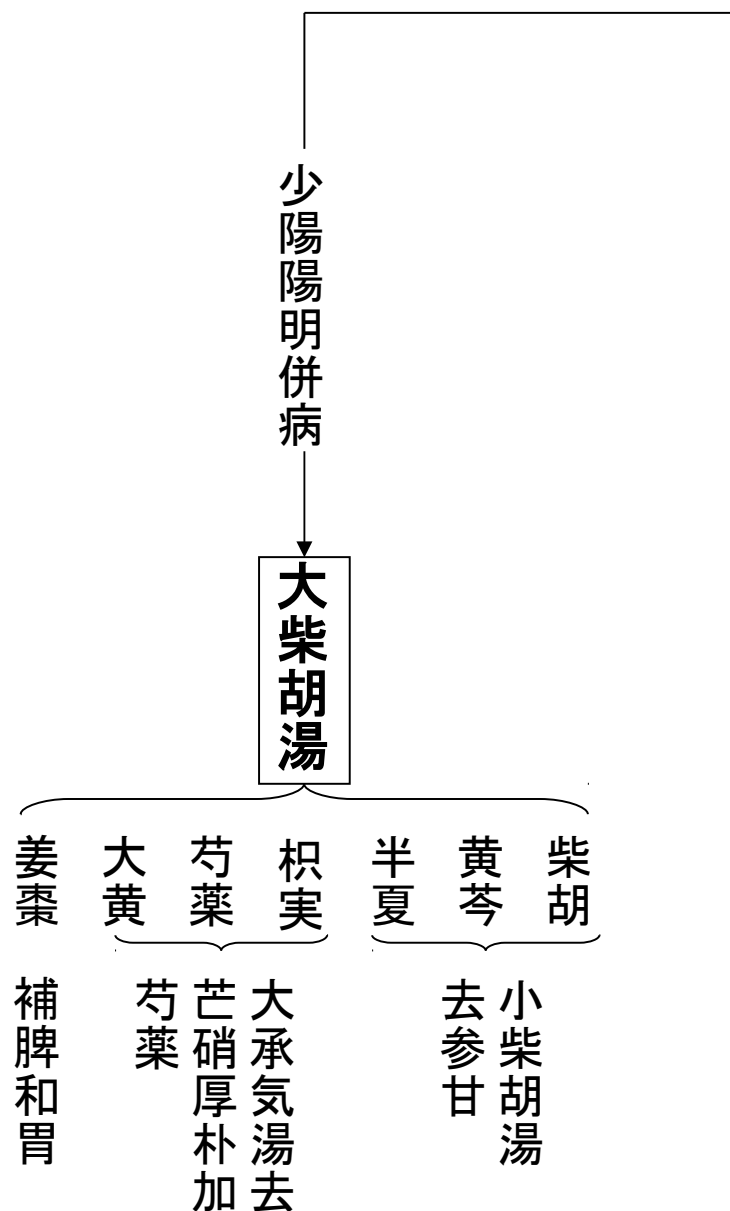
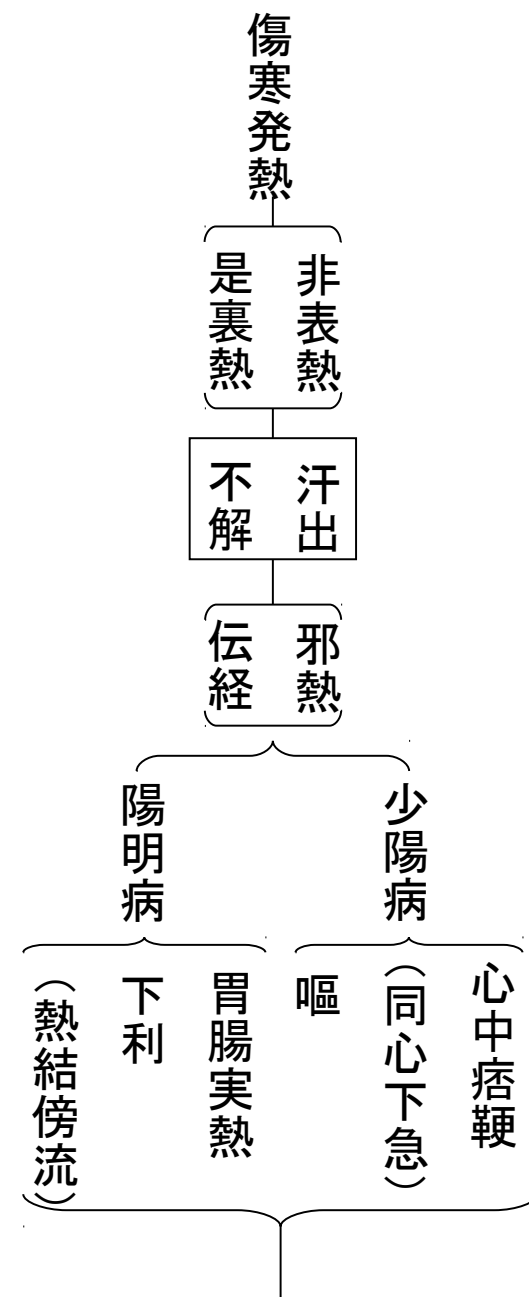
大一六四条 傷寒大下後、復發汗、心下痞、惡寒者、表未解也。

不可攻痞、当先解表、表解乃可攻痞。

解表宜桂枝湯、攻痞宜大黃黃連瀉心湯。



第一六五条 傷寒発熱、汗出不解、心中痞鞭、嘔吐而下利者、
大柴胡湯主之。



一六六条 病如桂枝証、頭不痛、項不強、寸脉微浮、胸中痞鞭、

氣上衝咽喉不得息者、此爲胸有寒也。当吐之、

宜瓜蒂散。

病如桂枝証

不是中風証

胸中有寒

寒邪客胸

胸中痞鞭

痰氣上逆

氣上衝咽喉

痰阻衛氣

胸中不布

衛陽浮越——寸脉微浮

榮衛不和——發熱惡風

衛陽不固——有自汗而

(非太陽証)

頭不痛

項不強

「高者因
而越之」

湧吐
痰飲

瓜蒂散

瓜蒂 苦寒 催吐湧越

赤小豆 酸寒 胃氣

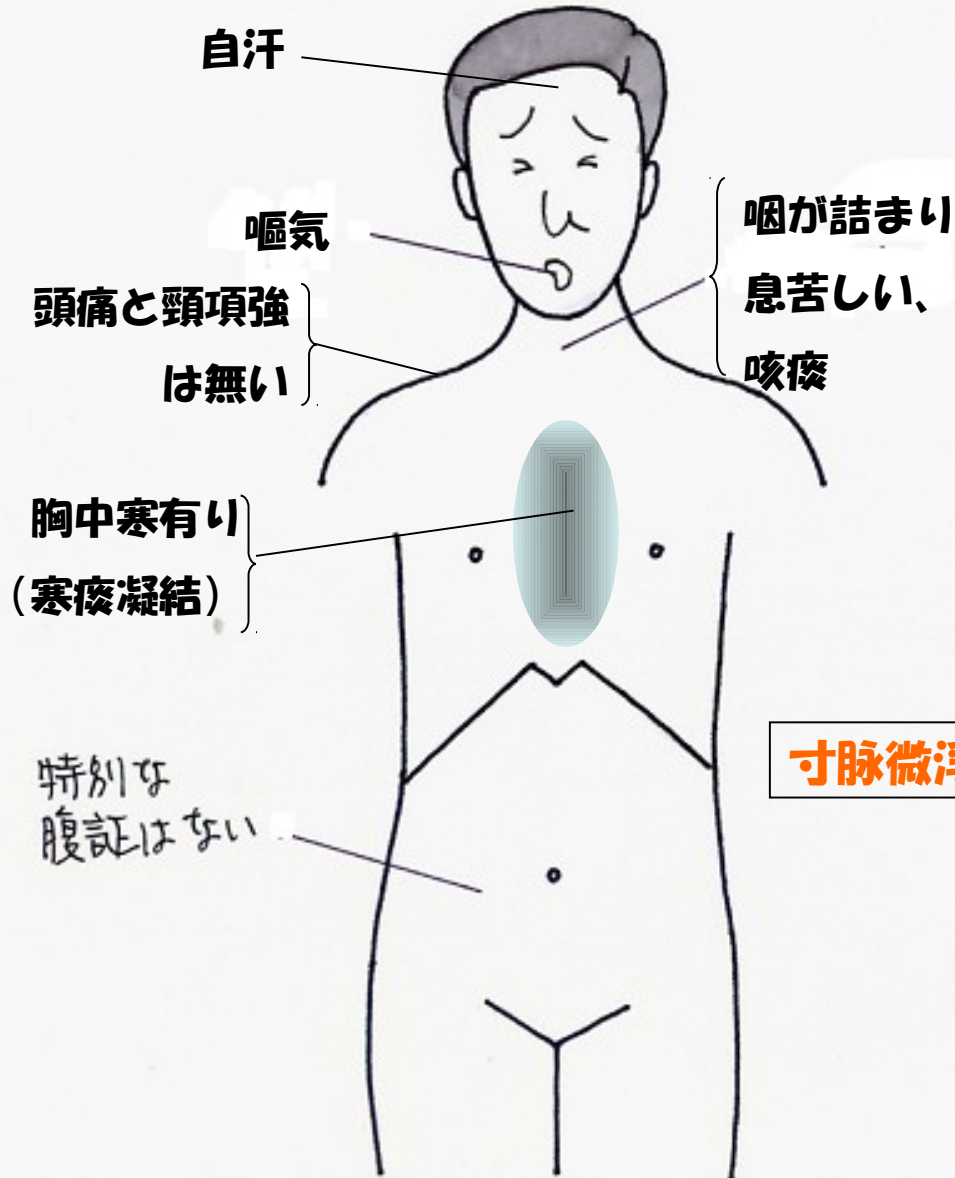
香豉 辛微苦 保護

瓜蒂散の証

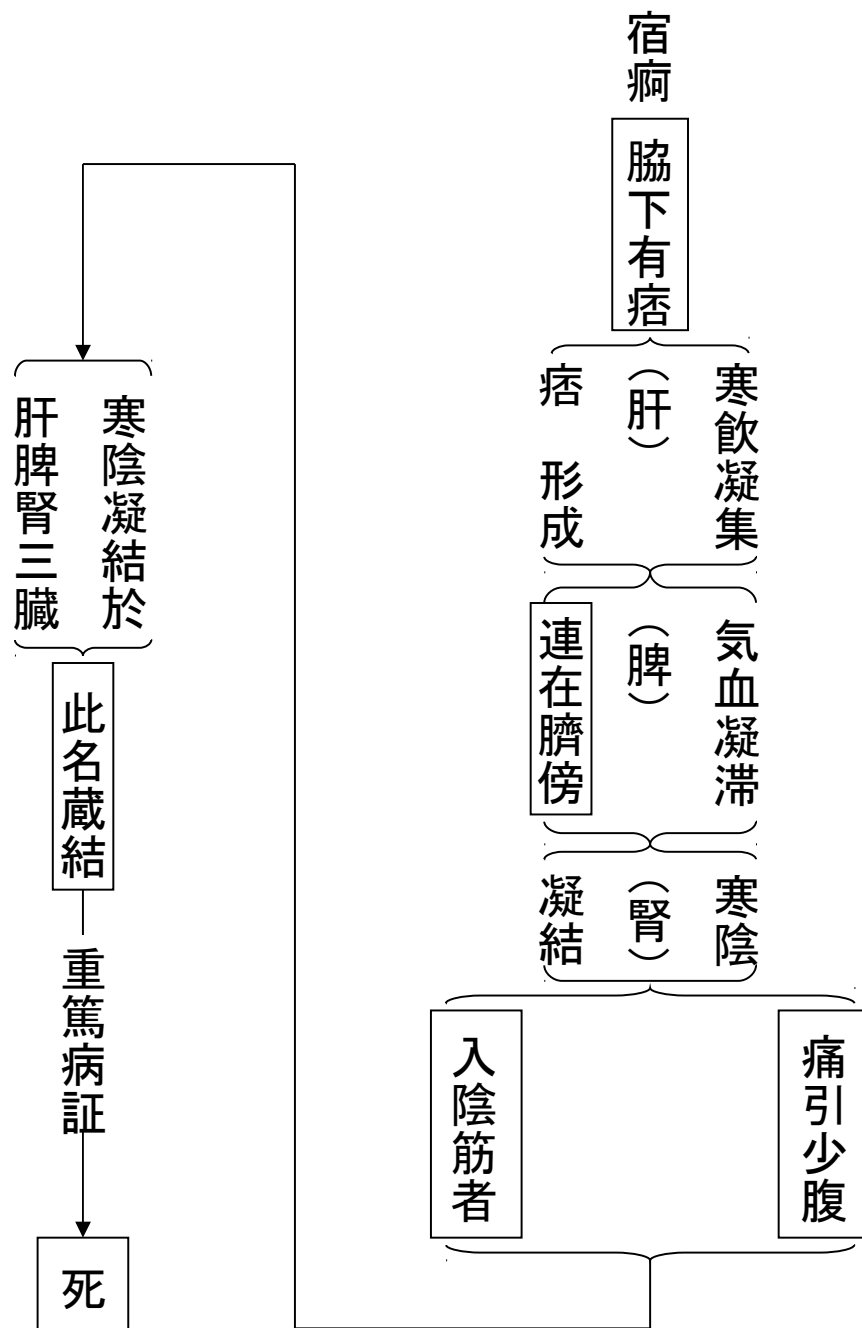
方 意

本来胸膈に寒飲が壅塞している為、胸中に痞鞭を生じ、痰飲が上逆しようとするので胸苦しい、咽喉が詰まって息苦しい、嘔気がある、などの症状がある。

胸中の痰飲停滞に因り衛気の上昇が妨げられる結果、体表の榮衛が不和となって、一見太陽中風証に似た発熱悪寒、自汗などを呈す。脉は微浮で頭痛や頸項強は無い。胸中の実邪は苦酸の剤で吐かせる。



一六七条 病脇下有痞、連在臍傍、痛引少腹、入陰筋者、
此名藏結、死。



第一六八条 傷寒若吐若下後、七八日不解、熱結在裏、表裏俱

熱、時々惡風、大渴、舌上乾燥而煩、欲飲水數升者、

白虎加人參湯主之。

傷寒

誤治

若吐

若下

不解

表邪入裏

熱結在裏

消耗氣津

表裏俱熱

氣津兩虛

熱盛煩躁

渴欲飲水

舌上乾燥

時々惡風

白虎加人參湯

君藥 石膏

清熱止渴

臣藥 知母

清熱滋陰

佐藥 人參

益氣生津

使藥 甘草

補脾止渴

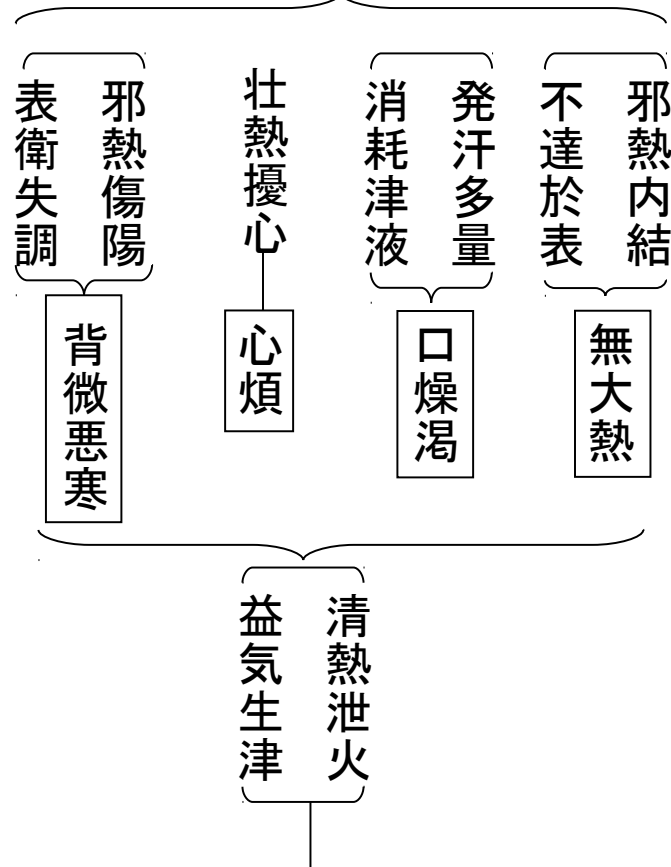
粳米

補脾和胃

第一六九条 傷寒無大熱、口燥渴、心煩、背微惡寒者、白虎加人參湯主之。

太陽
傷寒

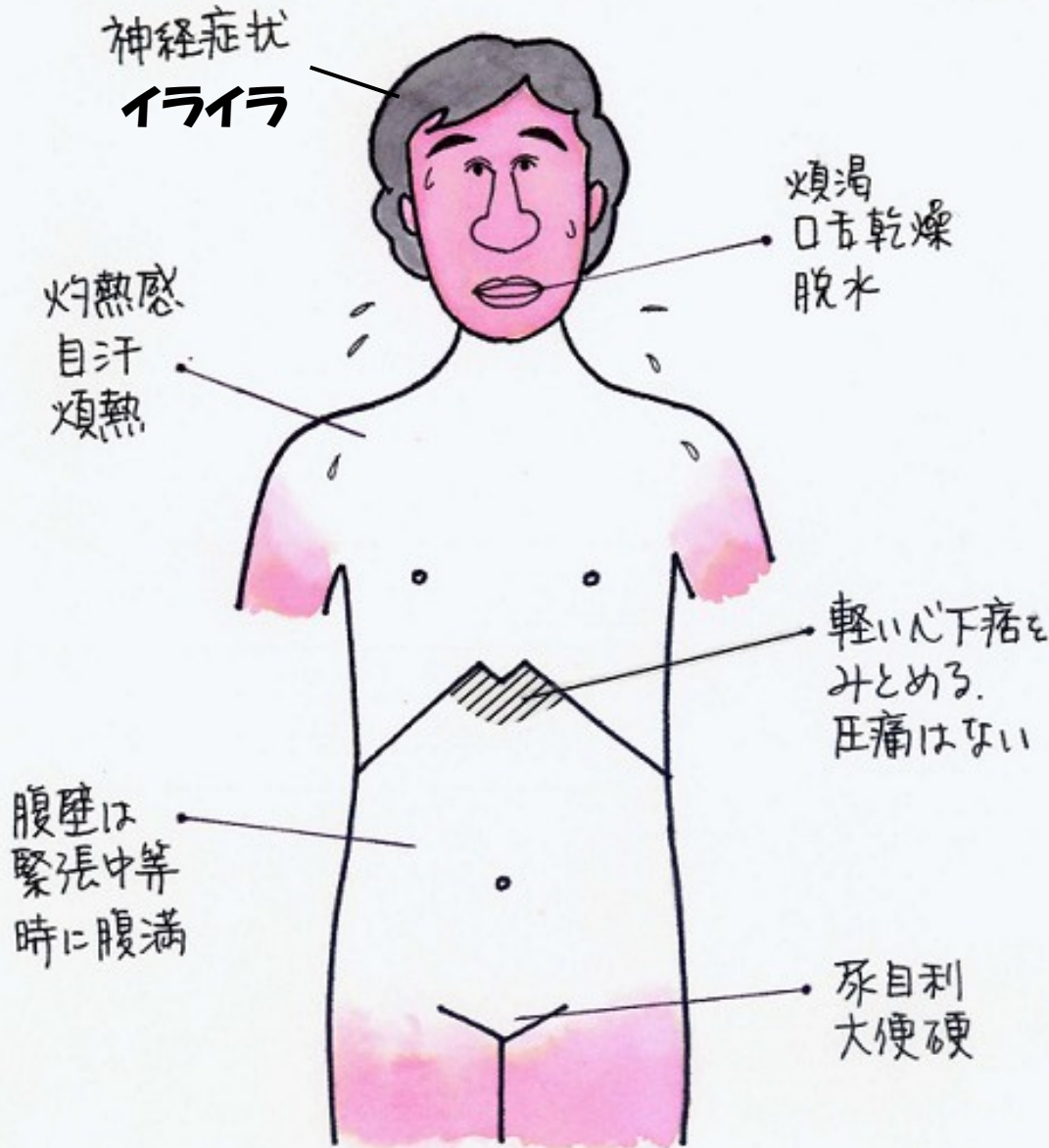
表邪入裏
化熱結衆



白虎加人參湯

石膏	一斤碎	(一五グラム)
知母	六兩	(五グラム)
人參	二兩	(三グラム)
甘草	二兩炙	(ニグラム)
粳米	六合	(ハグラム)

白虎加人參湯の証(再掲) *



白虎湯に人參一味を加えた
ものである。熱と渴が主症状
白虎湯証に似て内外の熱が
盛んで、津液が乏乏し、煩渴し
乾燥脱水の著しい者に用いる。
病位は陽明病 **経証、内外熱盛**
脉は洪大 滑数
舌は口舌乾燥、白苔黄苔

弁証のTrias

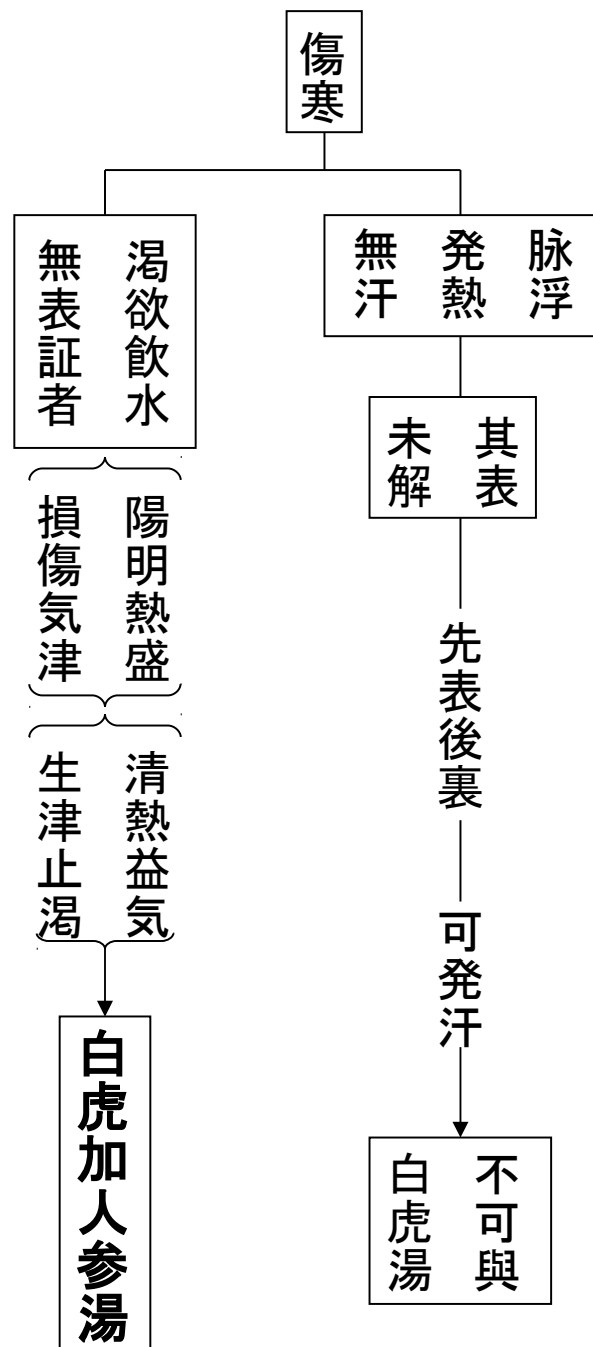
- ・口渴、多汗、尿自利
- ・心下痞
- ・皮膚灼熱感



体の内外ともに熱が旺盛であるが、発汗過多のため
正氣は衰え津液が不足した気陰両虚証である。

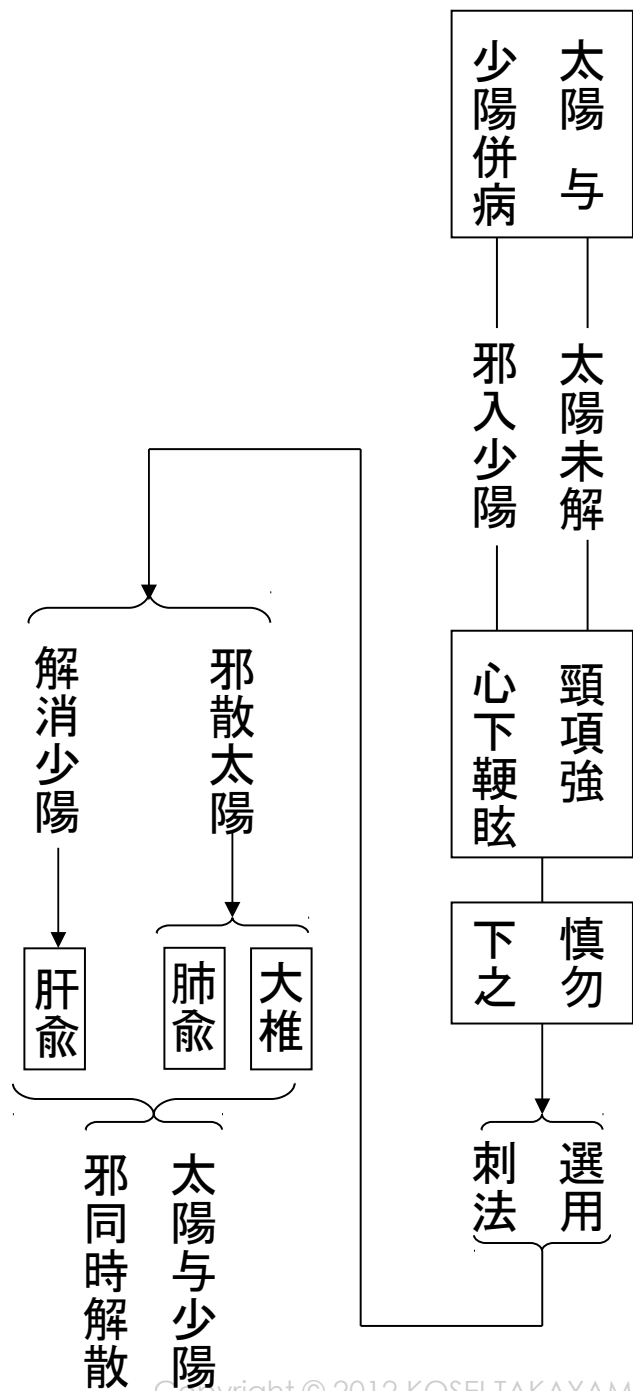
第一七〇条 傷寒脉浮、發熱、無汗、其表不解、不可與白虎湯。

渴欲飲水、無表証者、白虎加人參湯主之。



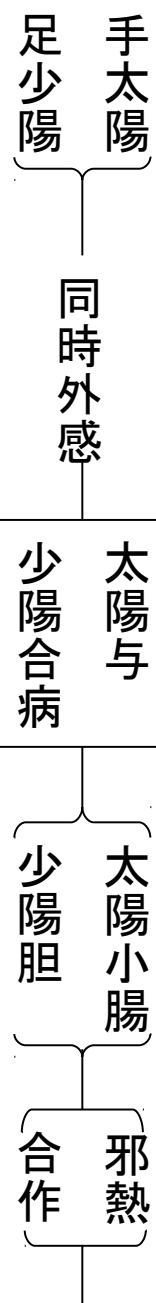
第一七一条 太陽少陽併病、心下鞭、頸項強而眩者、当刺大椎、

肺俞、肝俞、慎勿下之。



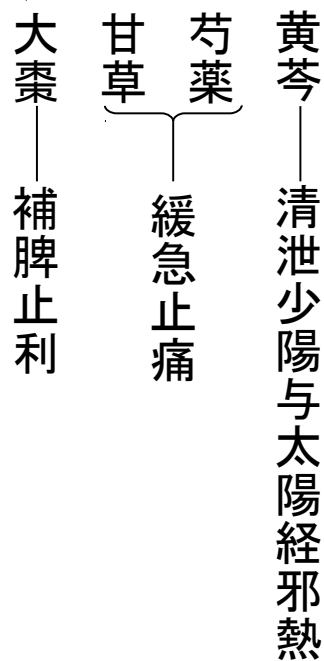
第一七二条 太陽與少陽合病、自下利者、與黃芩湯。

若嘔者、黃芩加半夏生姜湯主之。



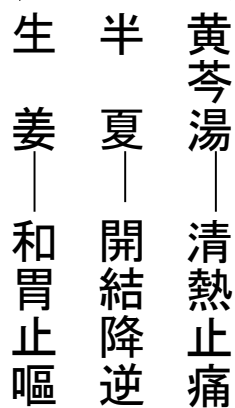
下注大腸

黃芩湯



上行迫胃

黃芩加半
夏生姜湯



黄芩湯の証*

方意

太陽と少陽の合病で熱痢する者。
足少陽胆と手太陽小腸の邪熱が大腸に下注して発熱下痢腹痛を生じる。
また少陽病の特徴として嘔吐がある。
悪心嘔吐が強い場合には本方に半夏、生姜を加味した黄芩加半夏生姜湯を用いる。

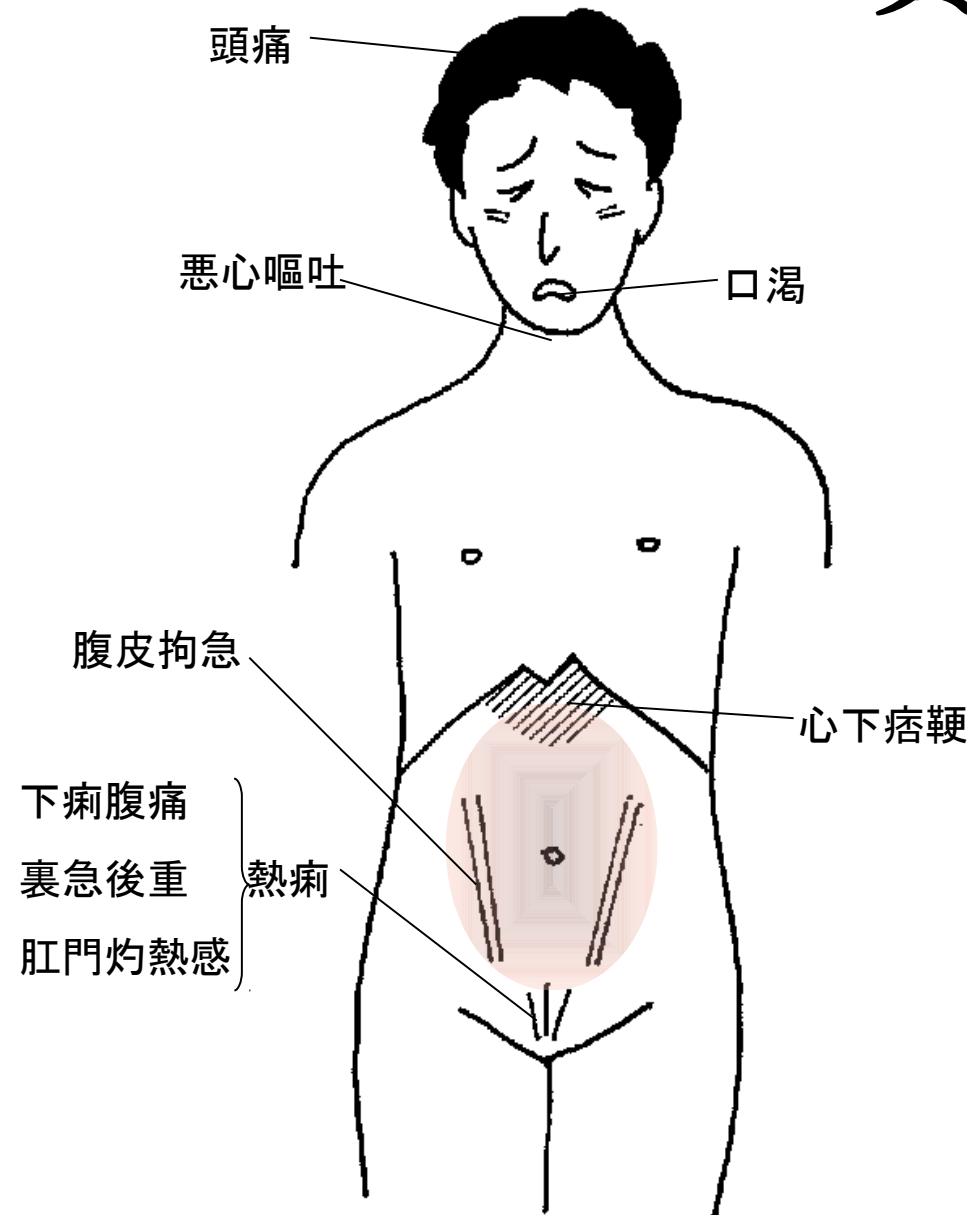
主証：発熱、悪心嘔吐、腹痛、熱痢
（口渇、裏急後重、臭い泥状便）

客証：頭痛、微惡寒、胸脇苦満。

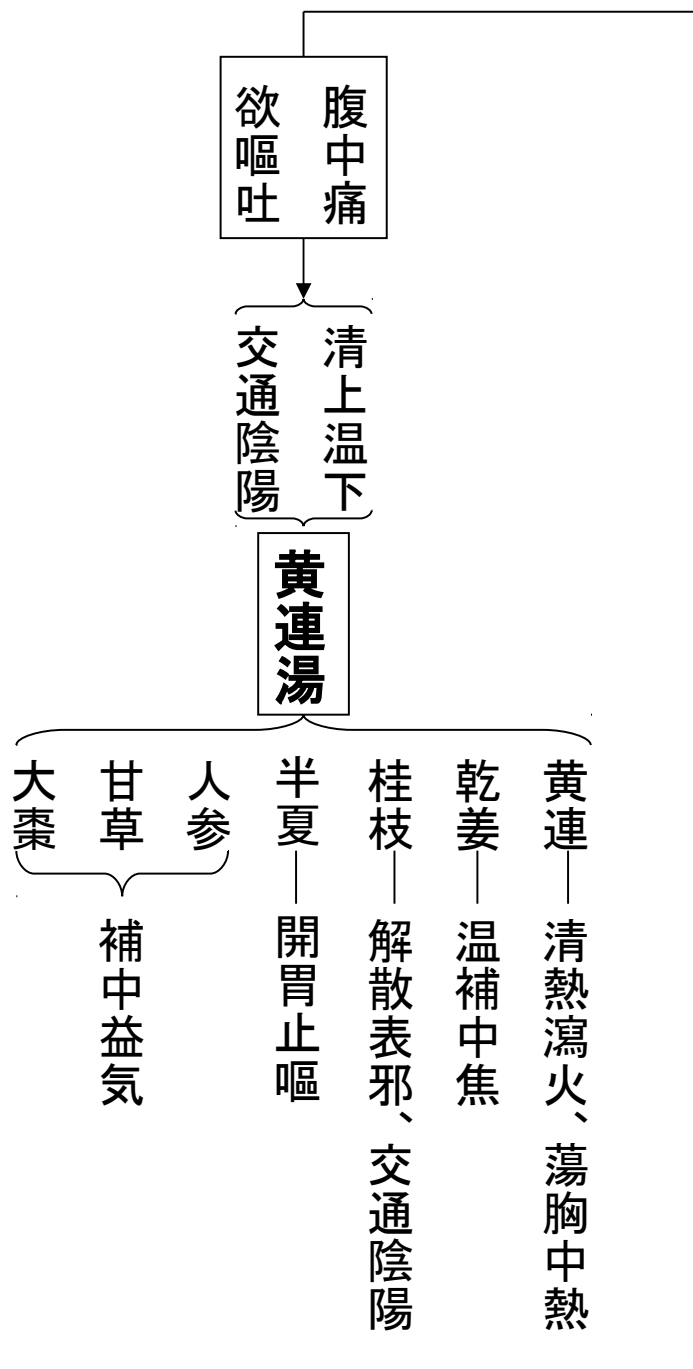
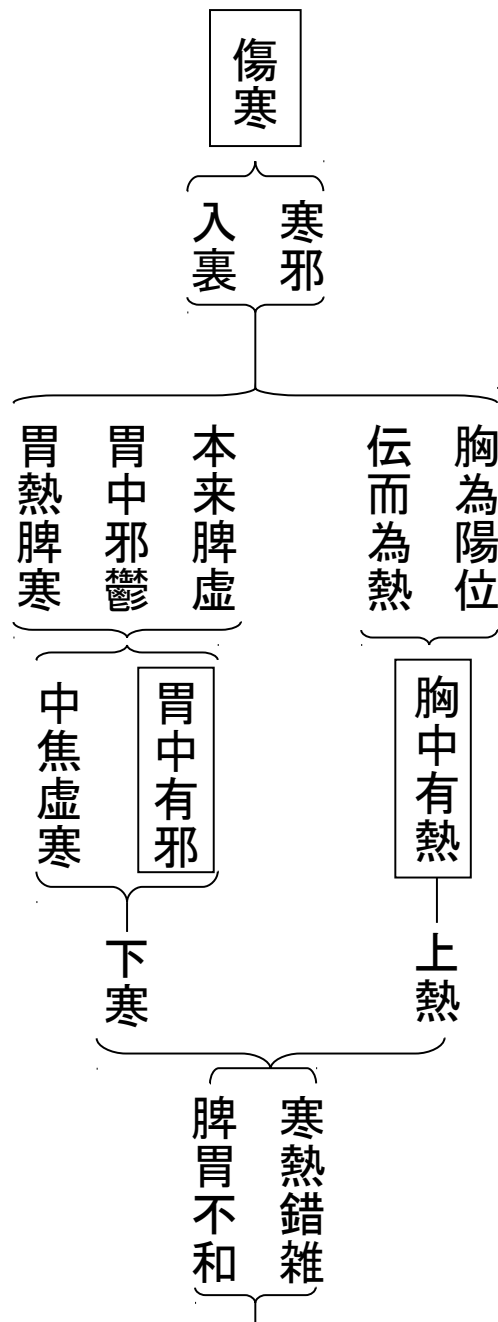
脉は弦數、舌質は紅、苔は黄。

臨床応用

急性胃腸炎、嘔吐下痢症、熱痢の基本処方。



第一七三条 傷寒、胸中有熱、胃中有邪氣、腹中痛、欲嘔吐者、
黃連湯主之。



黄連湯の証*

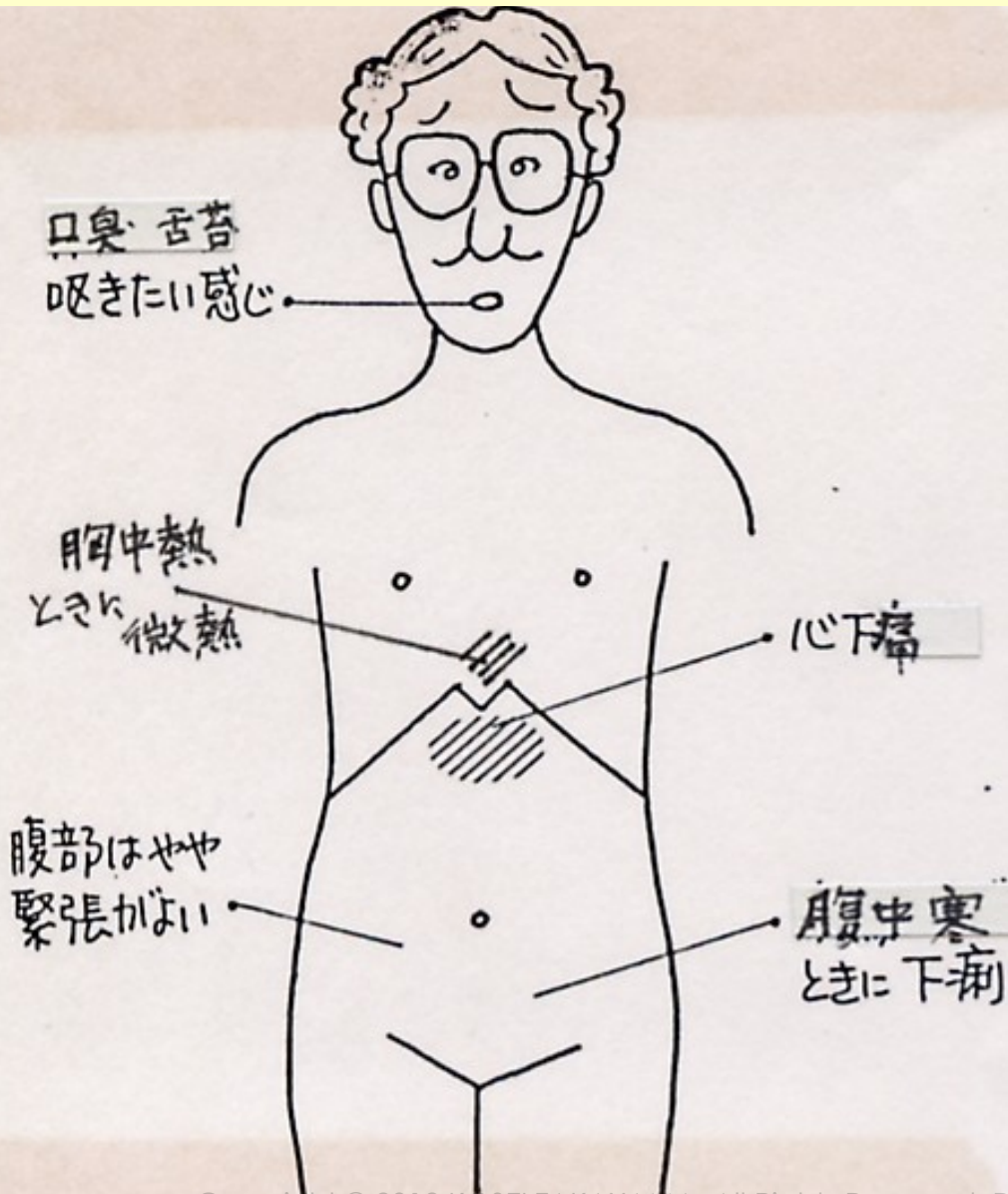
方意

「胸中有熱、胃中有邪氣」すなわち上焦には熱があり、中焦には寒邪が有る上熱下寒の状態であり、一方中焦の脾胃では寒邪のため脾胃の気の昇降が失調し、脾胃の不和が生じている。

その結果、体表や胸部では若干熱があり、腹部では下痢腹痛や、悪心嘔吐を生じる。

弁証のキーワード

- 1) 微熱、軽いカゼ症状
- 2) 悪心、嘔吐、心下痛
- 3) 時に下痢腹痛



第一七四条 傷寒八九日、風湿相搏、身体疼煩、不能自轉側、

不嘔、不渴、脉浮虛而澹者、桂枝附子湯主之。

若其人大便鞭、小便自利者、去桂加白朮湯主之。

風邪客表 脉浮
表衛不足 虚脈
湿邪經絡 身体疼煩
氣血阻滯 不能轉側
非少陽病 不嘔
非陽明病 不渴

桂枝附子湯

桂枝 驅風發汗、溫經通陽
附子 扶陽散寒、逐湿止痛
生姜 散寒除濕
甘草 補養正氣、調和藥性
大棗

傷寒八九日
風湿相搏

風湿兩邪
侵襲經絡

湿邪深達

脾陽損傷
痰飲內蓄
大便鞭
尿自利

不要發汗
溫裏利水

去桂白朮湯

白朮 補氣健脾、利濕
附子 扶陽散寒、逐湿止痛
生姜
甘草 補脾散寒、利濕
大棗

桂枝附子湯の証

方意

風・寒・湿の邪が体表を侵襲し、経脈の気血を阻害して、筋肉や関節に疼痛を生じる**痺証**で、体が冷え、関節や筋肉疼痛で寝返りもできない。

脉は浮で虚弱、舌質は淡白、苔は湿潤。

処方桂枝湯より芍薬を除き附子を加える。

もし汗無く、大便が鞭くなり小便自利の時は本方より桂枝を去り白朮を加えた去桂加白朮湯を用いる。

弁証のTrias

- 1) 冷え、発熱悪寒、筋肉痛、関節痛。
- 2) 全身が重く、関節が硬直する。
- 3) 口渇や嘔吐は無い。



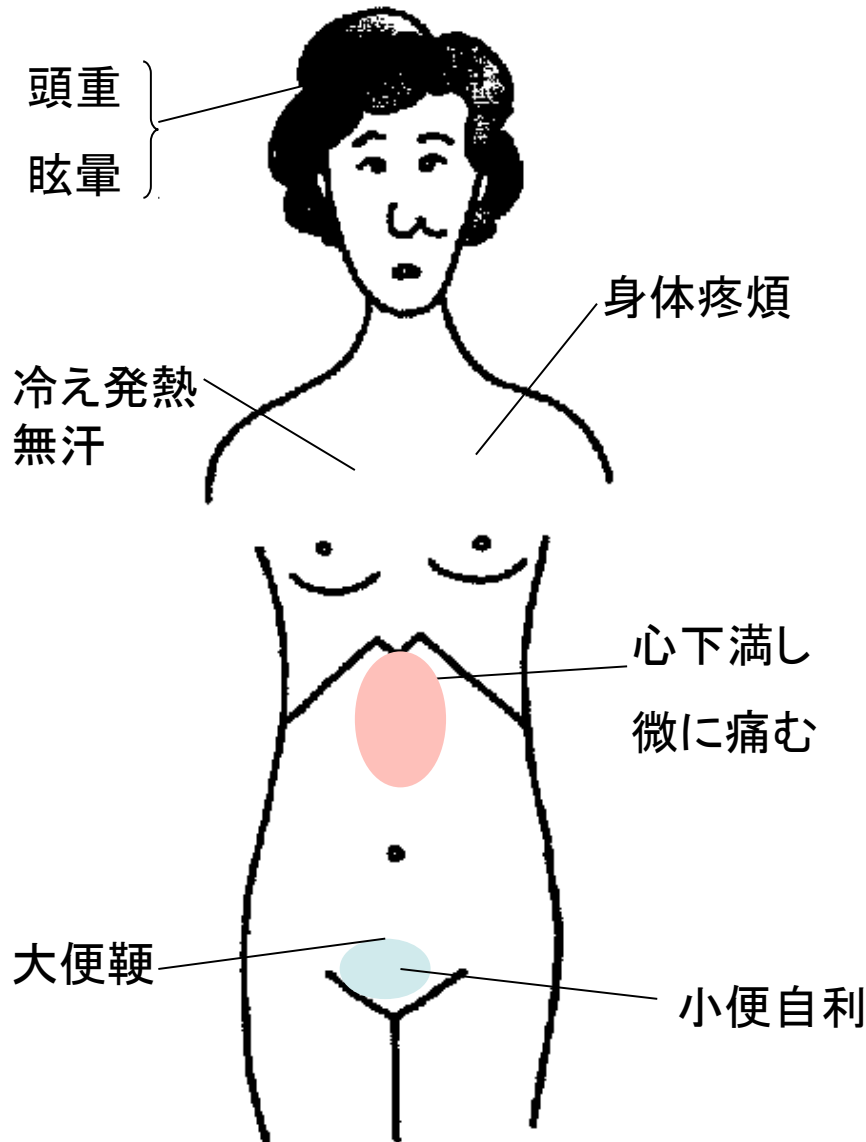
去桂加白朮湯の証

方意

風・寒・湿の邪が相雑って体表を侵襲し、
経脉に客して気血の流通を阻滞して、
筋肉や関節の動きを障害し、痛みや痺れを生じる痺証の処方である。
桂枝附子湯より桂枝を去り白朮を加え、
湿邪が表よりさらに深く達し、裏の陽氣が
虚し、脾に痰飲が停滞し脾胃の健運も失調する結果、汗が出ず尿自利して大便も
鞭くなり通じない者に用いる。

弁証のTrias

- 1) 痺証で関節や筋肉痛
- 2) 小便自利、大便鞭して便秘
- 3) 痰飲停滞、浮腫傾向



第一七五条 風湿相搏、骨節疼煩、掣痛不得屈伸、近之則痛劇、

汗出短氣、小便不利、惡風不欲去衣、或身微腫者、

甘草附子湯主之。

風寒湿
邪外感

風湿相搏

風寒湿邪
相結侵襲

侵入關節

筋肉拘攣

氣血凝滯

骨節疼煩

不得屈伸

近之激痛

体表榮衛

損傷不和

惡風

不欲去衣

湿邪停滯

三焦失調

汗出短氣

小便不利

身微浮腫

溫經散寒
祛風除濕
通絡止痛

甘草附子湯

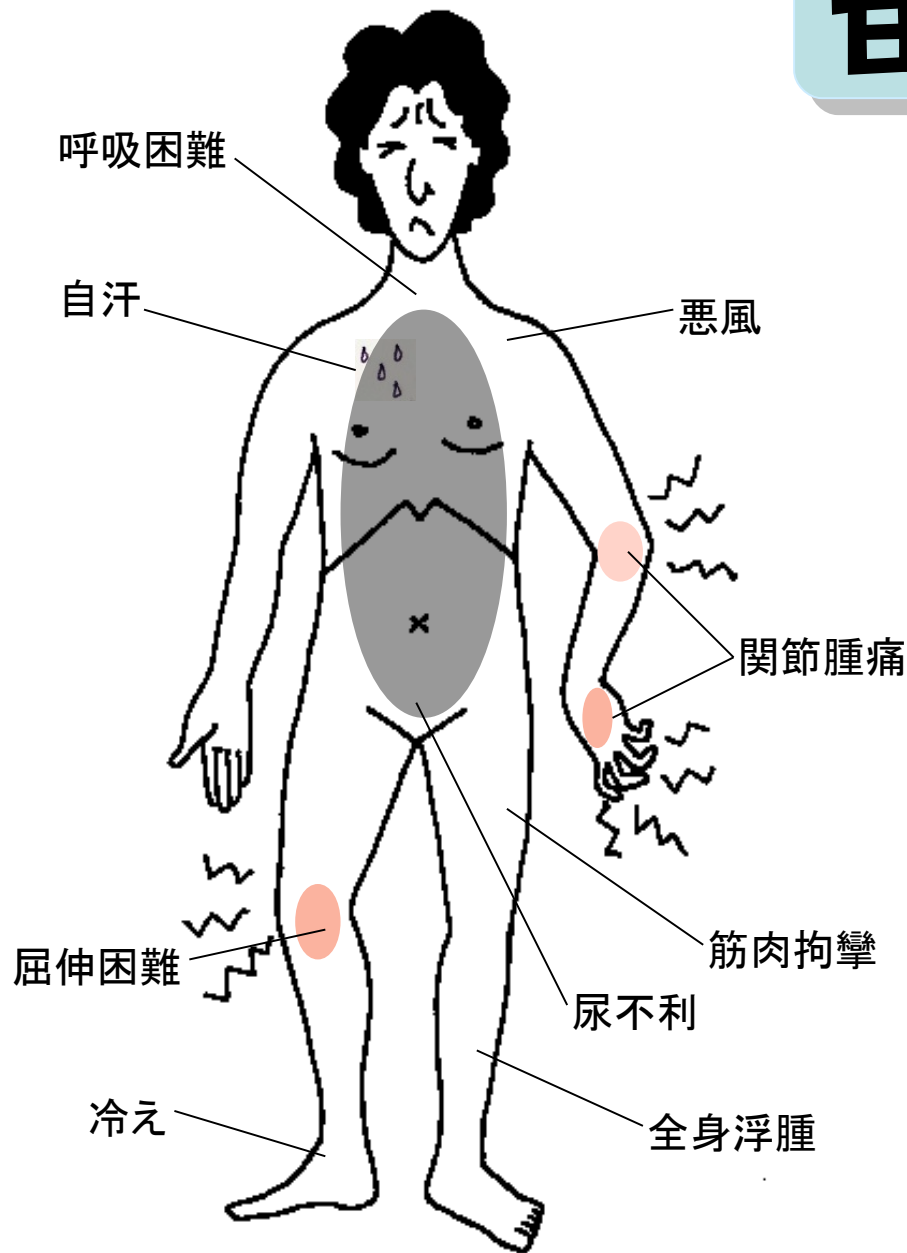
桂枝 驅風發汗・溫經通陽

附子 扶陽散寒・逐濕止痛

白朮 補氣祛濕・驅除風水

甘草 緩急和藥・藥効深達

甘草附子湯の証



方 意

風邪が体表に侵襲し体内の痰飲と結合して「風湿相搏ち」皮下、筋肉、関節の経脈の気血の流通を阻害するので、全身が冷えて、自汗、浮腫、呼吸困難、尿利減少などを呈し、さらに関節や筋肉の痛みや硬直が耐え難い苦痛を伴う。痺証の中では最も症状が激烈である。

処 方

君薬：附子2枚、温経散寒、補陽止痛。

臣薬：桂枝4両、温経通陽、驅風固衛。

佐薬：甘草2両、緩急止痛、薬効深達。

使薬：白朮2両、補気祛湿、除去風水。

第一七六条 傷寒脉浮滑、此以表有熱、裏有寒、白虎湯主之。

傷寒

邪入漸
深化熱

陽明病

表熱
裏熱

脉浮
脉滑

內外俱
清泄內外
熱盛
旺盛邪熱

白虎湯

石膏 肺胃氣分清熱
知母 清熱滋陰
甘草 寒性緩和
粳米 補脾扶胃

第一七七条 傷寒脉結代、心動悸、炙甘草湯主之。

正氣
不足

外邪

傷寒

表証不顯
少陰心傷

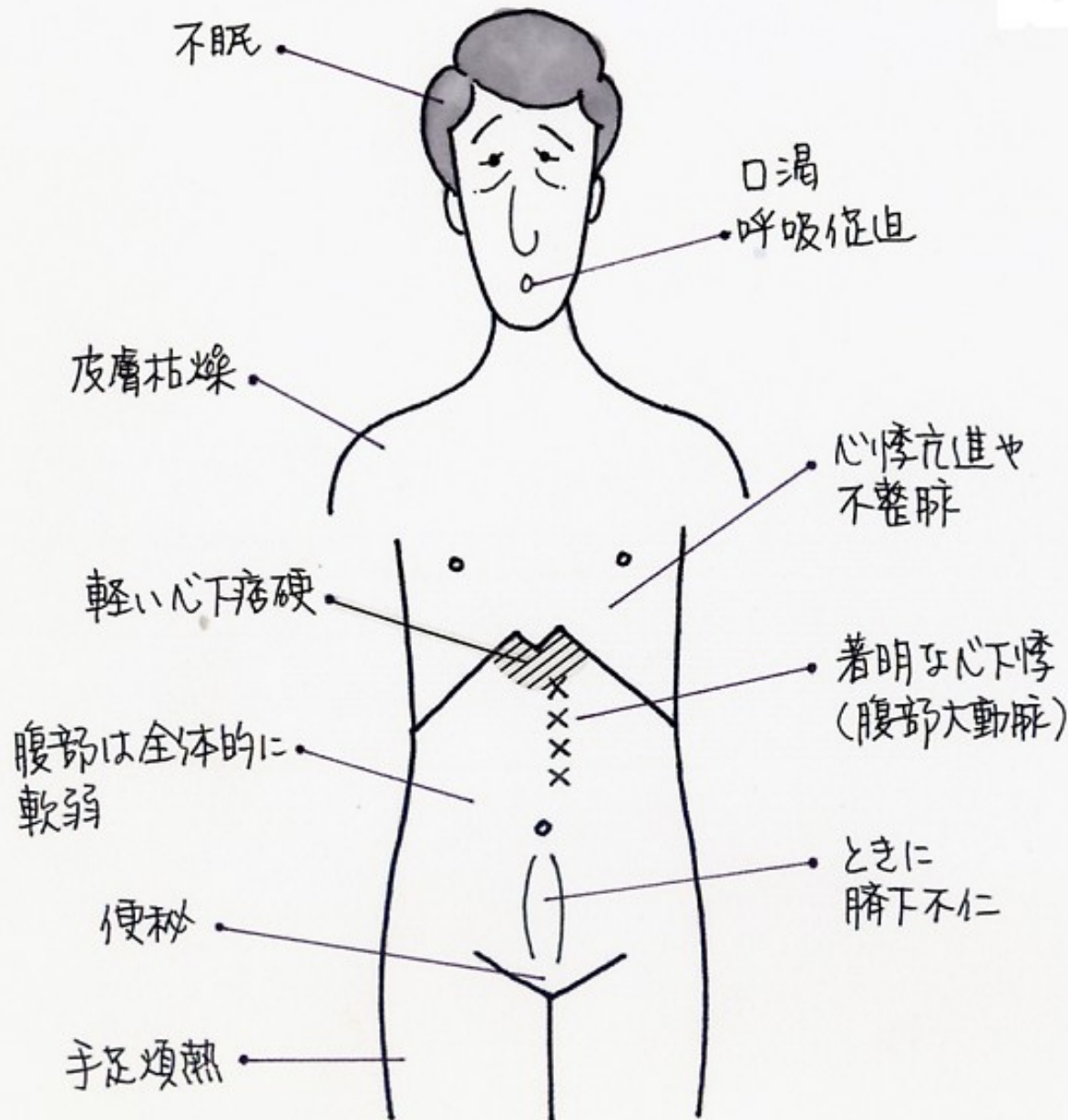
心氣血不足
脉結代
心陰陽虛衰
心動悸

炙甘草湯

通陽復脉
滋陰補血
安神鎮悸

蜜炙甘草 通心脉、利氣血
人參・大棗 補心氣
麥門・乾地 潤燥補血
麻仁・阿膠 滋補心陰
桂枝・甘草 純陽辛通
生姜・清酒 調和心陰陽

炙甘草湯の証*



方 意

気血両虚で正気の不足した人が傷寒の邪に侵されて、邪が太陽経で解されず、少陰心に伝入して心の陰陽気血を傷り、動悸や不整脈を生じたものである。

主 証: 脉結代、心動悸

客 証: 肺痿、涎唾多く、心中慍慍(胸悶)

脉は不整或は虚数。

舌は淡紅、無或は薄苔。

腹は軟弱無力、心下悸。

第一七八条 脉按之来緩、時一止復来者、名曰結。

又脉来動而中止、更来少数、中有還者反動、名曰結、陰也。

脉来動而中止、不能自還、因而復動者、名曰代、陰也、得此脉者必難治。

脉結代

代脉

脉来動而中止 不能自還因復動
(脈拍必欠落有 自然回復無シ)

臟腑虚損
心陽不足

結脈

按之来緩 時一止復来
(遲緩脉) (脉欠落直後回復)
脉来動而中止 更来少数、中有還
(不整脈複数出現、自然回復有)

陰寒偏盛
氣血凝滯

陰也。得此脉
者必難治

(太陽病下篇 終り)